

富田林埋蔵文化財調査報告 27

平成7年度

富田林市内遺跡群発掘調査報告書

1996・3

富田林市教育委員会

はじめに

富田林市は、市域の中心に石川が流れ、緑豊かな丘陵と美しい田園風景が調和した自然環境に恵まれた町です。この美しい環境も開発の波をとめることはできず、発掘調査が相次ぎ、遺跡の数も160箇所を越えるものとなりました。

さて、本書は平成7年度に実施しました国庫補助事業の発掘調査報告書です。

今回、報告しますのは従来から弥生時代中期の遺跡として注目されてきた甲田南遺跡と縄文時代から近世に至る遺跡として著名な錦織南遺跡であります。とりわけ甲田南遺跡では新たに方形周溝墓群、竪穴式住居跡群が発見されるなど、集落構造を解明するのに重要な遺構が見つかり、弥生時代の甲田南遺跡の全体像がますます、明らかになってまいりました。

また、錦織南遺跡では多量の奈良時代の土器の中に「安」という文字の刻まれた土器が見つかるなど、錦部郡の性格にせまる資料が発見されました。今回の調査は小規模の調査ではありましたが、これらの出土品が、奈良時代のこの地域の性格の解明に寄与するものと確信しております。

最後になりましたが、調査にご理解、ご協力いただきました関係各位にお礼を申しあげるとともに、今後とも文化財保護にご理解とご協力くださいますようお願いいたします。

平成8年3月

富田林市教育委員会

教育長 清水 富夫

例 言

1. 本書は、富田林市教育委員会が平成7年度に、国庫および府費の補助をうけ、実施した緊急発掘調査の報告書である。
2. 調査は富田林市教育委員会文化財保護課、今西淳・栗田薫・平方扶左子を担当者とし、平成7年4月1日に着手し、平成8年3月31日に終了した。
3. 本書で使用した方位と標高は、すべて磁北と東京湾標準潮位で表示した。
4. 遺物は各遺跡毎に土器、土製品、石器のそれぞれに通し番号を付した。また、それぞれの縮尺率は土器が1/4、土製品および石器が2/3である。
5. 本書の執筆は目次に記す者があつた。なお、本書の編集は栗田薫を中心に田川友美が補佐した。
6. 本書の作成にあたって、土器および土製品の実測は田川友美・楠木理恵・頓宮貴美恵が、石器の実測は栗田薫・岩瀬訓子が行つた。また、製図は栗田が、遺構の写真撮影は今西、平方が、遺物の写真撮影は中西和子が行つた。
7. 出土遺物および各種記録類は富田林市市立埋蔵文化財センターで保管している。
8. 調査の実施および本書の作成にあたっては、下記の諸氏に協力を得た。ここに記して感謝します。

山中一郎（京都大学）、深沢芳樹（奈良国立文化財研究所）、小林義孝（大阪府教育委員会）、西山昌孝（千早赤坂村教育委員会）、山田幸弘（藤井寺市教育委員会）

発掘調査参加者

岩瀬訓子・楠木理恵・高木信子・田川友美・田中学・頓宮貴美恵・
西野繁太郎・山本節子

本文目次

はじめに

例言

I 甲田南遺跡

1. 調査に至る経過(栗田薫) … 1
2. 調査の方法(栗田) … 2
3. 調査区の基本層序(栗田) … 2
4. 遺構(今西淳・平方扶左子・田川友美・栗田) … 3
 - 1 方形周溝墓群 4
 - 2 竪穴住居跡群 5
 - 3 溝 11
 - 4 建物 11
 - 5 土壇 12
 - 6 ピット 13
5. 遺物(栗田) … 14
 - 1 土器 14
 - 2 土製品 29
 - 3 石器 30
6. まとめ(栗田) … 40
7. 考察—甲田南遺跡の弥生時代集落の歴史的意義—(栗田) … 42

II 錦織南遺跡

1. 調査に至る経過(栗田) … 56
2. 調査の方法(平方) … 57
3. 調査区の基本層序(平方) … 58
4. 遺構(平方・田川) … 58
5. 遺物(栗田) … 60
6. まとめ(栗田) … 62

挿 図 目 次

図1	甲田南遺跡発掘調査地位置図	1
図2	甲田南遺跡調査区位置図	2
図3	第4・5・6トレンチ遺構平面図	3
図4	第1トレンチ遺構平面図・断面図	4
図5	方形周溝墓周溝底配石状況平面図・断面図	5
図6	第2トレンチ遺構平面図・断面図	7・8
図7	第3トレンチ遺構平面図・断面図	9・10
図8	建物1出土土師器	12
図9	方形周溝墓周溝内出土弥生土器	15
図10	3号住居跡出土弥生土器	16
図11	4・5・6号住居跡出土弥生土器	18
図12	溝1・6, ピット53弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器	20
図13	土坑5・6・8出土弥生土器・土師器・黒色土器	23
図14	ピット54出土土師器・黒色土器	24
図15	第2トレンチ整地層出土弥生土器	25
図16	第2トレンチ整地層出土弥生土器・須恵器・土師器・瓦	26
図17	第3トレンチ整地層出土弥生土器・須恵器・土師器	28
図18	第3トレンチ整地層出土黒色土器・瓦器・白磁・緑釉陶器・製塩土器	29
図19	紡錘車・円盤	30
図20	石鏃・石槍・石錐・石小刀	32
図21	削器	33
図22	削器	35
図23	削器	37
図24	石包丁・砥石	39
図25	甲田南遺跡周辺の弥生時代の遺構検出状況	43
図26	甲田南遺跡周辺地形図と弥生集落概念図	45
図27	甲田南遺跡弥生集落の居住域変遷図	47
図28	錦織南遺跡発掘調査地位置図	56
図29	錦織南遺跡調査区位置図	57
図30	第1・2トレンチ断面図	58
図31	第3トレンチ遺構平面図・断面図	59
図32	出土土器	61

表 目 次

表 1	建物柱穴一覧表	12
表 2	土壙一覧表	12
表 3	ピット一覧表	13
表 4	甲田南遺跡住居跡・土壙変遷 (案)	41
表 5	甲田南遺跡出土土器観察表	50~55
表 6	錦織南遺跡土壙・ピット一覧表	59
表 7	錦織南遺跡土器観察表	63

図 版 目 次

図版 1	甲田南遺跡 (K D S 94) 調査区全景航空写真
図版 2	(上) K D S 94 第 1 トレンチ全景 南から (下) K D S 94 第 1 トレンチ方形周溝墓周溝全景 南東から
図版 3	(上) K D S 94 第 1 トレンチ方形周溝墓周溝内遺物出土状況 東から (下) K D S 94 第 1 トレンチ方形周溝墓周溝内遺物出土状況 北東から
図版 4	(上) K D S 94 第 2 トレンチ全景 西から K D S 94 第 2 トレンチ全景 東から (下) K D S 94 第 3 トレンチ全景 北から K D S 94 第 3 トレンチ溝 4 全景 北から
図版 5	(上) K D S 94 第 3 トレンチ北半部近景 南から K D S 94 第 3 トレンチ南半部近景 北から (下) K D S 94 第 5 トレンチ全景 北から K D S 94 第 6 トレンチ全景 北から
図版 6	K D S 94 弥生土器
図版 7	(上) K D S 94 須恵器・土師器 (中) K D S 94 紡錘車・円盤 (下) K D S 94 石包丁・砥石
図版 8	(上) K D S 94 石鎌・石槍・石錐・石小刀 (表面) (下) K D S 94 石鎌・石槍・石錐・石小刀 (裏面)
図版 9	(上) K D S 94 削器 (表面) (下) K D S 94 削器 (裏面)
図版 10	(上) K D S 94 削器 (表面)

(下) K D S 94 削器 (裏面)

図版11 (上) K D S 94 削器 (表面)

(下) K D S 94 削器 (裏面)

図版12 (上) 錦織南遺跡 (N K S 95) 第1トレンチ全景 南から

N K S 95 第2トレンチ全景 南から

(下) N K S 95 第2トレンチ東壁断面 西から

図版13 (上) N K S 95 第3トレンチ全景 南から

(下) N K S 95出土遺物

I 甲田南遺跡

1. 調査に至る経過 (図1)

甲田南遺跡は市域の中央を南北に貫流する石川左岸の河岸段丘上にひろがる弥生時代の集落址の一つである。1975年富田林市下水道局が実施した下水道本管の埋設工事時に大量の土器を検出し、初めて弥生時代の遺跡として確認された。以来、国道309号線富田林バイパスの建設、府営甲田住宅の立て替えなどの公共事業、マンション建設などの民間開発にともなって富田林市教育委員会と大阪府教育委員会で発掘調査が行われ、弥生時代から中世にいたる甲田地域のあり方が明らかにされつつある。

今回は甲田南遺跡が弥生時代中期の集落址として本格的に注目される契機になった大阪府教育委員会の1981年度に行った調査(国道309号線富田林バイパス建設に伴う調査)の水路をはさんだすぐ南側を店舗建設工事に先立つ発掘調査として実施した。

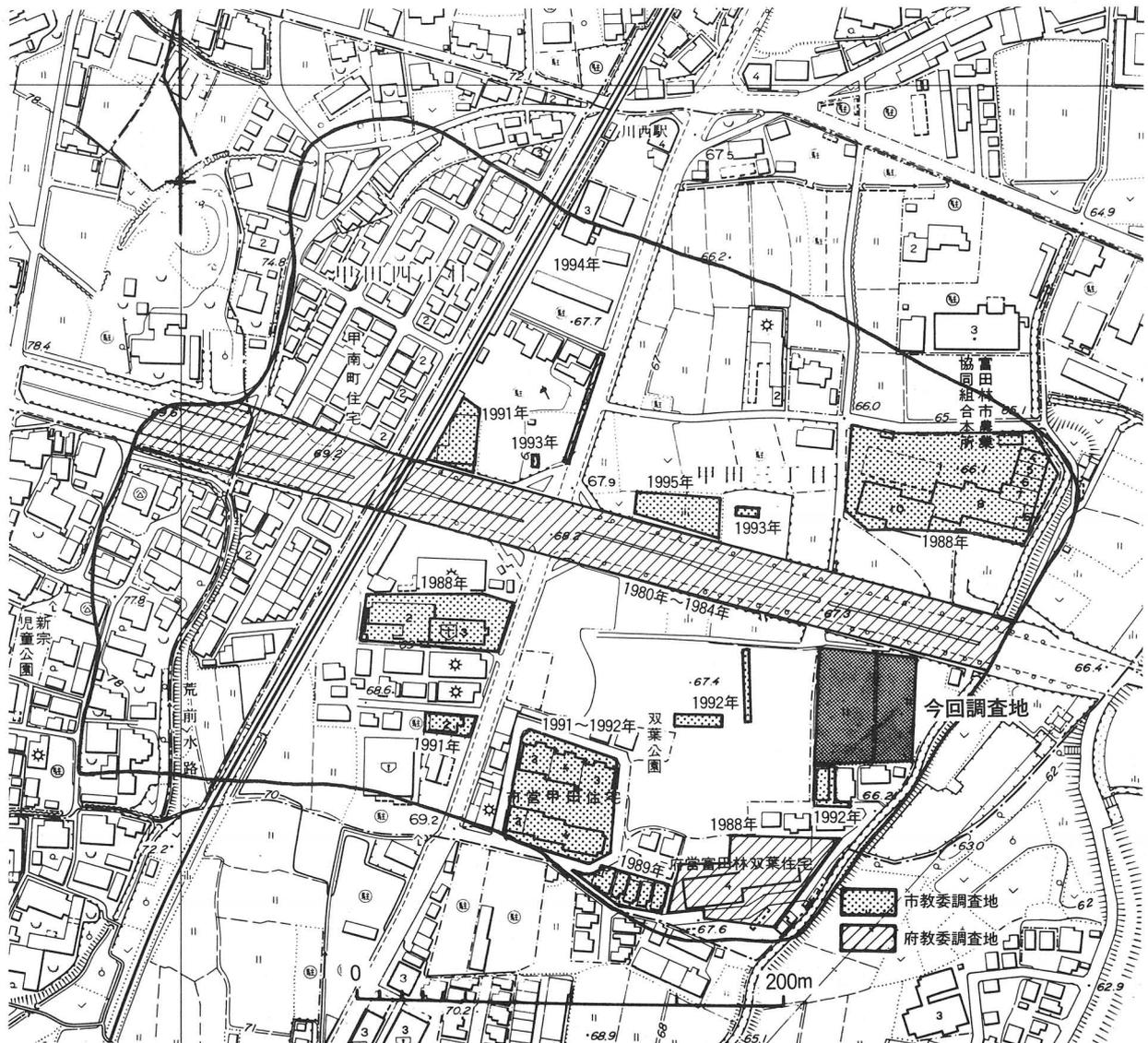


図1 甲田南遺跡発掘調査地位置図

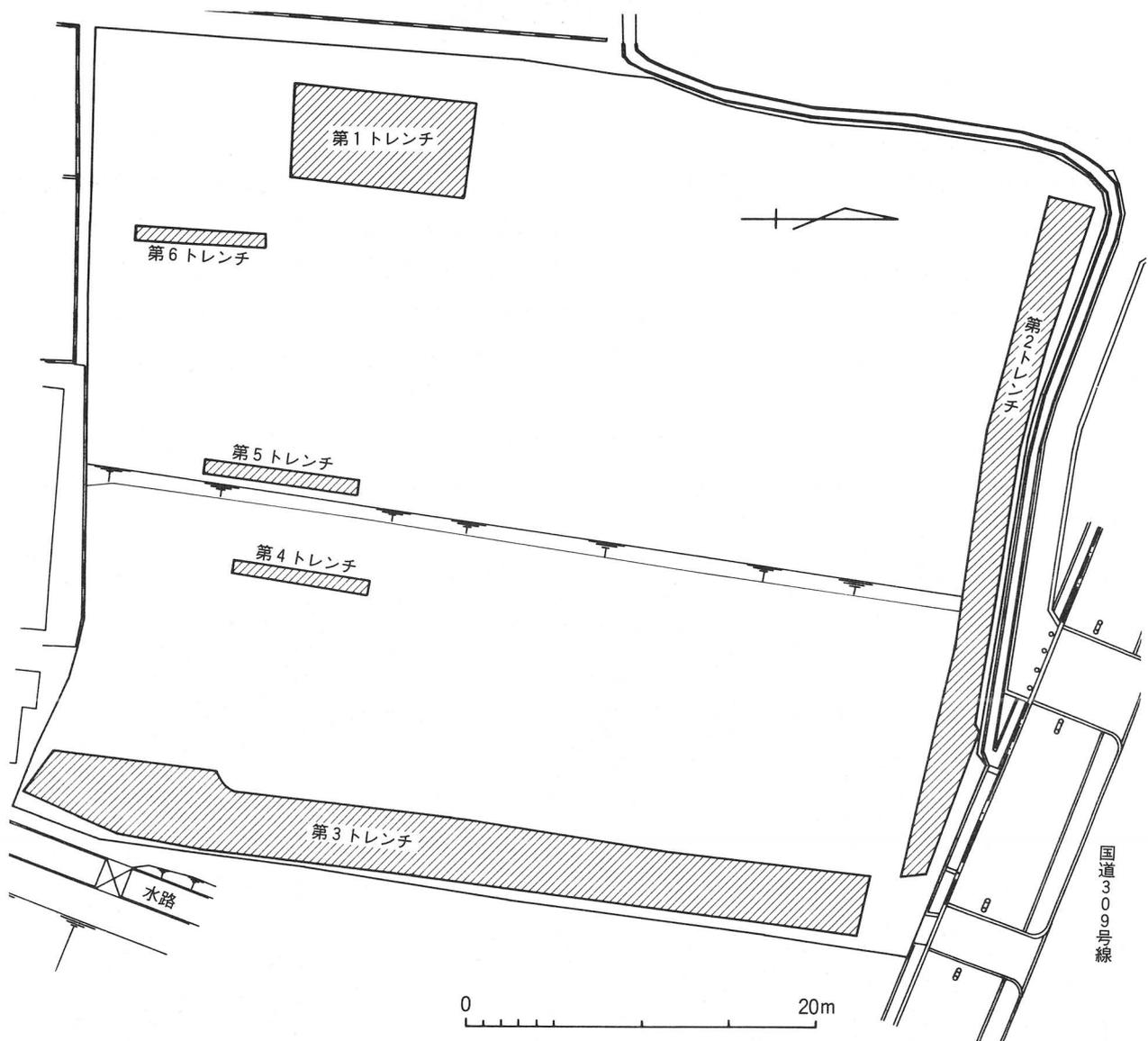


図2 甲田南遺跡調査区位置図

2. 調査の方法 (図2)

調査地は富田林市甲田58・61-1で、調査面積は313.9㎡である。

調査は当初、浄化槽部分と壅壁部分についてだけ発掘調査を行うこととし、合計3本のトレンチを設定した。第1トレンチは調査区の南西部に10.5m×5.5mの規模で、第2トレンチは調査区の北端に接して20m×2.5mの規模で、第3トレンチは調査区の東端に接して4.5m×48mの規模で設定した。その後、第1トレンチで弥生時代の方形周溝墓群が検出されたことから、方形周溝墓群の広がりを確認するため、第4トレンチ、第5トレンチ、第6トレンチを新たに設け、平面的な確認だけではあるが遺構の検出につとめた。

3. 調査区の立地と基本層序

本調査区は、前述の1981年度の国道309号線富田林バイパス建設に伴う調査で弥生時代の竪穴住居群が広がることが確認されていたことから、それらに続く南側の状況を把握することを目的に

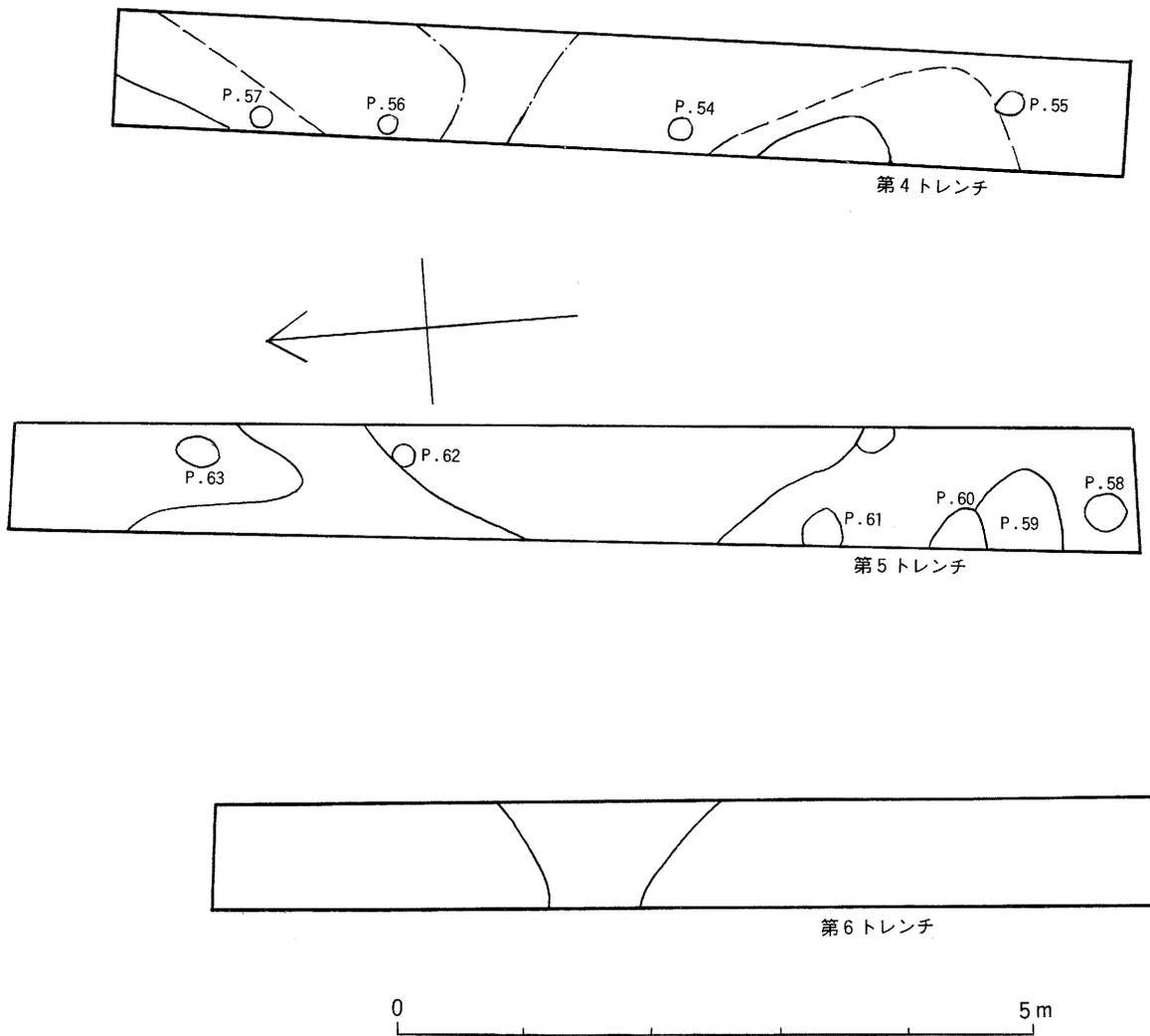


図3 第4・5・6トレンチ遺構平面図

において調査をおこなった。

調査区の現況は水田で、調査区のほぼ中央を境に東側で水田が一段（約30cm）低くなっている。これは当該地の地形が西から東に向かって緩やかに傾斜していることに起因するが、本調査区の堆積状況も西側で薄く、東側で厚い堆積層が認められた。

基本層序は上から順に現耕土（1）、床土（2）、旧耕土（3・5）、旧床土（4・6）、整地層（7）で、これらを取り除くと地山面に達する。遺構はすべてこの地山面で検出した。

調査区の堆積状況は前述のとおり西側で薄く、東側で厚いため、層順こそ変わらないものの、各トレンチで堆積枚数に若干の差違を見せている。すなわち、第1トレンチでは現耕土と床土、旧耕土層を取り除くとすぐに地山面に達するが、第2トレンチでは現耕土と床土の下に、西側部分では1枚の旧耕作面が、東側端部分では2枚の旧耕作面が認められ、その下から多量の弥生土器を含む整地層があり、その下で地山面が認められた。第3トレンチでは現耕土と床土の下に2枚の旧耕土面と奈良時代から鎌倉時代の土器を含む整地層下に地山面が認められた。これらのことから西側部分は現耕土造成時にかなりの削平が行われていたことがわかる。

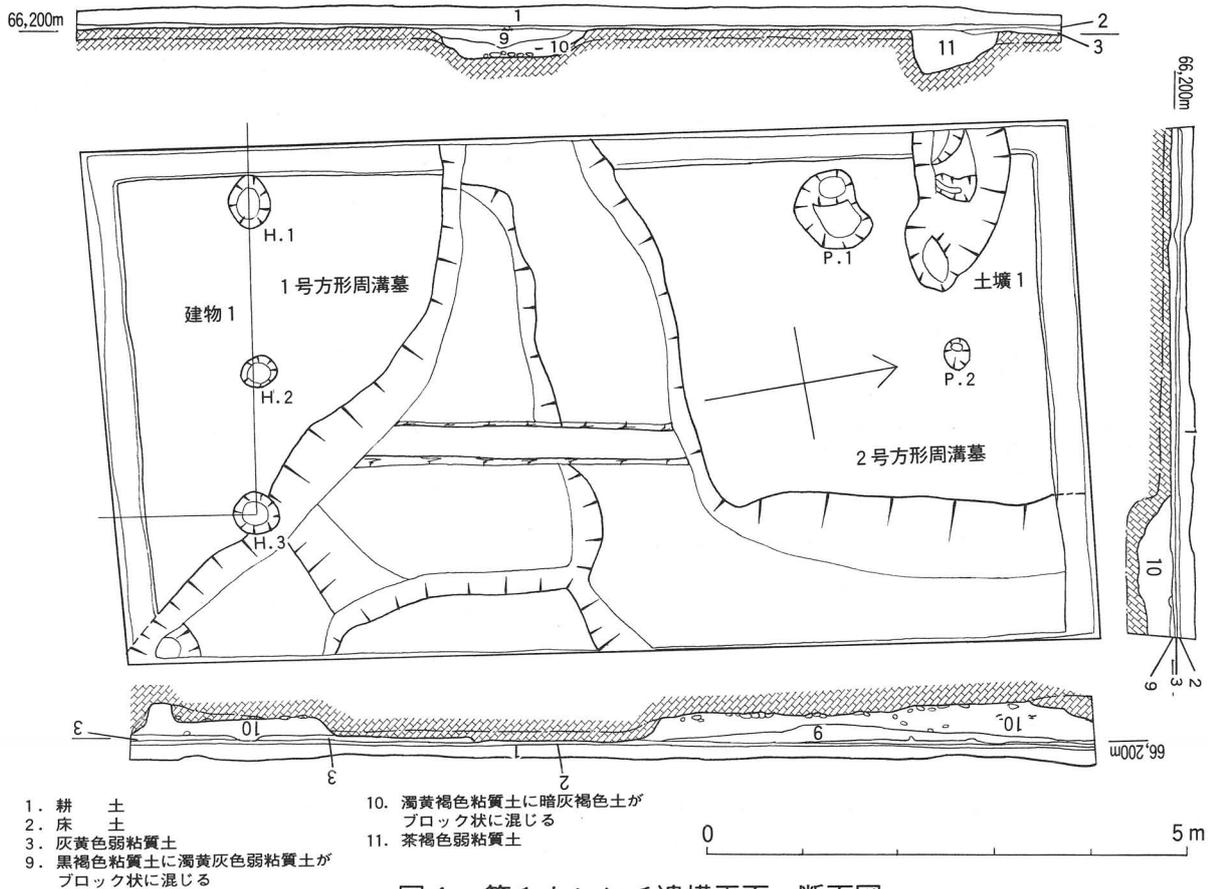


図4 第1トレンチ遺構平面・断面図

4. 遺構

遺構は第1トレンチで弥生時代の方形周溝墓群と土壌、平安時代の建物、第2トレンチで弥生時代の竪穴式住居跡群と土壌、第3トレンチで溝と平安時代の建物を検出した。以下、各遺構ごとに概観していく。

1 方形周溝墓群 (図3～5・図版2. 3. 5)

第1トレンチで2基の弥生時代中期の方形周溝墓を検出した。当初、3基以上の方形周溝墓の存在の可能性を考え、これらの広がりを確認するため、南東に計3本のトレンチをあけた。これらの中で、第1トレンチに最も近い場所に設けた第6トレンチで溝の検出が見られたものの、埋土が周溝の堆積土と明らかに違うことから1号方形周溝墓の周溝に続かないことを確認した。また、第1トレンチの東端で確認できた陸部分は3基目の方形周溝墓の可能性も考えられるが、第6トレンチでこれにつながる溝部分が検出されなかったことから、方形周溝墓と認定することは保留しておく。

周溝からは弥生土器とサヌカイト製の石器が出土しているが、出土土器からみて、これらの方形周溝墓の所属時期は第Ⅲ様式期古段階に比定できる。

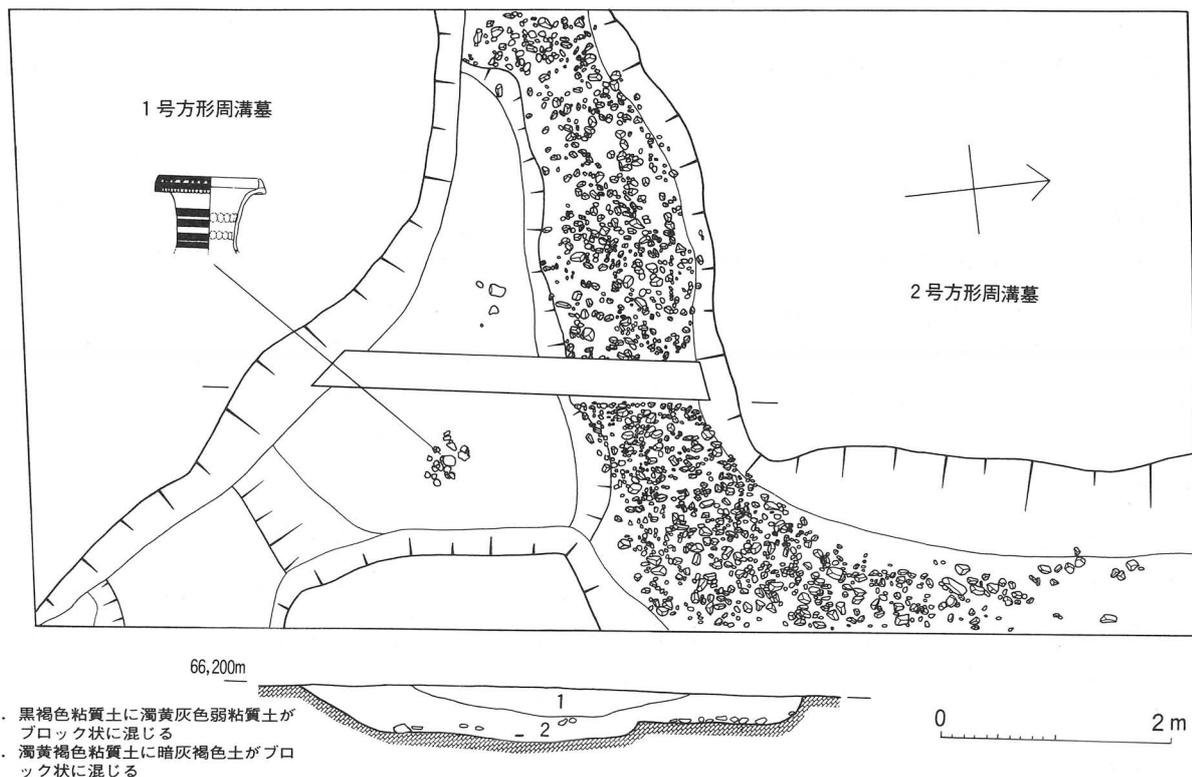


図5 方形周溝墓周溝底配石状況平面図・断面図

1号方形周溝墓

第1トレンチ南半部で検出した。確認できたのは周溝北側東半部から北東コーナーにかけての部分で、方形周溝墓の北東約4分の1の範囲にあたる。墳丘は後世の整地によって削平されている。墳丘上幅は、検出長東西約4.96m×南北約3.72mである。墳丘下幅は、検出長東西約5.30m×南北約4.02mである。周溝の北側は、2号方形周溝墓の周溝と共有している。北側の周溝は、幅約1.8m～3.1mで、東側の周溝は、幅約2.0mを測る。周溝内の埋土は、北側で2層に分層でき、1層目は濁黄灰色弱粘質土がブロック状に混じる黒褐色粘質土、2層目は暗灰褐色土がブロック状に混じる濁黄褐色粘質土である。東側では2層目のみの堆積となっている。埋葬施設は確認できなかった。

2号方形周溝墓（図5）

第1トレンチ北半部で検出した。確認できたのは南側周溝、南東コーナーの部分で、方形周溝墓の南東約4分の1の範囲にあたる。墳丘のほとんどは削平されていた。墳丘上幅は、検出長東西約3.94m×南北約4.80mである。墳丘下幅は、検出長東西約4.80m×南北約5.18mである。周溝の南側は1号方形周溝墓の周溝と共有している。南側の周溝は幅約1.8～3.1mで、東側の周溝は、幅約1.90mを測る。周溝内の埋土は南側、東側で2層に分層でき、1層目は濁黄灰色弱粘質土がブロック状に混じる黒褐色粘質土、2層目は暗灰褐色土がブロック状に混じる濁黄褐色粘質土である。埋葬施設は確認できなかった。

また、2号方形周溝墓を囲む溝の底には長径10cm程度の川原石を敷き詰めていた状況が確認できた。

2 竪穴住居跡群（図6・図版4）

第2トレンチで6棟の弥生時代中期の竪穴住居跡を検出した。トレンチの東側で1号住居跡と2号住居跡が一部重複して、中央部で3号・4号・5号住居跡が重複して、西側で6号住居跡を確認した。

1号住居跡

おそらく直径4mをはかる円形の住居跡で、北側は2号住居跡で、東側は土壙2で壊されている。住居の壁は約13cm残っているが、住居に関連する柱穴、炉跡などの施設は確認できなかった。住居の埋土は濁茶褐色弱粘質土で、後述する3号住居跡と6号住居跡の埋土と同じである。遺物は出土していない。出土遺物には弥生土器と砂岩製の石器の他、紡錘車がある。

2号住居跡

1号住居跡の北半部に重複して、直径約4mの円形住居として建て替えられているが、土壙2によって東端が壊されている。住居の壁は約21cm残っているが、住居に関連する柱穴、炉跡などの施設は確認できなかった。住居の埋土は暗茶褐色弱粘質土で、後述する4号住居跡の埋土と同じである。出土遺物には弥生土器と砂岩製の石器がある。

3号住居跡

おそらく直径6mをはかる円形住居跡で、東側の大半を土坑5で、西側を4号住居跡で壊されている。住居の壁はかろうじて残存した東側で約22cm残っているが、住居に関連する柱穴、炉跡などの施設は確認できなかった。住居の埋土は濁茶褐色弱粘質土で、1号住居跡と6号住居跡と同じである。出土遺物は弥生土器とサヌカイト製の石器の他、土製紡錘車がある。出土土器からみてこの住居の所属時期は弥生時代Ⅲ様式期古段階に比定できる。

4号住居跡

おそらく直径4.5mをはかる円形住居跡で、南西部を5号住居跡によって壊されている。住居の壁は約16cm残っているが、住居に関連する柱穴、炉跡などの施設は確認できなかった。住居の埋土は暗茶褐色弱粘質土で、2号住居跡と同じである。出土遺物には弥生土器とサヌカイト製の石器の他、土製円盤がある。

5号住居跡

東西方向で約4mをはかる住居跡で、平面プランが隅丸方形もしくは不整形な円形になるのか明らかではない。住居の壁は約23cm残っていて、その内側には壁溝が幅約25~27cm、深さ約10cmの規模でめぐっている。しかし、住居に関連する柱穴、炉跡などの施設は確認できなかった。埋土は、濁褐色弱粘質土である。出土遺物には弥生土器がある。

6号竪穴住居

平面プランの不整形さから住居跡とするには問題があるかもしれないが、埋土の状況、規模など

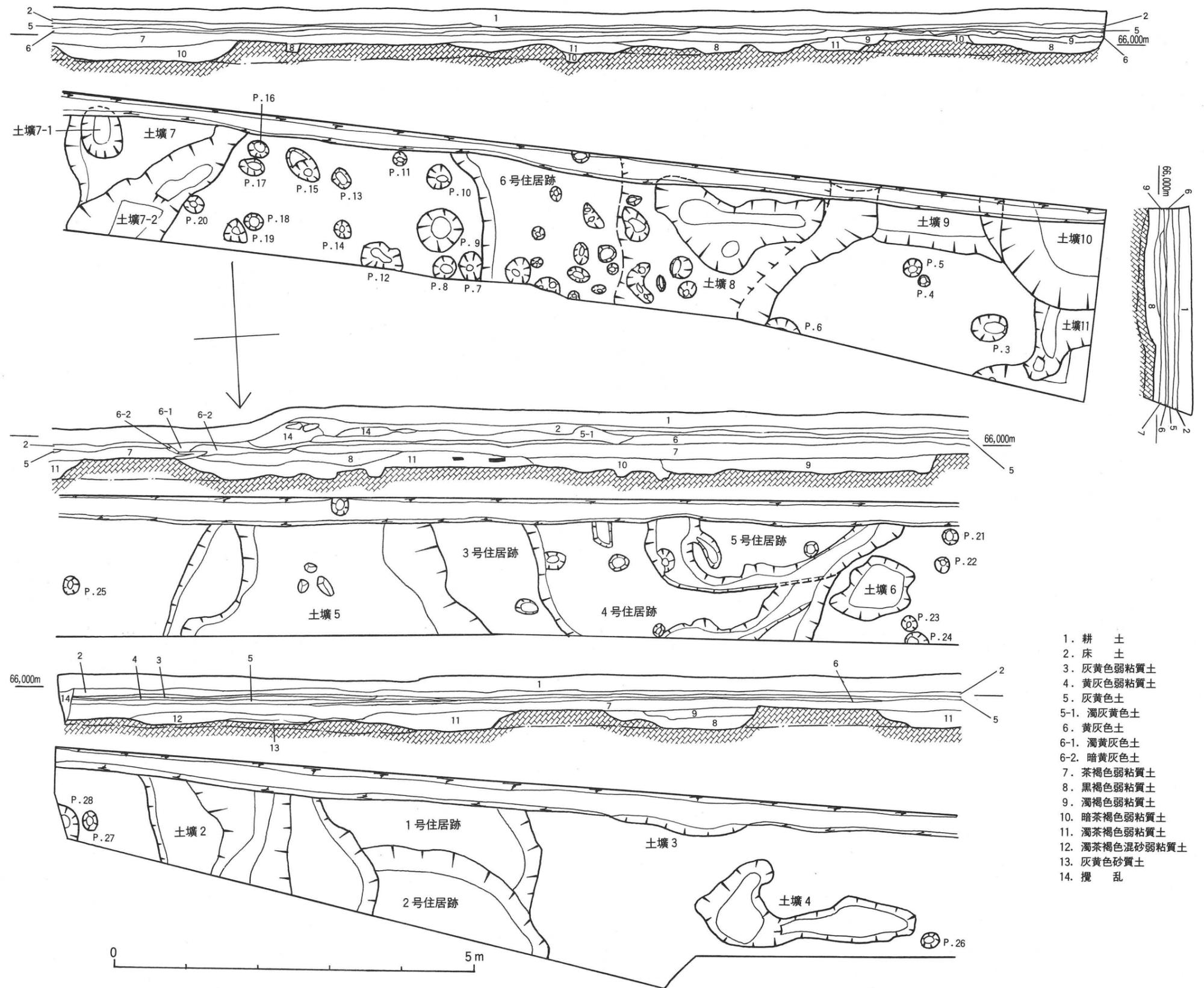
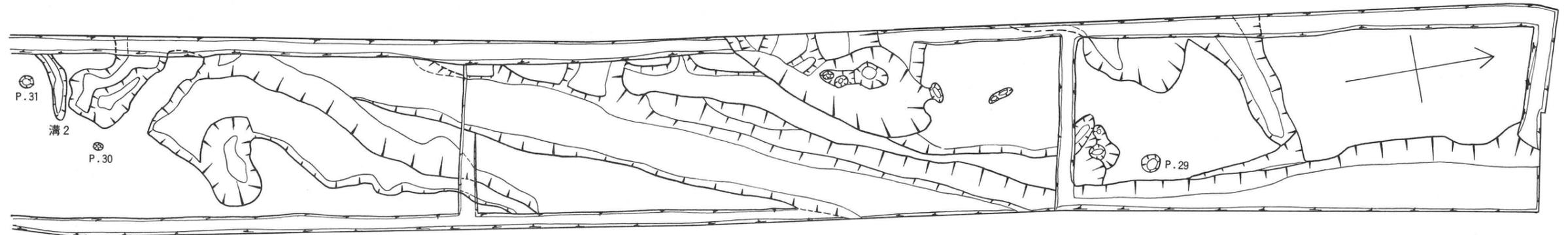
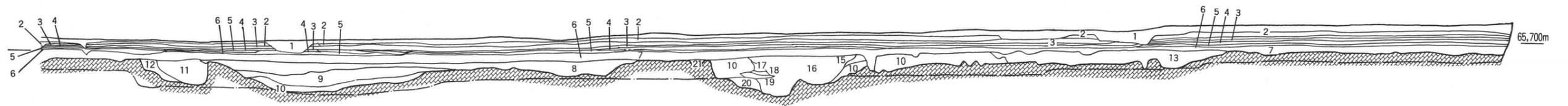
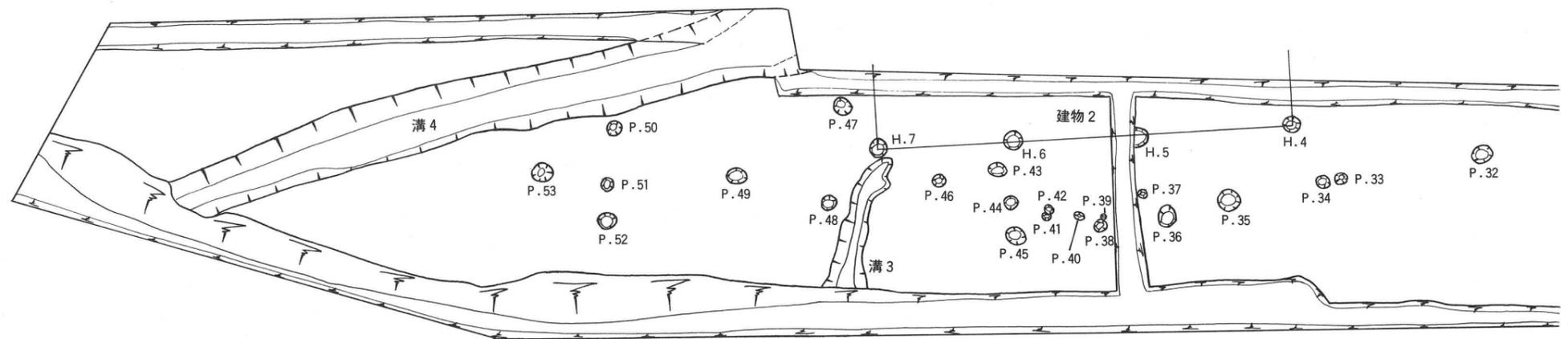
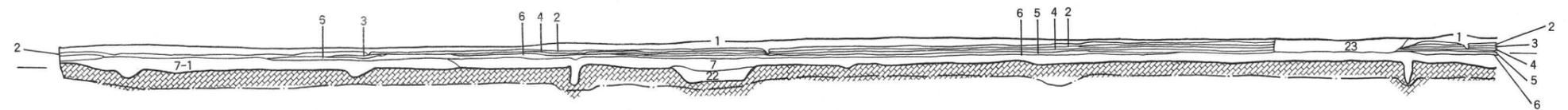


図6 第2トレンチ遺構平面図・断面図



- 1. 耕 土
- 2. 床 土
- 3. 灰黄色弱粘質土
- 4. 黄灰色弱粘質土
- 5. 灰黄色土
- 6. 黄灰色土
- 7. 茶褐色弱粘質土
- 7-1. 灰褐色混礫土
- 8. 濁灰黄色弱粘質土
- 9. 濁灰黄色弱粘質土がブロック状に混じる濁褐色灰色砂質土
- 10. 青灰色シルト
- 11. 暗黄灰色弱粘質土
- 12. 濁黄灰色混砂弱粘質土
- 13. 暗褐色弱粘質土
- 14. 濁褐色黄色混砂弱粘質土
- 15. 褐色黄色混砂弱粘質土
- 16. 灰黄褐色弱粘質土がブロック状に混じる濁黄褐色灰色混砂弱粘質土
- 17. 濁灰褐色砂質土
- 18. 濁褐色灰色砂質土
- 19. 濁灰黄色粘質土
- 20. 暗褐色灰色混砂弱粘質土
- 21. 濁灰褐色弱粘質土
- 22. 濁黄灰色弱粘質土
- 23. 攪 乱



0 5m

図7 第3トレンチ遺構平面図・断面図

をあわせ考えて、直径約6mをはかる不整形な円形住居跡と認定した。住居の輪郭は残っているものの、中央部から西半部にかけては土壌8によって壊されている。住居の壁は約24cm残っているが、住居に関連する柱穴、炉跡などの施設は確認できなかった。埋土は濁茶褐色弱粘質土で、1号住居跡と3号住居跡と同じである。出土遺物には弥生土器がある。

3 溝（図7・図版4）

第3トレンチで4本の溝を検出した。第3トレンチの北半部を占める範囲に溝1を、そのすぐ南に接して溝2を、そしてトレンチの南端部に溝3と溝4を確認した。

溝1

南西から北東方向に流れる溝で、長さ約11m分を検出した。最大幅約18.9mをはかる。深さは約0.59m、南西と北東の比高は約0.08mで北東に流れる。溝の規模はかなり大きい。埋土の堆積状況からみると、もともとは北側と南側に独立した2本の流れがあり、冠水のため最終的に1本の幅広い溝になった状況が観察できる。すなわち、溝は最終的に濁灰黄色弱粘質土と暗褐色弱粘質土で被われているがその下層では北側と南側では堆積状況が違うからである。

下層の状況は北側の溝は幅8.7m、深さ0.7mをはかり、埋土は濁褐色灰黄色混砂弱粘質土に灰黄色弱粘質土がブロック状に混じる。なお、溝の底には不整形な落ち込みが多数認められた。南側の溝は幅約8m、深さ0.5mをはかる。埋土は上層に濁褐色灰黄色砂質土に濁灰黄色弱粘質土がブロック状に混じり、下層は青灰色シルトである。なお、上層には炭片を含む。このことから南側の溝は常に流れていた状況がみてとれるが、北側の溝についてはかならずしも常に流れていたとは限らない。

出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器の他にサヌカイト製の石器、土製紡錘車があるが、これらの遺物の大半は南側の溝で検出されている。とりわけ石器については南側の溝でも最下層からしか出土していない。

溝2

東西方向の溝で、長さ約1.2m分を検出した。幅約0.3m、深さは約0.07mをはかる。東と西の比高は0.08mあり東に流れる。埋土は濁灰黄褐色土である。遺物は出土していない。

溝3

東西方向の溝で、長さ約2.0m分を検出した。幅約0.7m、深さは約0.20mをはかる。東と西の比高は約0.15mあり東に流れる。埋土は濁灰黄褐色土である。遺物は奈良時代の土師器が出土している。

溝4

東西方向の溝で、長さ約9.0m分を検出した。幅約0.9m、深さは約0.18mをはかる。東と西の比高は約0.13mあり東に流れる。埋土は濁灰黄褐色土である。出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器の他、砂岩製の石器がある。

建物	柱穴番号	平面形	規模(m)	深さ(m)	土色・土質	出土遺物	備考
1	H.1	楕円形	0.59×0.4	0.27	濁褐色弱粘質土	土師器	柱間1.5~1.8m
	H.2	円形	0.34×0.36	0.23	濁褐色弱粘質土	土師器・黒色土器	
	H.3	円形	0.44×0.47	0.25	濁褐色弱粘質土		
2	H.4	円形	0.25×0.24	0.18	濁灰褐色土	弥生土器・土師器	柱間1.7~2.2m
	H.5	不整形	(0.22)×0.28	0.26	濁灰褐色土		
	H.6	円形	0.29×0.26	0.18	濁灰褐色土	黒色土器	
	H.7	円形	0.25×0.29	0.18	濁灰褐色土		

表1 建物柱穴一覧表

4 建物 (図1. 7・図版4)

第1トレンチと第3トレンチで各1棟ずつ、計2棟検出した。ともに平安時代の建物である。建物の柱穴の規模、形状および出土遺物の詳細は別に表1としてまとめた。

建物1 (図8)

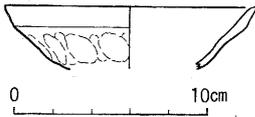


図8 建物1出土土師器

第1トレンチの南端、1号方形周溝墓に重複して検出した。南側・西側は調査区外に広がるため正確な規模は不明である。柱穴は楕円形あるいは円形を呈し、直径約0.34~0.59m、深さ約0.23~0.27mをはかる。柱穴間は約1.5~1.8mをはかる。埋土は濁褐色弱粘質土である。遺物は土師器、須恵器、黒色土器が出土している。なお、図示した土師器は柱穴1から出土したものである。

建物2

第3トレンチ南西端近くで検出した。西側は調査区外に広がるため正確な規模は不明である。柱穴は円形を呈し、直径約0.25~0.29m、深さ約0.17~0.23mを測る。柱穴間は約1.7~2.2mを測る。埋土は濁灰褐色土である。遺物は弥生土器、土師器、黒色土器が出土している。

5 土壌 (図版4)

土壌は第1トレンチと第2トレンチで11カ所検出した。第1トレンチで土壌1が2号方形周溝墓に重複して検出した。他はすべて第2トレンチで検出したが、東から順に土壌2、土壌3……と土壌11までである。このうち土壌2は1号、2号住居跡に重複して、土壌5は3号住居跡に重複して、土壌8は6号住居跡に重複して、土壌9は6号住居跡と土坑10によって壊されている。土壌11は土坑10に壊されている。規模、形状および出土遺物についての詳細は表2を参照されたい。

柱穴番号	平面形	規模(m)	深さ(m)	土色・土質	出土遺物
土壌1	不整形	(1.74)×0.95	0.45	茶褐色弱粘質土	
2	不整形	2.85×(1.8)	0.11	1層:濁茶褐色混砂弱粘質土 2層:灰黄色弱砂質土	土師器・須恵器 黒色土器・サヌカイト
3	不整形	(1.96)×(0.49)	0.23	1層:濁褐色弱粘質土 2層:黒褐色弱粘質土	
4	不整形	3.08×1.3	0.33	濁茶褐色弱粘質土	弥生土器
5	不整形	(3.26)×(1.45)	0.21	黒褐色弱粘質土	弥生土器・サヌカイト
6	不整形	1.28×0.9	0.28	暗茶褐色弱粘質土	
7	不整形	(2.5)×(1.6)	0.07	暗茶褐色弱粘質土	弥生土器・サヌカイト・紅崖片岩
7-1	不整形	(1.01)×(1.78)	0.55	黒褐色弱粘質土	弥生土器・サヌカイト
7-2	不整形	0.57×(0.6)	0.16	黒褐色弱粘質土	弥生土器
8	不整形	2.9×(1.08)	0.2	黒褐色弱粘質土	弥生土器・サヌカイト
9	不整形	(1.78)×(0.82)	0.14	暗茶褐色弱粘質土	
10	不整形	(1.44)×(1.38)	0.08	濁褐色弱粘質土	
11	不整形	(1.52)×(2.7)	0.2	1層:黒褐色弱粘質土	

表2 土壌一覧表

6 ピット

第1トレンチで2個（ピット1、ピット2）、第2トレンチで26個（ピット3～ピット28）、第3トレンチで25個（ピット29～ピット53）、第4トレンチで4個（ピット54～ピット57）、第5トレンチで6個（ピット58～ピット63）の計63個のピットを検出した。なお、第4トレンチと第5トレンチは遺構の確認をただけで発掘は行わなかったが、ピット54については遺物が多量に含まれていたため遺物だけを取り上げた。

規模・形状および出土遺物についての詳細は、表3を参照されたい。

遺構番号	平面形	規模(m)	深さ(m)	土色・土質	出土遺物
P・1	不整形	0.84×0.78	0.33	濁灰褐色弱粘質土	
2	楕円形	0.34×0.26	0.24	灰褐色弱粘質土	
3	楕円形	0.5×0.38	0.27	黒褐色弱粘質土	弥生土器・サヌカイト
4	不整形	0.15×0.18	0.12	黒褐色弱粘質土	
5	円形	0.27×0.28	0.25	黒褐色弱粘質土	弥生土器
6	不整形	0.49×0.14		黒褐色弱粘質土	
7	不整形	0.32×0.42	0.3	黒褐色弱粘質土	
8	不整形	0.32×0.33	0.16	黒褐色弱粘質土	
9	円形	0.64×0.6	0.21	黒褐色弱粘質土	
10	円形	0.34×0.35	0.15	黒褐色弱粘質土	弥生土器
11	円形	0.19×0.18	0.05	黒褐色弱粘質土	
12	不整形	0.55×0.34	0.26	黒褐色弱粘質土	
13	不整形	0.24×0.29	0.1	黒褐色弱粘質土	
14	不整形	0.24×0.27	0.11	黒褐色弱粘質土	
15	楕円形	0.36×0.58	0.12	黒褐色弱粘質土	
16	楕円形	0.28×0.25	0.31	黒褐色弱粘質土	弥生土器・サヌカイト
17	楕円形	0.34×0.25	0.11	黒褐色弱粘質土	
18	隅丸方形	0.26×0.26	0.13	黒褐色弱粘質土	
19	不整形	0.36×0.34	0.11	黒褐色弱粘質土	
20	不整形	0.27×0.22	0.1	黒褐色弱粘質土	
21	円形	0.21×0.2	0.28	暗茶褐色弱粘質土	弥生土器・サヌカイト
22	楕円形	0.23×0.2	0.15	暗茶褐色弱粘質土	
23	円形	0.22×0.22	0.09	暗茶褐色弱粘質土	弥生土器
24	不整形	(0.34)×(0.16)	0.2	暗茶褐色弱粘質土	弥生土器
25	不整形	0.22×0.26	0.23	濁茶褐色弱粘質土	弥生土器
26	楕円形	0.26×0.23	0.15	濁茶褐色弱粘質土	
27	楕円形	0.21×0.28	0.28	灰茶色弱粘質土	
28	不整形	(0.24)×(0.58)	0.27	灰茶色弱粘質土	
29	不整形	0.34×0.32	0.31	濁灰褐色土	
30	楕円形	0.22×0.14	0.22	濁灰褐色土	
31	円形	0.22×0.22	0.23	濁灰褐色土	
32	円形	0.26×0.26	0.17	濁灰褐色土	
33	円形	0.21×0.19	0.08	濁灰褐色土	
34	円形	0.22×0.18	0.30	濁灰黄褐色土	
35	円形	0.34×0.31	0.11	濁灰黄褐色土(礫が混じる)	
36	楕円形	0.26×0.32	0.28	濁灰黄褐色土	
37	円形	0.13×0.14	0.06	濁灰褐色土	
38	不整形	0.19×0.17	0.05	濁灰褐色土	
39	円形	0.08×0.09	0.04	濁灰褐色土	
40	円形	0.15×0.12	0.07	濁灰褐色土	
41	不整形	0.2×0.12	0.11	濁灰褐色土	
42	不整形	0.13×0.11	0.05	濁灰褐色土	
43	不整形	0.28×0.2	0.10	濁灰褐色土	
44	円形	0.22×0.18	0.11	濁灰褐色土	
45	隅丸方形	0.28×0.27	0.29	濁灰黄褐色土	
46	円形	0.2×0.2	0.13	濁灰黄褐色土	
47	不整形	0.27×0.26	0.56	濁灰黄褐色土	
48	円形	0.21×0.22	0.09	濁灰褐色土	土師器
49	楕円形	0.31×0.23	0.1	濁灰黄褐色土	
50	円形	0.21×0.21	0.17	濁灰黄褐色土	
51	円形	0.19×0.2	0.03	濁灰黄褐色土	
52	円形	0.27×0.24	0.11	濁灰黄褐色土	
53	円形	0.3×0.27	0.31	濁灰褐色土	土師器
54	不整形	(0.15)×0.2		暗褐色粘質土	土師器・黒色土器
55	円形	0.2×0.2		暗褐色粘質土	
56	円形	0.15×0.15		暗褐色粘質土	
57	円形	0.15×0.15		暗褐色粘質土	
58	円形	0.3×0.3		暗褐色粘質土	
59	不整形	(0.7)×(0.65)		暗褐色粘質土	
60	不整形	(0.35)×0.4		暗褐色粘質土	
61	不整形	(0.3)×0.3		暗褐色粘質土	
62	円形	0.15×0.15		暗褐色粘質土	
63	楕円形	0.25×0.4		暗褐色粘質土	

表3 ピット一覧表

5. 遺物

今回の調査で出土した遺物は弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、陶器、土製品、石器、瓦、鉄片が出土している。弥生土器はすべて、所属時期を中期に比定できるが、土師器、須恵器は古墳時代末から中世までのものが認められる。黒色土器は内黒、両黒の両タイプが認められる。瓦器は出土量が少ないため確実なことがいえないが、おそらく黒色土器と区別のつきがたい形態から判断して11世紀後半頃の時期を考えておきたい。石器についてはサヌカイト製以外の石器の一部に若干時期の新しいものが含まれるかもしれないが、それ以外はすべて弥生時代中期のものである。

出土遺物の広がりには第1トレンチ、第2トレンチで弥生土器が、第3トレンチでは奈良時代以降の土器がまとまって出土している。

以下、土器、土製品、石器の順に記述していくが、土器については遺構ごとに、土製品、石器については量が少ないので型式ごとにまとめて記述する。なお、瓦については出土量がきわめて少ないので土器といっしょに扱う。なお、図示した土器および瓦の細かい観察は後ろにまとめて観察表(表5)を付したので、それを参照されたい。

1 土器

各遺構ごとに観察する。

方形周溝墓周溝出土土器(図9・図版6)

遺物は弥生土器だけで、その大半は1号方形周溝墓と4号方形周溝墓の共有溝である第1トレンチの中央部と2号方形周溝墓東側周溝の北端部から出土している。そのうち出土地点をはっきりと示せるのは(8)だけである(図5)。

弥生土器には広口壺、無頸壺、鉢、高坏、甕がある。

広口壺は11点出土しているが、口頸部が外反して大きく開く口縁部をもつ広口壺Aと、曲折してたちあがる口縁部をもつ広口壺B、これらの他に特殊な壺として和泉地方に壺棺として使用されることの多い日明山型の壺の破片がある。広口壺Aにはなだらかに長くのびる口頸部をもつ(2~4)が4点と、頸部は短いが大きく開く口縁部の(6、7)が2点ある。これらの口縁端部はすべて大きく拡張せず、最も拡張しているものでも(4)程度で下外方にわずかに拡張しているだけである。広口壺B(8)は1点出土しているだけであるが、筒状の頸部に内傾気味に曲折してたちあがる口縁部をもつ。広口壺にはこれら他にAかBか区別のつかない頸部片が2点ある。

以上の広口壺に施された紋様は圧倒的に直線紋が多いが、この他、簾状紋、扇形紋、刻み目なども組み合わせて施されている。簾状紋の施紋工具幅は1.2cm~1.5cmと狭く、施紋ストロークは5mm~9mmである。これらのうち生駒西麓産の胎土をもつものは5点(4、6~8)である。

日明山型の壺の破片は口縁部片1点と体部片1点(5)の計2点認められるが、体部片には直線紋と末端扇形紋が施されている。

無頸壺(11)は1点出土しているが、口縁部にハ印の記号紋が施されている。形態からみると和泉でよく認められる大型蛸壺に類似する。

鉢(10)は1点出土している。鉢Bであるが、口縁部は折り返して段状に作っている。生駒西麓産の胎土をもつ。

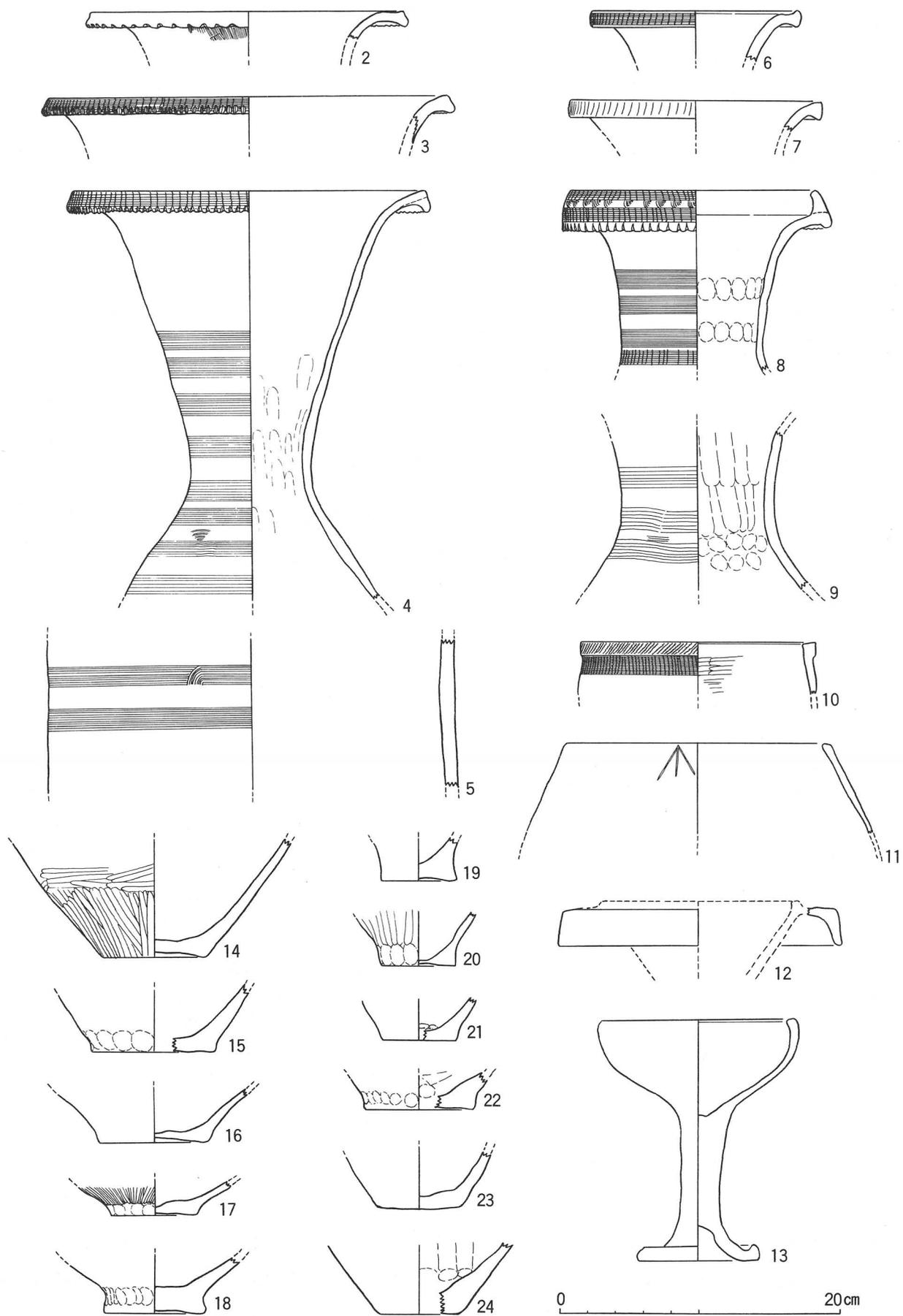


图9 方形周沟墓周沟内出土弥生土器

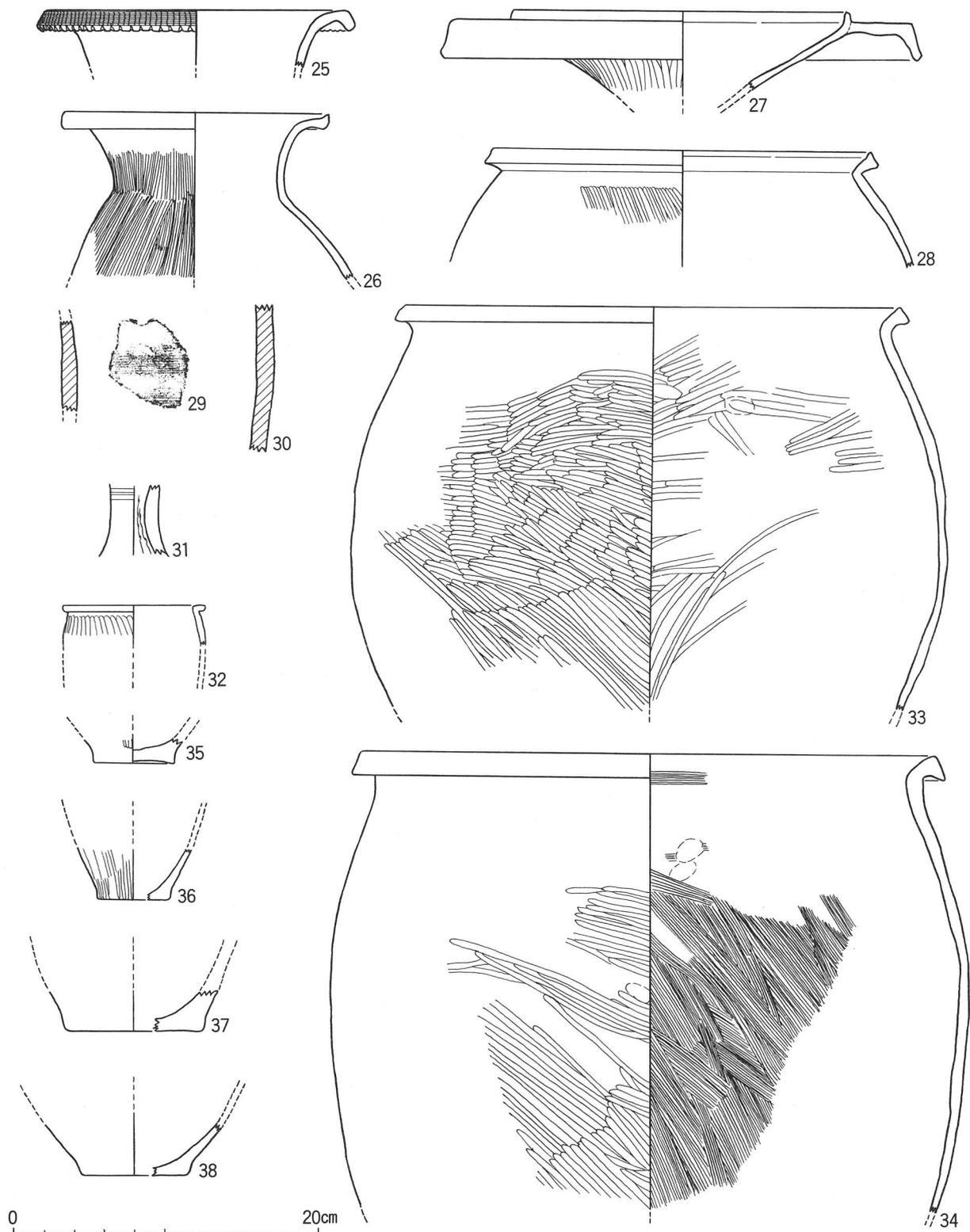


図10 3号住居跡出土弥生土器

高坏は椀状の坏部をもつ高坏A (13) と水平にのびた後、垂下する口縁部におそらく貼り付けの凸帯がめぐる形態をもつ (12) が各々1点ずつある。(13) は生駒西麓産の胎土をもつ高坏で、深めの坏部と長い柱実の脚柱部に小さな裾部をもつだけのバランスの悪い形態をもつ。

甕は2点出土しているが、口縁部の小片で全体の形状はわからない。

これら他に底部片が11点出土しているが、底部からみて体部の張り出す形態をもつものはほとんど認められない。

3号住居跡出土土器（図10・図版6）

遺物は弥生土器だけで、広口壺、高坏、甕がある。

広口壺は6点出土しているが、口頸部が外反し大きく開く広口壺Aだけである。口縁端部は下方に拡張するもの（25）と上方に少し大きく、下方に少しだけ拡張するもの（26）がある。頸部は（26）の短いものしか完存していないので断定できないが、（25）については頸部が長くのびる可能性も考えられる。また、図示しなかった広口壺の口縁部は拡張しないものばかりである。

広口壺に施された紋様は簾状紋が少なく、直線紋が圧倒的に多い。この他、波状紋、刻み目が少量であるが認められる。簾状紋の施紋例が少ないが、出土例のものは施紋工具の幅が1.3cmをはかるものしかない。この他、無紋のもの（26）もある。これらの他に日明山型の壺の体部片（29、30）が2点出土している。

高坏は2点出土している。口縁部が水平にのびた後、下外方へ垂下し、口縁部に貼り付け凸帯のめぐる高坏B（27）と脚柱部（31）がある。

甕は5点出土している。大型の甕（28、33、34）が3点と小型の甕（32）が2点ある。大型の甕のうち（33、34）は生駒西麓産の胎土をもつ。小型の甕（34）は体部の外面に煤が付着している。いずれも口縁部がそれほど大きく拡張するものがなく、また、体部が大きく張り出すものもない。

底部は4点出土しているが、体部の張り出すものはまったく認められない。

4号住居跡出土土器（図11）

遺物は弥生土器だけで、広口壺、短頸壺、無頸壺、鉢、高坏、甕が出土している。

広口壺は9点出土しているが、口頸部が大きく開く広口壺Aと口縁部が曲折して内傾してたちあがる広口壺Bがある。広口壺Aには頸部が長くのびる可能性の考えられる（39、40）と外反して開くが、頸部の短いもの（41～43）がある。前者については口縁部が上下にわずかに拡張する（39）と、ほとんど拡張しない（40）がある。後者には下外方に拡張する（41、42）と、上方にわずかに拡張する（43）がある。広口壺B（44）は1点だけで口縁部は上方に大きく、下方に小さく拡張する。図示していない広口壺は頸部の長さがわからないので、長くなるのか、短いものかわからないが、口縁部の形態には3タイプあり、それらは上方にわずかに拡張するもの、上下にわずかに拡張するもの、ほとんど拡張しないものがある。

広口壺に施された紋様は、簾状紋、波状紋、刻み目がある。生駒西麓産の胎土をもつものは少なく、（41）の1点だけである。

短頸壺（46）は1点だけ出土しているが、大きく外傾して開く口縁部をもつ。口頸部には波状紋と直線紋が施されている。

無頸壺（47）は1点だけ出土しているが、内傾する口縁部をもつ。形態的には和泉地方に多い大型蛸壺に類似する。口縁部に直線紋が施されている。

鉢（48）は1点だけ出土しているが、口縁部がなだらかにたちあがり、深い椀状を呈す鉢Aである。口縁部上面には刻み目が施されている。

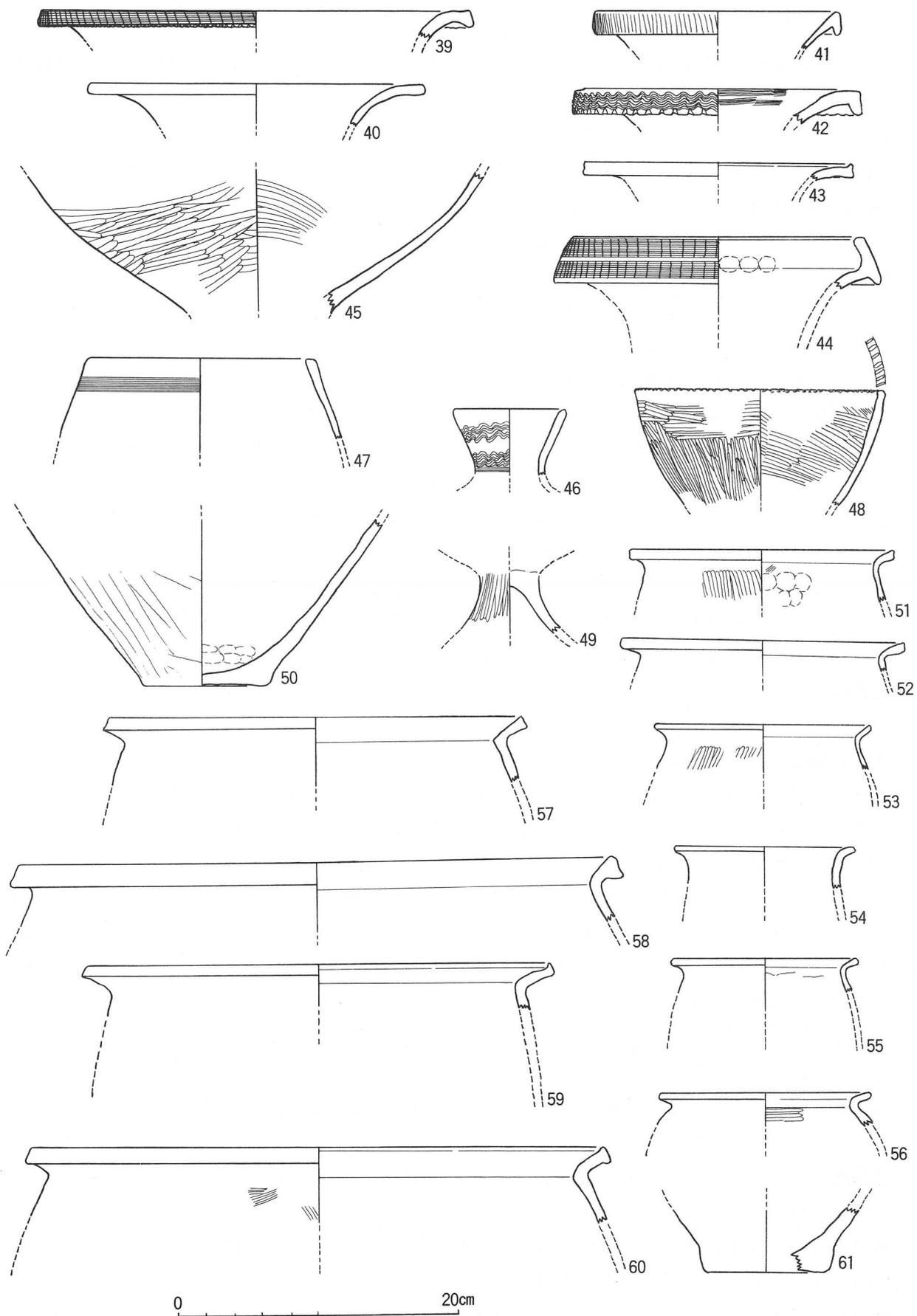


图11 4·5·6号住居跡出土弥生土器

高坏（49）は1点、脚柱部の短い、大きくひらく脚部片が出土している。ただし鉢の台部の可能性もある。

甕は10点出土している。大型の甕（57、58）が2点、中型の甕（51～53、56）が3点、小型の甕（54、55）が4点ある。大型の甕のうち（58）は体部が大きく張り出す可能性がある。中型の甕のうち（51、53）と図示しなかった小型の甕には外面に煤が付着していて火にかけられていたことがわかる。甕のうち（52、55）の2点だけが生駒西麓産の胎土をもつ。

以上の器種以外に底部片が出土している。底部の中には（45）のように大きく張り出す体部からみて鉢の可能性の考えられるものと、（51）のようにあまり張り出さず、さらに大きさと器壁の厚さからみて大型甕の底部と考えられるものがある。

5号住居跡出土土器（図11）

遺物は弥生土器だけが出土しているが出土量が少ない。器種がわかるのは甕だけである。

甕は2点出土している。すべて大型の甕であるが、口縁部が上方にわずかに拡張する（59）と上下にわずかに拡張する（60）がある。後者は生駒西麓産の胎土をもつ。

6号住居跡出土土器（図11）

遺物は弥生土器の底部片（61）が1点あるだけである。

溝1出土土器（図12）

遺物は弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器が出土している。

弥生土器のうち、器種がわかるのは広口壺と細頸壺だけである。

広口壺（62、63）は2点出土している。口頸部が大きく開く広口壺A（63）と口頸部が曲折して立ち上がる広口壺B（62）がある。（63）はなだらかに外反して開く頸部と下方にわずかに拡張する口縁部をもつ。（62）は筒状の頸部から曲折して内傾して立ち上がる口縁部をもつが、口縁端部は上方に大きく、下方にわずかに拡張する。口縁部上面には刻み目が施されているが、頸部は紋様が施されていない。体部は肩部から体部下半にわたって簾状紋、扇形紋、直線紋が施されている。

なお、（64）は壺の体部であるが器壁の薄さが気になるものの、形態的には和泉地方によく認められる日明山型の壺の体部と類似する。また、胎土も和泉地方のものと考えて大過ないであろう。なお、本遺構の弥生土器の中には生駒西麓産の胎土をもつものはない。

細頸壺は1点出土している。内傾する口縁部をもつ。口縁部は直線紋と列点紋が施されている。

土師器には甕、罏釜、椀、坏、小皿がある。

甕（71）は1点だけ出土している。それほど張り出さない体部と大きく外反して開く口縁部をもつ。口縁端部は上方に内傾気味にわずかに拡張する。

罏釜は1点だけ出土している。ゆるやかに外反して開く口頸部に水平の罏がめぐる。生駒西麓産の胎土をもつものである。

椀（72）は2点出土している。図示していないものは高台部しか残っていない。

坏（75）は1点出土している。底部から外傾して大きく開く皿状のものである。

小皿（73、74）は2点出土している。ともに丸味のある底部をもつと考えられる。口縁部は大き

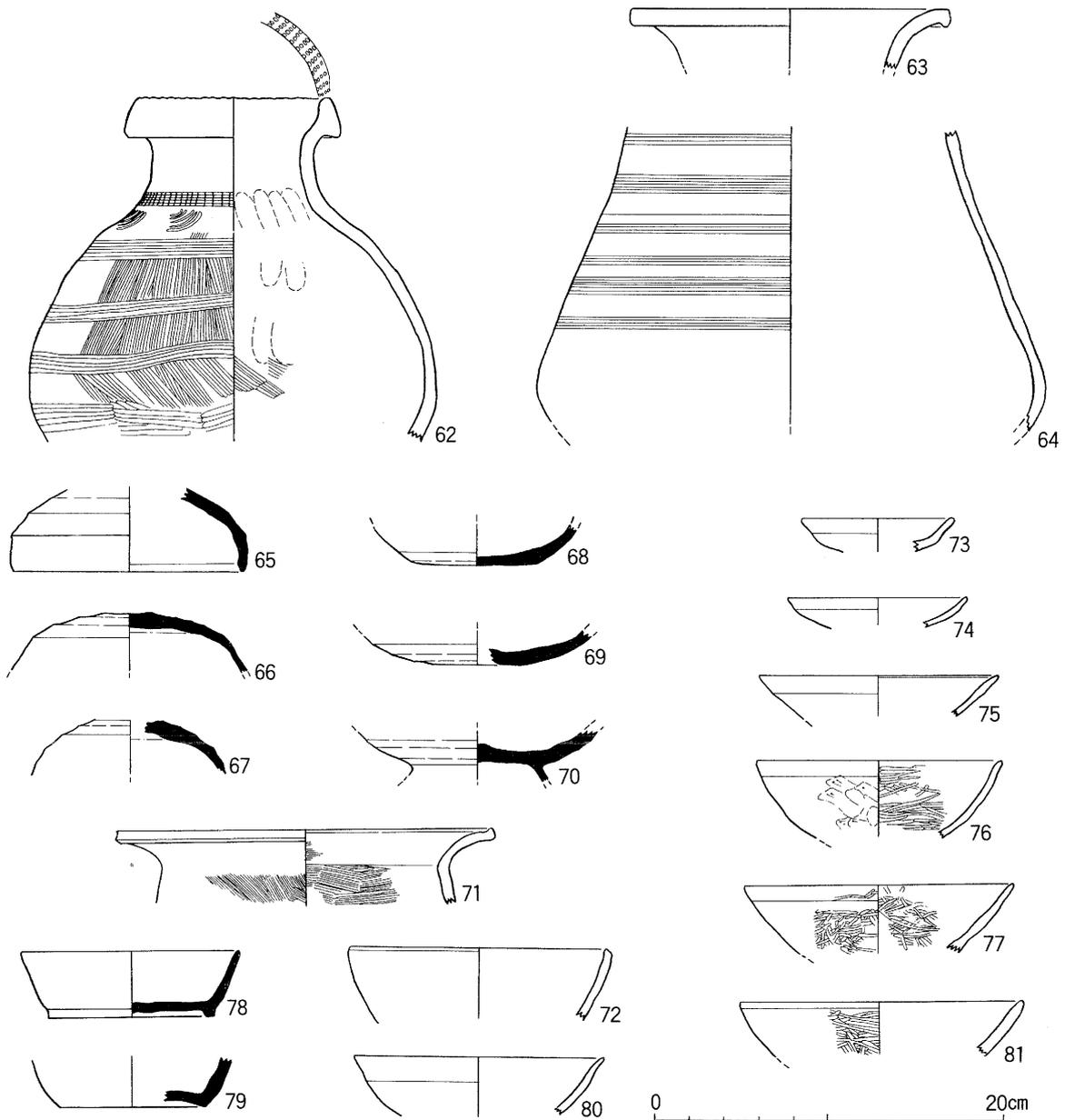


図12 溝1・6, ピット53出土弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器
 くなでて外反させている (73) とつまむようになであげている (74) がある。

鍔釜は1点だけ出土している。ゆるやかに外反して開く口頸部に水平の鍔がめぐる。生駒西麓産の胎土をもつ。

椀 (72) は2点出土している。図示していないものは高台部しか残っていない。

坏 (75) は1点出土している。底部から外傾して大きく開く皿状のものである。

須恵器には蓋坏、壺がある。すべて中村浩氏の陶邑編年によるとⅡ型式の範疇におさまる。(註1)

坏蓋 (65~67) は3点出土している。すべて丸い天井部をもつ蓋である。(65) は口縁部と天井部の境が明瞭であるが、他は口縁部が欠失しているためわからない。(67) はかなり小型化している。

坏身 (68, 69) は2点出土している。すべて丸い底部をもつ。

壺 (70) は1点出土している。台部がつく。

黒色土器には椀がある。

椀（76、77）は2点出土している。深い椀状を呈す（76）と浅い椀状のもの（77）があるが、前者は内黒であるが、後者は両黒である。

溝6出土土器（図12・図版7）

遺物は弥生土器、土師器、須恵器が出土している。

弥生土器は細片のため器種がわからない。

土師器には椀が出土している。

椀（80）は1点出土している。浅い椀部をもち、口縁部は外反して開く。

須恵器は坏身が出土している。中村氏の陶邑編年によるとⅢ～Ⅳ型式に該当する。

坏身（78、79）は高台のつくもの（78）とつかないもの（79）がある。

土壌5出土土器（図13）

遺物は弥生土器だけが出土している。弥生土器には広口壺、鉢、高坏、甕がある。

広口壺は5点出土しているが、口頸部が外反して大きく開く広口壺Aが2点と口頸部が曲折して立ち上がる広口壺B（82）が3点ある。広口壺Aは口縁端部のほとんど拡張しないものだけであるが、口縁部上端と下端に刻み目を施したものと、端面に波状紋と下端に刻み目の施したものがある。広口壺Bの口縁部の貼り付け方には2タイプある。すなわち、下外方に拡張した広口壺Aの上方に粘土を貼りたして作ったものと、幅の広い粘土帯を全面に貼り付けて作ったものがある。これらはともに生駒西麓産の胎土をもつものであるが、図示できなかった。なお、（82）はどちらのタイプか判断できなかった。

広口壺Bに施された紋様には簾状紋、縦線紋、波状紋がある。

鉢（84、85）は3点出土している。すべて大型の鉢で段状の口縁部をもつ鉢Bである。このうち（85）は口縁部の段を貼りたすことで作りだしている。鉢に施された紋様のうち（84）は口縁部に簾状紋と刺突紋を体部に幅の広い施紋工具を使用した簾状紋である。（85）は口縁部に凹線紋、体部に波状紋が施されている。図示しなかったものは口縁部が無紋で、体部に施紋工具幅2cmの簾状紋を3mmのストロークで施している。（84）だけが生駒西麓の胎土をもつ。

高坏（83、86）は3点出土している。浅い坏部の高坏A（83）と脚部片（86）と裾部片がある。

甕は2点出土している。どちらも中型の甕である。ともに口縁部が上方にわずかに拡張するものであるが、（87）からみて、体部の張り出さない甕であるらしい。

これらの他に底部片（88、89）がある。（88）は底面中央に円孔が1つ穿たれている。

土壌6出土土器（図13・図版6）

遺物は弥生土器だけで出土量が少ない。器種のわかるものはなく、底部片（106）がある。

土壌8出土土器（図13）

遺物は弥生土器が出土している。弥生土器には広口壺、短頸壺、無頸壺、鉢、高坏、甕がある。

広口壺は13点出土している。口頸部が大きく開く広口壺A（90、91）が9点と曲折して立ち上が

る広口壺Bが4点ある。広口壺Aの頸部は外傾して大きく開くタイプのものだけであるが、口縁部は下外方に拡張するものが6点あるほか、上下にわずかに拡張するもの、上方にわずかに拡張するもの、ほとんど拡張しないものが各1点ずつある。紋様は下外方に拡張するものの中に1点、下端に刻み目を施しただけで端面に紋様の施していないものがあるが、それ以外はすべて簾状紋だけか、簾状紋と刺突紋の施されたものである。そしてこれらのすべてが生駒西麓の胎土をもつものである。広口壺Bは残存状況が悪く、すべて図示できなかったが、4点のうち1点だけが生駒西麓の胎土をもつものである。紋様は簾状紋と刺突紋の組合わさったものと簾状紋だけが施されたものがある。

これらの他に体部らしき破片があるが、これらに施された紋様を観察すると、簾状紋の施紋工具幅は3cmで広い幅のものである。

短頸壺(92)は1点出土している。頸部は大きく外傾した後、口縁部で内傾してたちあがり、端部で内側に肥厚する。太頸壺の小型化したものである。

無頸壺(95)は1点出土している。口縁部はストレートに内傾するが、端部でわずかに肥厚する。

鉢(96、97)は3点出土している。すべて段状の口縁部をもつ鉢Bである。小型品(96)と大型品(97)がある。紋様は口縁部に斜線紋、列点紋、斜線紋と刺突紋を組み合わせたものがあり、体部には簾状紋が施されている。(96)は生駒西麓産の胎土をもつ。

この他、鉢に付けられていたと考えられる台部(99、100)が2点出土している。台部も小型品と大型品がある。ともにストレートにのびる裾部をもち、裾部近くに凹線紋が2条めぐる。

高坏は3点出土している。椀状の坏部をもつ高坏A(93)と段状の口縁部をもつ高坏C(94)と裾部だけが残存しているもの(98)がある。高坏Aの坏部はかなり浅い。高坏Cは口縁部が無紋で体部には簾状紋が施されている。裾部はなだらかに大きく開き、端部でわずかに上方に拡張する面をもつ。この裾部片は生駒西麓の胎土をもつ。

甕は8点出土している。小型の甕(105)、中型の甕(101~104)がある。ただし、(104)については小片を実測したため、このサイズに復元しているが、器壁の厚さを考えると実際にはこの復元図よりも大きくなる可能性が高い。甕は小型品の体部がほとんど張りださないのに比べて、中型品の多くは大きく張り出す。

これらの他に底部片が出土している。

ピット53出土土器(図12)

遺物は土師器と瓦器がある。土師器は細片のため詳細はわからない。瓦器は椀(81)が1点出土している。焼成が甘いため、炭素の吸着が悪く、外面だけが黒色を呈している。

ピット54出土土器(図13・図版7)

遺物は土師器と黒色土器がある。

土師器には椀、坏、小皿がある。

椀(111)は1点ある。

坏(112~120、122)は11点出土している。坏の形態には2タイプあり、底部から大きく外傾する。坏A(112~116、122)と平坦な底部からなだらかに外傾して開く坏B(117~120)がある。

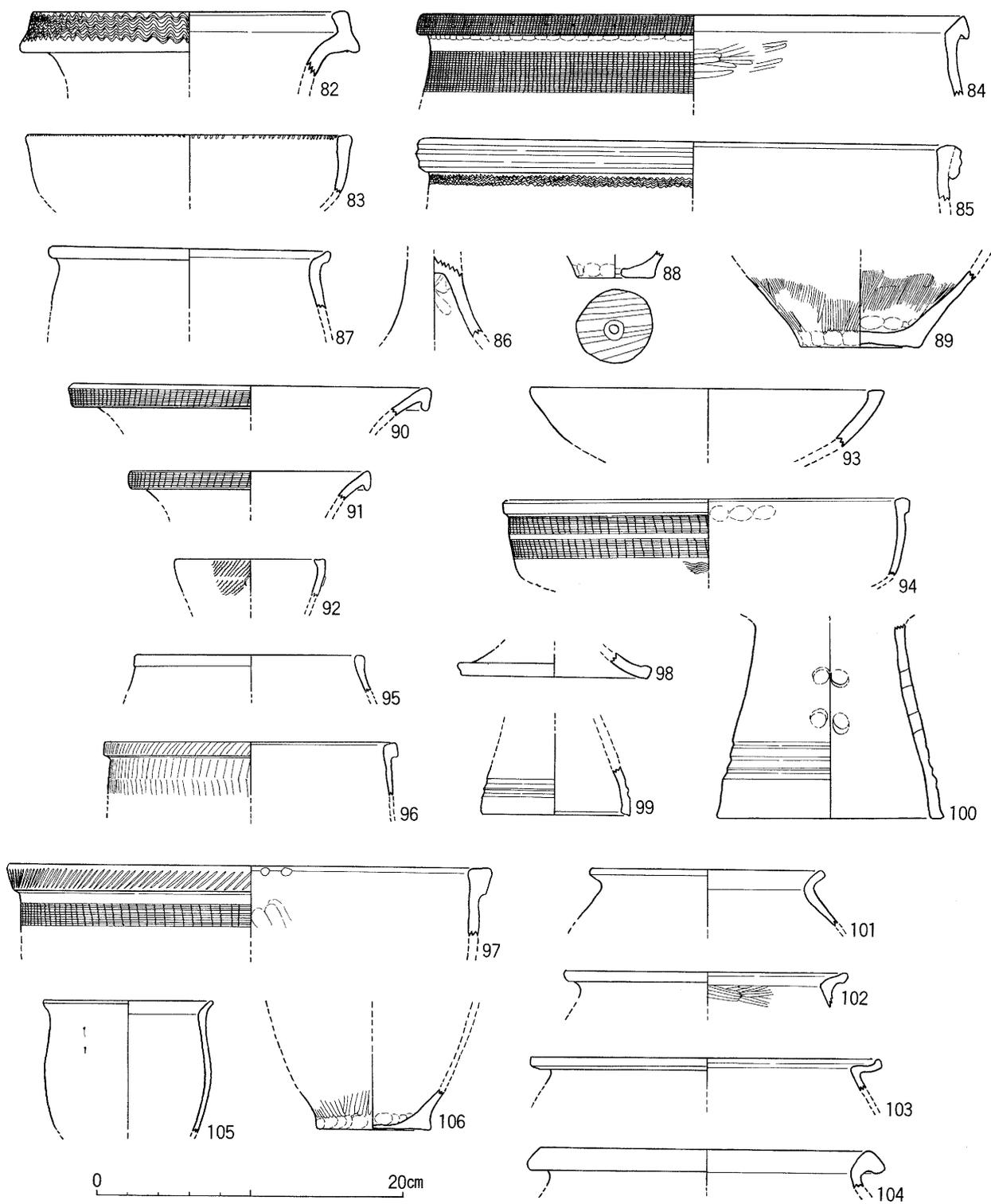


図13 土壙5・6・8出土弥生土器・土師器・黒色土器

前者は体部に指頭圧痕が明瞭に残る。後者は底部付近にだけ指頭圧痕が残り、口縁部は指頭圧痕がなで調整で消されている。

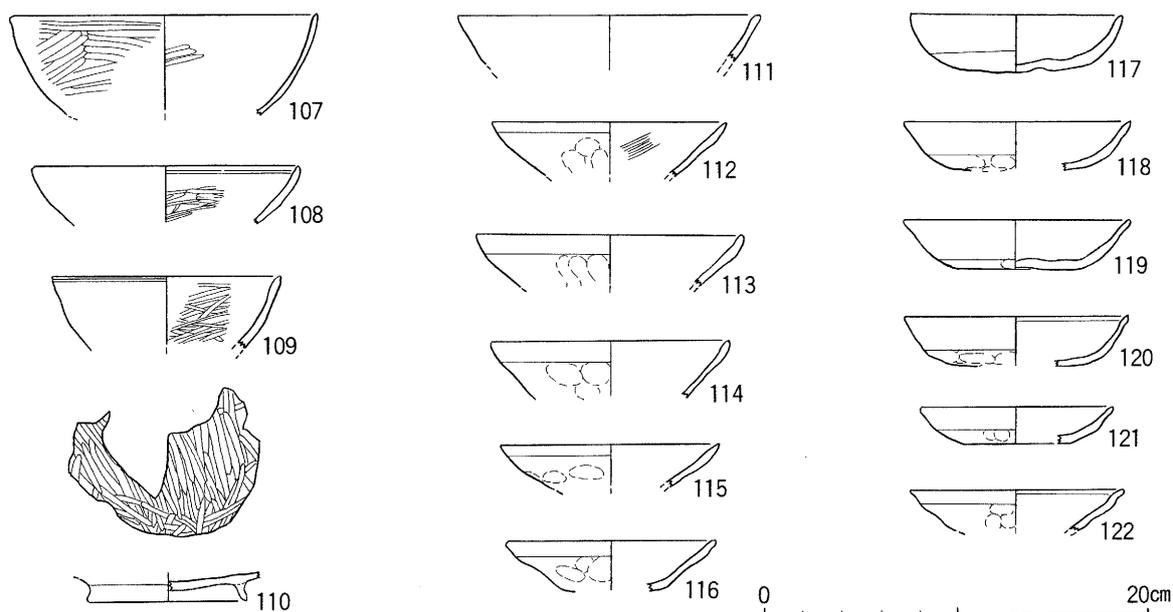


図14 ピット54出土土師器・黒色土器

小皿（121）は1点出土している。坏Bを小型化したような形態である。

黒色土器は椀がある。

椀（107～110）は4点あるが、すべて内黒である。

整地層出土土器

整地層は第2トレンチと第3トレンチで検出されているが、各トレンチごとに様相が若干違うのでトレンチごとに記述する。

第2トレンチ整地層出土器（図15、16）

遺物は弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器があるが、大半が弥生土器でその他の土器の量は少ない。なお、平瓦が1点出土しているが、便宜的にここで扱っておく。

弥生土器には広口壺、無頸壺、鉢、高坏、器台、甕がある。

広口壺は18点出土している。口頸部が外反して大きく開く広口壺A（123、124、126～129）が11点、曲折して立ち上がる口縁部をもつ広口壺B（125、130、131）が7点ある。広口壺Aは頸部が長くのびる可能性の考えられる（123、124）と短い頸部（126～129）がある。前者の口縁部はほとんど拡張しないが、後者の口縁部は下外方に拡張するもの他に上、下にわずかに拡張するものがある。口縁部端面は無紋のものが多いが、下端に刻み目の施したもの他、端面に簾状紋、斜格子紋、簾状紋の上と下に刻み目を組み合わせて施したものがある。広口壺Bの中には広口壺Aの口縁部の上面に粘土を貼りたして口縁部を作りだしたものとわかるものがある。口縁部の作り方に他の方法があるかどうかはわからない。口縁部の紋様は簾状紋だけを施したもの、簾状紋と列点紋を組み合わせたもの、列点紋、簾状紋、扇形紋を組み合わせたもの、斜線紋を施したものがある。

全体的な施紋傾向としては簾状紋がそれほど多くない。また、生駒西麓の胎土をもつものも少なく、広口壺Bに1点認められるだけである。

無頸壺（134）は1点出土している。ストレートに内傾する口縁部をもつ。口縁部に波状紋と直

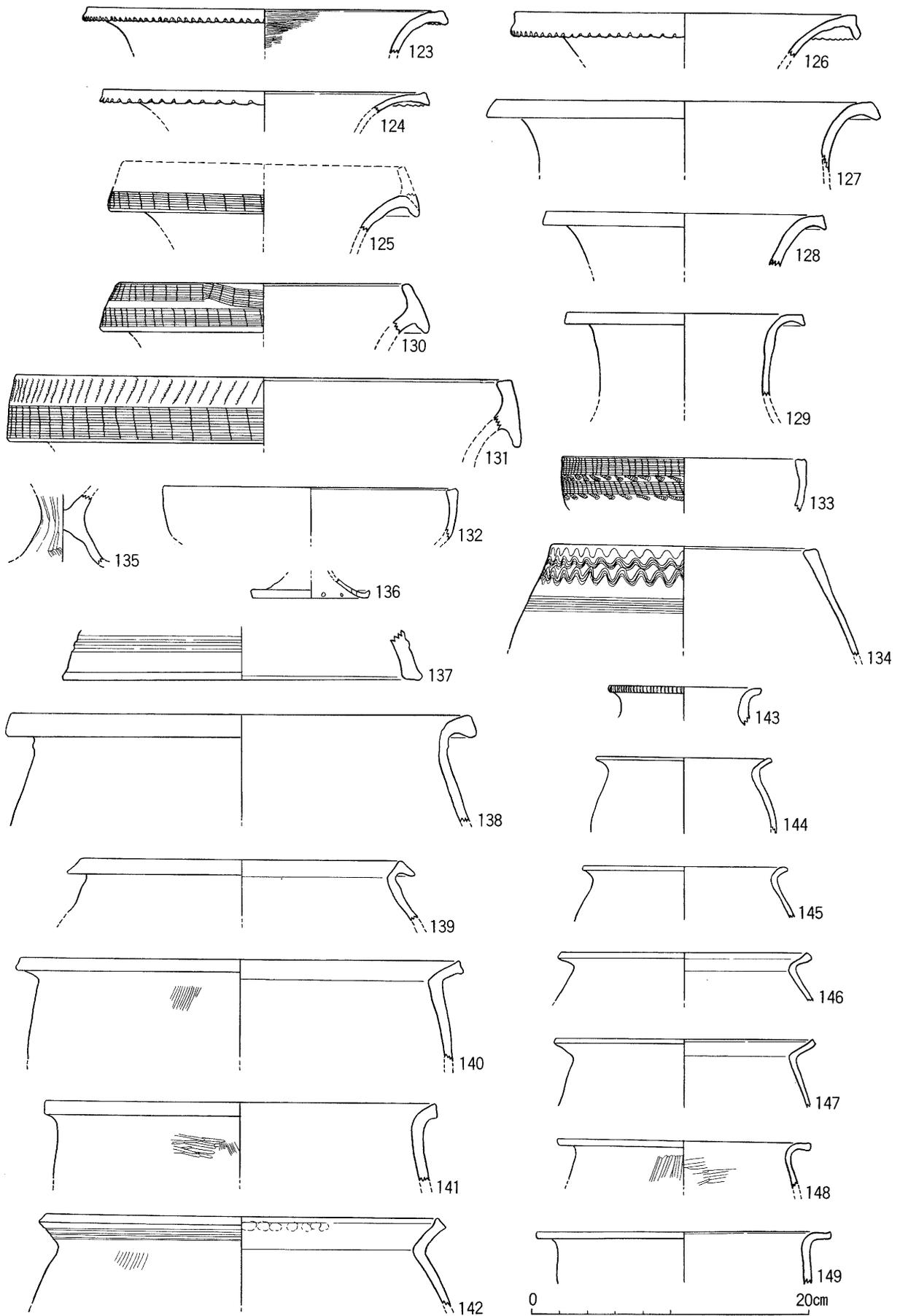


図15 第2トレンチ整地層出土弥生土器

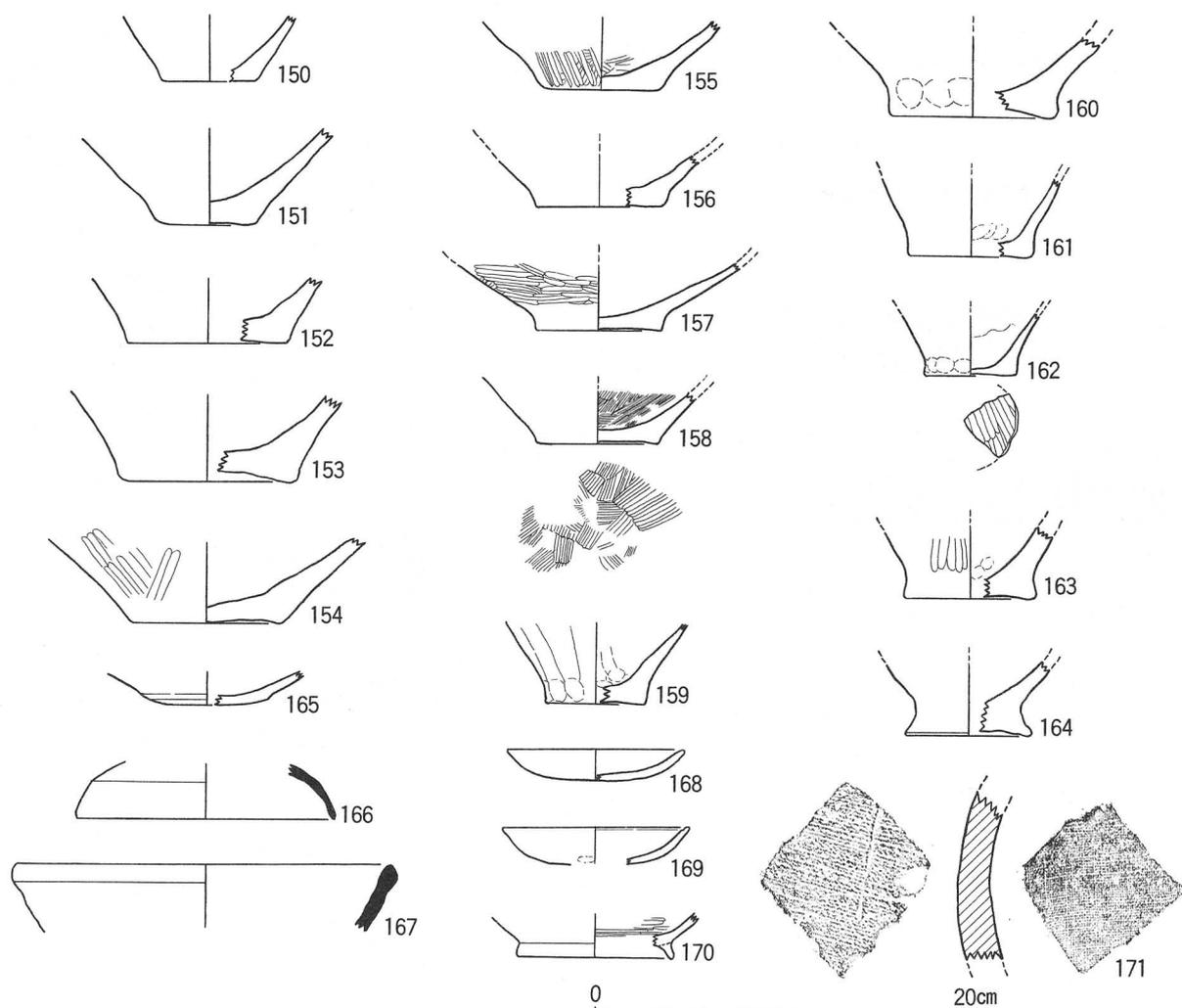


図16 第2トレンチ整地層出土弥生土器・須恵器・土師器・瓦

線紋が施されている。

鉢は2点出土している。段状の口縁部の鉢Bと無紋の外反する口縁部をもつ鉢Cが各1点ずつ認められる。前者は口縁部に列点紋に近い簾状紋が施されている。

高坏は5点出土している。浅い椀状の坏部をもつ高坏A（132、133）が2点、脚柱部（135）が1点、裾部片（136）が2点ある。図示していない裾部片には裾部に竹管紋がめぐる。

器台（137）は1点出土している。裾部に凹線紋がめぐる。

甕は12点出土している。小型品（143～145）が3点、中型品（146～149）が4点、大型品（138～142）が5点出土ある。これらのうち、生駒西麓産の胎土をもつものは2点（138、148）である。以上の他に底部片（150～164）が多数出土している。

土師器には甕、鍔釜、小皿がある。

甕は1点出土している。

鍔釜は1点出土している。外反する口縁部に水平の鍔部がめぐる。

小皿（168、169）は2点出土している。

須恵器には坏蓋と練鉢がある。

坏蓋（166）は1点出土している。丸みのある天井部をもつが、天井部と口縁部の境が不明瞭に

なっている。

練鉢（167）は1点出土している。

黒色土器は椀（170）が1点出土している。内黒である。

平瓦（171）が1点出土している。須恵質の瓦で凹面に布目、凸面に細かい縄目が認められる。

第3トレンチ整地層出土土器（図17、18）

遺物は弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、緑釉陶器、白磁、製塩土器がある。第2トレンチの整地層に比べると弥生土器が少なく、奈良時代から中世にかけての土器が多い。

弥生土器には広口壺と甕がある。

広口壺（172）は小型品で1点出土している。口縁部に直線紋に近い波状紋が施されていて、生駒西麓産の胎土をもつ。

甕（173）は1点出土している。

これらの他に底部片（174、175）が出土している。

土師器には皿、盤、高坏、甕、椀、坏、小皿がある。

皿（181）は1点出土している。平底で、口縁部は巻き込み、端部で肥厚する。

盤（182）は1点出土している。口縁部は体部から大きく角度をかえて外傾してのび、端部で肥厚する。

高坏（180、183）は2点出土している。（180）は7世紀代の高坏の裾部片で、内面に指頭圧痕が明瞭に残る。（183）は8世紀代の高坏で、坏部のきわめて浅い高坏である。

甕（185～187）は3点出土している。口縁部がゆるやかに外反する小型の甕（185）、口縁部が大きく外反する中型の甕（186）、口縁部がストレートに短く外傾する甕（187）がある。

椀は10点出土している。全体に丸いボール状の坏部をもつもの（189～193）と丸みをもたず、ストレートに外傾する坏部をもつもの（194、195）がある。（222～224）は底部片である。

坏（196～201、218）は7点出土している。椀に近い形態のもの（196～198、218）と皿に近い形態のもの（199～201）がある。

小皿は19点出土している。比較的深い皿（210、211）と中位の深さの皿（202～207、212～217、219）、浅い皿（208、209）の他に、高台のつく皿（220、221）がある。

これらの他に脚部片が1点出土している。三足土器の脚部と考えられる。

須恵器には蓋坏、壺がある。

坏蓋（176、177）は2点出土している。ともに宝珠つまみをもつが（176）は7世紀代の口縁部にかえりをもつもので、（177）は8世紀代のものである。

坏身（178）は1点出土している。

壺（179・184）は2点出土している。底部片で、高台がめぐる。

黒色土器には椀がある。

椀（225～235、239）は12点出土している。内黒のもの（225、227、228、232）と、両黒のもの（226、229、230、232、239）がある。

瓦器には椀がある。

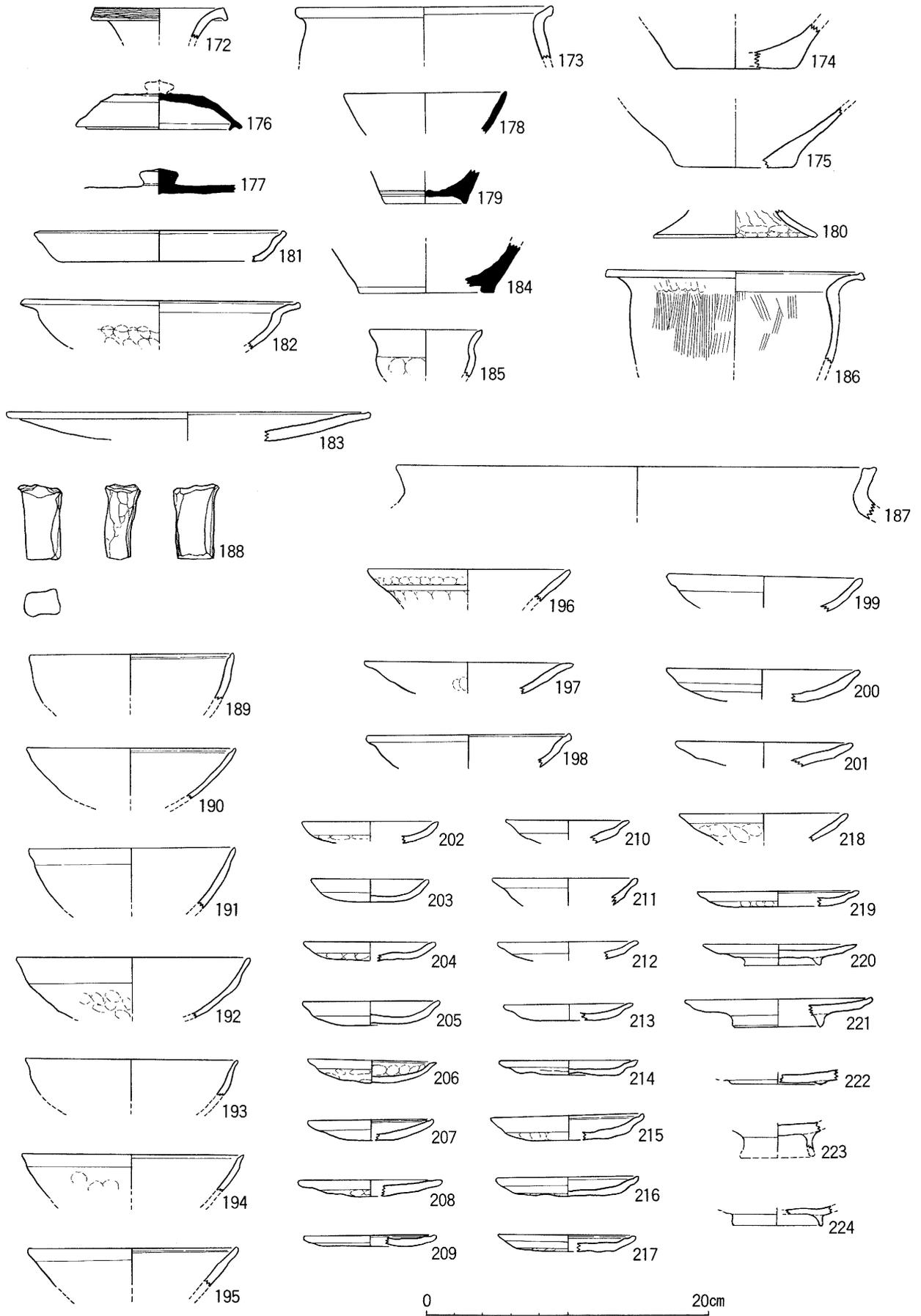


図17 第3トレンチ整地層出土弥生土器・須恵器・土師器

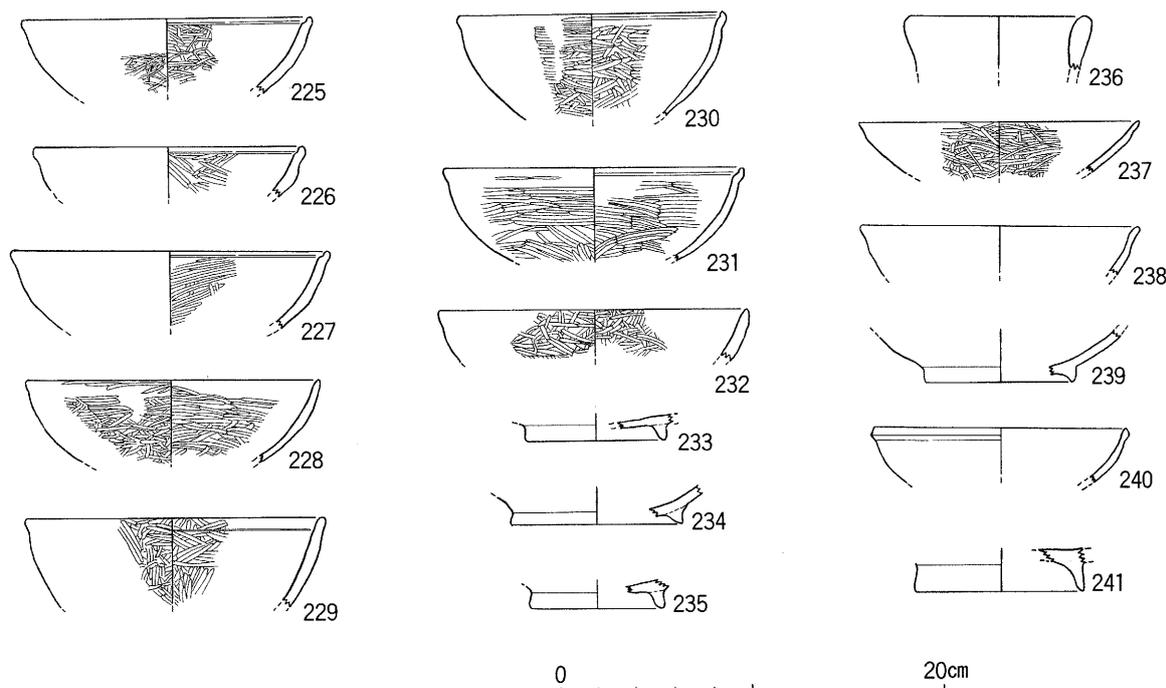


図18 第3トレンチ整地層出土黒色土器・瓦器・白磁・緑釉陶器・製塩土器

碗（237、238）が2点出土している。

白磁（240）は1点出土している。浅いボール状の体部をもつ。

緑釉陶器（241）は1点出土している。高台部片である。

製塩土器（236）は1点出土している。奈良時代の紀淡海峡産のものである。

2 土製品

弥生土器の紡錘車4点と円盤4点が出土している。すべて土器の破片の再利用品と考えられる。なお、観察にあたって、破片のカーブから外湾した面を外面（実測図左の図）、内湾した面を内面（実測図右の図）として記述する。

紡錘車 1～4（図19・図版7）

1. ほぼ完形品。外面にヘラ磨き調整が施されている。色調はにぶい褐色。生駒西麓産の胎土。砂粒の含有率は20%。直径4.9cm、孔径0.6cm、厚さ0.5cm、重量14.3g。溝1出土。

2. 約1/2だけ残存。外面にヘラ磨き調整が施されている。色調は赤褐色。砂粒の含有率は5%。直径4.2cm、孔径0.5cm、厚さ0.6cm、重量7.5g。1号住居跡出土。

3. 約3/4だけ残存。内外面とも刷毛目調整が施されている。色調は明褐色。砂粒含有率は5%。直径4.9cm、孔径0.4cm、厚さ0.6cm、重量10.7g。3号住居跡出土。

4. ほぼ完形品。内外面とも磨滅のため調整不明。色調はにぶい褐色。生駒西麓産の胎土。砂粒含有率は20%。直径4.2cm。孔径0.7cm、厚さ0.6cm、重量11.9g。土壙8出土。

円盤 5～8（図19・図版7）

5. 完形品。内外面とも磨滅のため調整不明。色調は灰白色。砂粒含有率は10%。直径4.6cm。厚さ0.6cm、重量14.8g。方形周溝墓周溝出土。

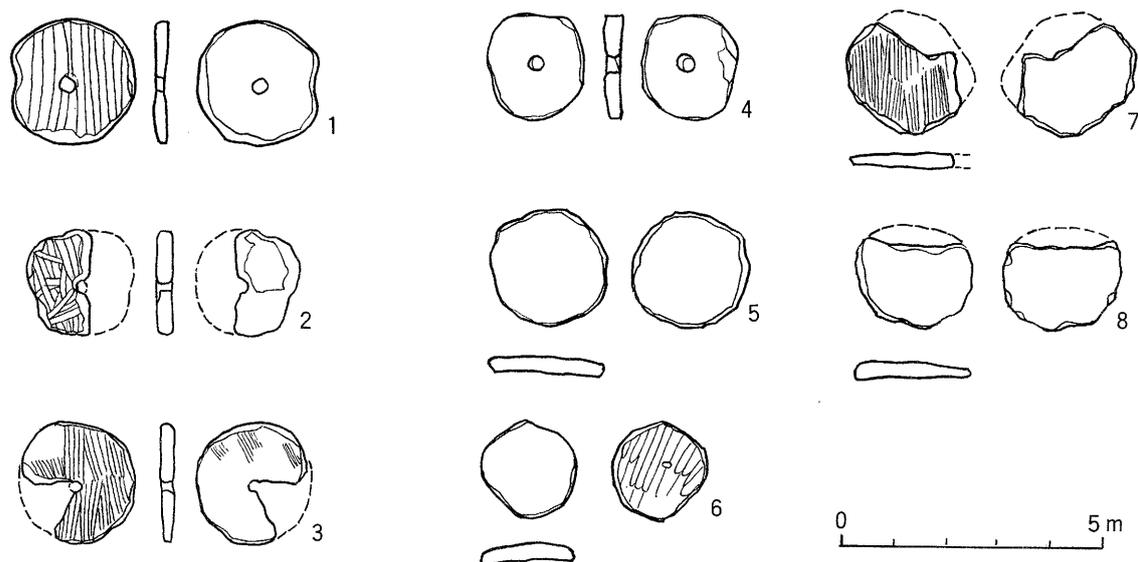


図19 紡錘車・円盤

6. ほぼ完形品。内面にヘラ磨き調整が施されている。色調はにぶい橙色。砂粒含有率は10%。直径3.9cm、厚さ0.7cm、重量9.6g。なお、内面のほぼ中央に直径0.3cm程度の円孔をあけようとした痕跡が認められる。方形周溝墓周溝出土。

7. 約3/4だけ残存。外面にヘラ磨き調整が施されている。色調は淡黄色。砂粒含有率は5%。直径4.9cm、厚さ0.7cm、重量12.2g。第1トレンチ床土出土。

8. 約3/4だけ残存。内外面とも磨滅のため調整不明。色調はにぶい褐色。生駒西麓産の胎土。砂粒含有率は20%。直径4.5cm、厚さ0.7cm、重量12.5g。4号住居跡出土。

3 石器

サヌカイト製の打製石器28点、剥片97点（内、細部調整剥片23点）、石核8点、結晶片岩製の石包丁4点、砂岩製の砥石1点、和泉砂岩製のすり石5点、砂岩製、チャート製の敲き石が計10点の他、紅廉片岩などの石片が出土している。これらの資料はすべて弥生時代中期に所属年代をあてることができるが、その中でも方形周溝墓周溝と3号住居跡から出土したものは弥生時代第Ⅲ様式期古段階に、4号住居跡、土壙5、8などから出土したものは弥生時代第Ⅲ様式期新段階～第Ⅳ様式期に比定できる。

ここでは、まず、サヌカイト製の打製品として石鎌、石槍、石錐、石小刀、削器を観察したあと、サヌカイト以外の製品として石包丁、砥石、すり石、敲き石を観察する。

なお、サヌカイト製の石器の観察記述にあたって、実測図の左の図を基準にして左右を決めている。

サヌカイト製打製石器

サヌカイト製打製石器の型式別の内訳は石鎌2点、石槍3点、石錐2点、石小刀1点、削器20点である（註2）。

石鎌1. 2（図20・図版8）

1. 完形品。基部の形態は凸基無茎式である。横形剥片を素材にして、その素材の側縁に先端部

と基部をつくりだしている。調整は片面調整で、中央断面は両凸形である。整形は非極厚細部調整でつくりだされている。原面は残していない。基部縁の磨き落としはない。長さ39.9mm、幅12.2mm、厚さ6.8mm、重量3.5g、最大幅位置19.4mm、先端角度49°、刃部長21.8mm。土壌8出土。

2. 基部の形態は凸基有茎式である。素材の形態は不明。調整は両面調整で中央断面は両凸形である。整形は非極厚細部調整でつくりだされている。B面中央に鑄が通る。刃部は鋸歯縁で左縁は先端から29.6mmの範囲に、右縁は31.8mmの範囲につくりだされている。刃1cmあたりの鋸歯数は左縁で10個、右縁で7個である。原面は残していない。基端部がわずかに折損。長さ37.8mm、幅21.9mm、厚さ5.0mm。重量2.9g、最大幅位置32.5mm、先端角度31°、刃部長32.5mm。第2トレンチ整地層出土。

石槍 3～5 (図20・図版8)

3. 先端部のみ残存。素材の形態は不明。調整は両面調整で、中央断面は両凸形である。整形は左縁が薄形（一部厚形）表面細部調整と平形裏面細部調整が複合し、右縁が薄形表面細部調整と平形裏面細部調整が複合してつくりだされている。折損は表面からのたたき折れ。残存長26.4mm、残存幅24.6mm、残存厚9.0mm。4号住居跡出土。

4. 完形品。おそらく原面打面の横形剥片を素材にして、その素材の側縁に先端部と基部をつくりだした木の葉形の尖頭器である。調整は片面調整で、中央断面は両凸形である。整形は先端部については両縁とも非極厚細部調整でつくりだされている。基部は左縁が薄形深形凸形両面細部調整でつくりだされているが、右縁については原面が取り込まれていて、その原面に薄形深形凸形表面細部調整が施されているだけである。長さ79.9mm、幅23.0mm、厚さ10.0mm、重量17.3g。方形周溝墓周溝出土。

5. 完形品。横形剥片を素材にして、その素材の側縁に先端部と基部をつくりだした木の葉形の尖頭器である。調整は片面調整で、中央断面は平凸形である。整形は左縁が薄形深形（一部侵形）凸形表面細部調整、右縁が厚形（一部薄形）侵形（一部薄形が重複）凸形表面細部調整と薄形侵形（一部薄形が重複）凸形裏面細部調整でつくりだされている。表面中央に原面が残る。長さ62.5mm、幅27.8mm、厚さ11.2mm、重量16.1g。第2トレンチ整地層出土。

石錐 6. 7 (図20・図版8)

6. 完形品。おそらく素材は縦形剥片で、その素材の先端部に石錐の先端刃部をつくりだしている。刃部の連続度は約1/2。先端刃部をつくりだすために素材の原形を変えるほどの整形はなされていないが、先端部を鋭くするために薄形深形直線形両面細部調整が先端から約18mmの範囲に施されている。先端部の断面形は両凸形。先端刃部の磨滅痕は使用状況をうかがわせる。長さ37.0mm、幅28.5mm、厚さ8.4mm、重量7.05g。4号住居跡出土。

7. 完形品。おそらく素材は縦形剥片で、その素材の先端部に石錐の先端刃部をつくりだしている。刃部の連続度は約1/2。刃部の整形は左縁が厚形深形凹形両面細部調整、右縁が厚形深形直線形両面細部調整が施されている。先端部の断面形は両凸形。先端刃部は磨滅して使用状況をうかがわせる。長さ61.0mm、幅21.0mm、厚さ10.7mm、重量10.1g。第2トレンチ整地層出土。

石小刀 8 (図20・図版8)

8. ほぼ完形品。おそらく素材は横形剥片で、その素材の右側縁に石小刀の刃部をつくりだしている。全体に短小で、木の葉形に近い形態をもつ。刃部の整形は薄形浅形凸形裏面細部調整でつく

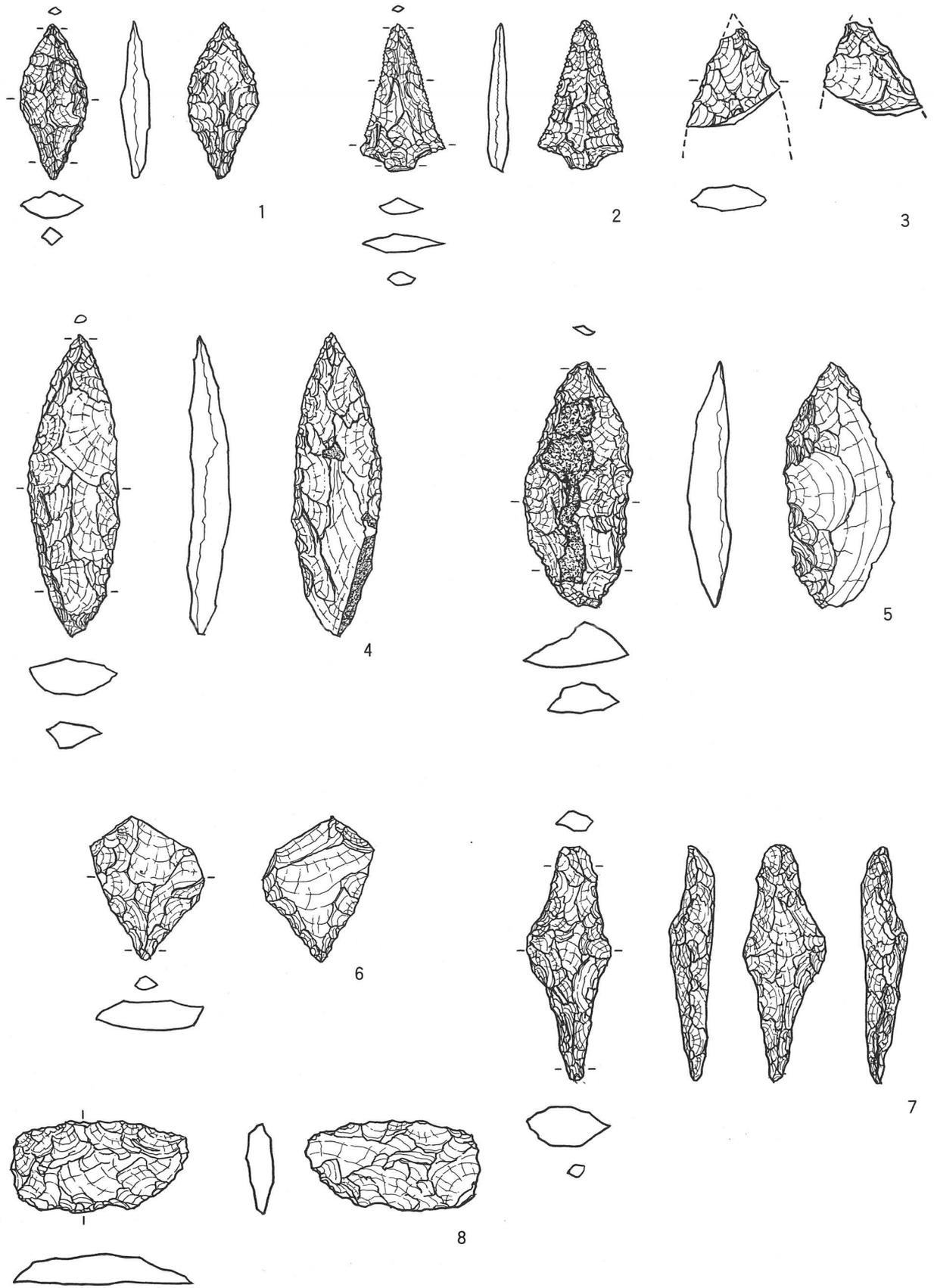
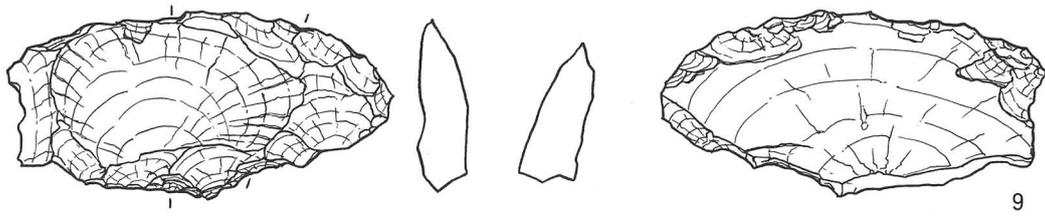
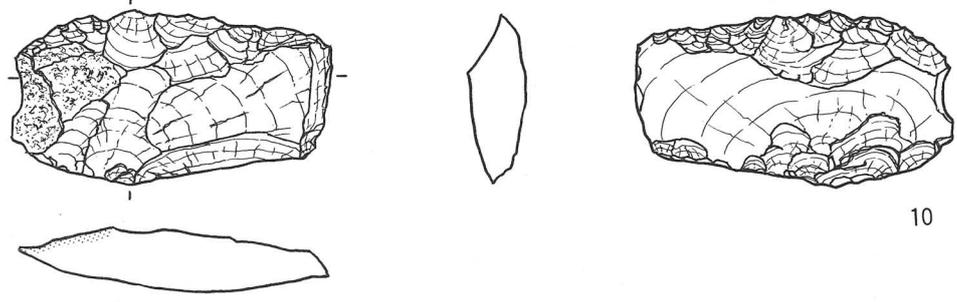


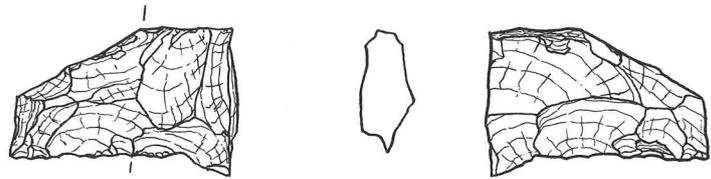
图20 石鏃·石槍·石錐·石小刀



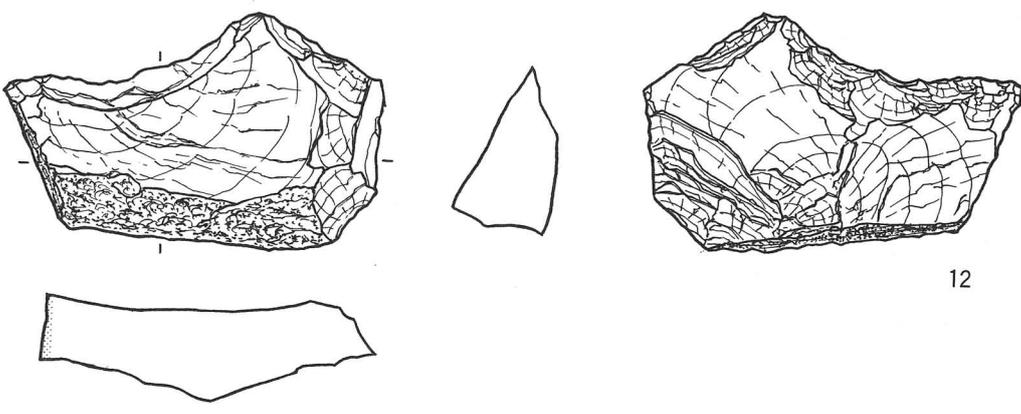
9



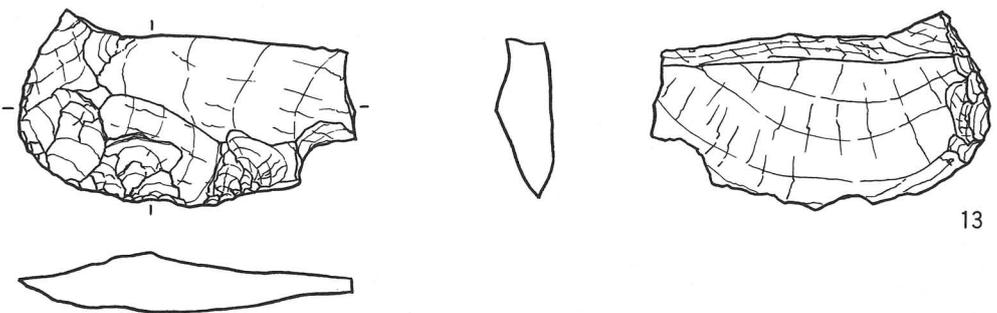
10



11



12



13

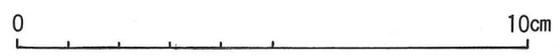


图21 削器

りだされている。長さ45.1mm、幅23.6mm、厚さ7.8mm、重量8.8g。第3トレンチ整地層出土。

削器 9～28

削器には横形削器、凹刃削器、直刃削器、凸刃削器、複刃削器がある。

横形削器 9 (図21・図版9)

9. 剥離面打面をもつやや打瘤の発達した横形剥片を素材にして、その素材の先端縁に刃部を凸刃で作りだした横形削器である。刃部は薄形深形凸形裏面細部調整と先端右縁に薄形深形凸形表面細部調整で作りだしている。原面は残っていない。長さ36.0mm、幅72.9mm、厚さ14.4mm、重量32.9g。3号住居跡出土。

凹刃削器 11～12. 14 (図21.22・図版9.10)

11. おそらく横形剥片を素材にして、その素材の基部側に刃部を作りだしている。素材剥片の先端面には原面が認められる。刃部は薄形侵形凹形両面細部調整に厚形浅形S字形表面細部調整が複合する。この石器の右縁の折面は素材剥片時のものではなく、この石器の最終時に作りだされたものである。長さ29.1mm、幅43.3mm、厚さ11.5mm、重量14.2g。土壙5出土。

12. 原面打面の打瘤の非常に発達した横形剥片の先端左縁に刃部を作りだしている。素材剥片の左側面は原面を取り込んでいる。刃部は厚形侵形凹形(ノッチ)裏面細部調整で作りだされている。長さ46.0mm、幅72.9mm、厚さ23.3mm、重量66.5g。3号住居跡出土。

14. 原面打面の剥片の先端部を折りとったものを素材にして、その素材の右側縁に刃部を作りだしている。刃部は薄形深形凹形表面細部調整で作りだされている。長さ47.8mm、幅47.6mm、厚さ13.7mm、重量37.3g。第3トレンチ整地層出土。

直刃削器 15 (図22・図版10)

15. 剥片の中央部片を素材にして、その素材の左縁に刃部を作りだしている。刃部は薄形深形直線形裏面(一部表面)細部調整で作りだされている。長さ44.1mm、幅29.7mm、厚さ9.1mm、重量11.2g。4号住居跡出土。

凸刃削器 16～19 (図22・図版10)

16. 原面打面の打瘤のそれほど発達しない横形剥片の左縁の折りとったものを素材にして、その素材の先端縁に刃部を作りだしている。刃部は薄形深形凸形表面細部調整で作りだしている。長さ35.8mm、幅47.9mm、厚さ10.2mm、重量16.7g。第2トレンチ整地層出土。

17. 剥離面打面の打瘤の発達していない剥片の両縁を折りとったものを素材にして、その素材の先端縁に刃部を作りだしている。刃部は薄形深形凸形表裏片縁細部調整で作りだしている。長さ36.8mm、幅21.6mm、厚さ10.9mm、重量7.2g。土壙8出土。

18. 原面打面の打瘤の発達しない縦形剥片を素材にして、その素材の右側縁に刃部を作りだしている。刃部は薄形深形(一部侵形)凸形両面細部調整で作りだしている。なお素材の先端部は新しい折損である。長さ29.7mm、残存幅37.0mm、厚さ7.1mm、重量6.7g。土壙8出土。

19. 打面ハジケの打瘤の発達しない縦形剥片を素材にして、その素材の右側縁に刃部を作りだしている。刃部は薄形深形凸形表裏片縁細部調整で作りだされている。長さ32.0mm、幅24.2mm、厚さ4.5mm、重量2.7g。溝3出土。

複刃削器 10. 13. 20～28 (図21. 22. 23・図版9～10)

10. やや打瘤の発達した横形剥片を素材にして、その素材の先端縁と基端部左縁に刃部をつくり

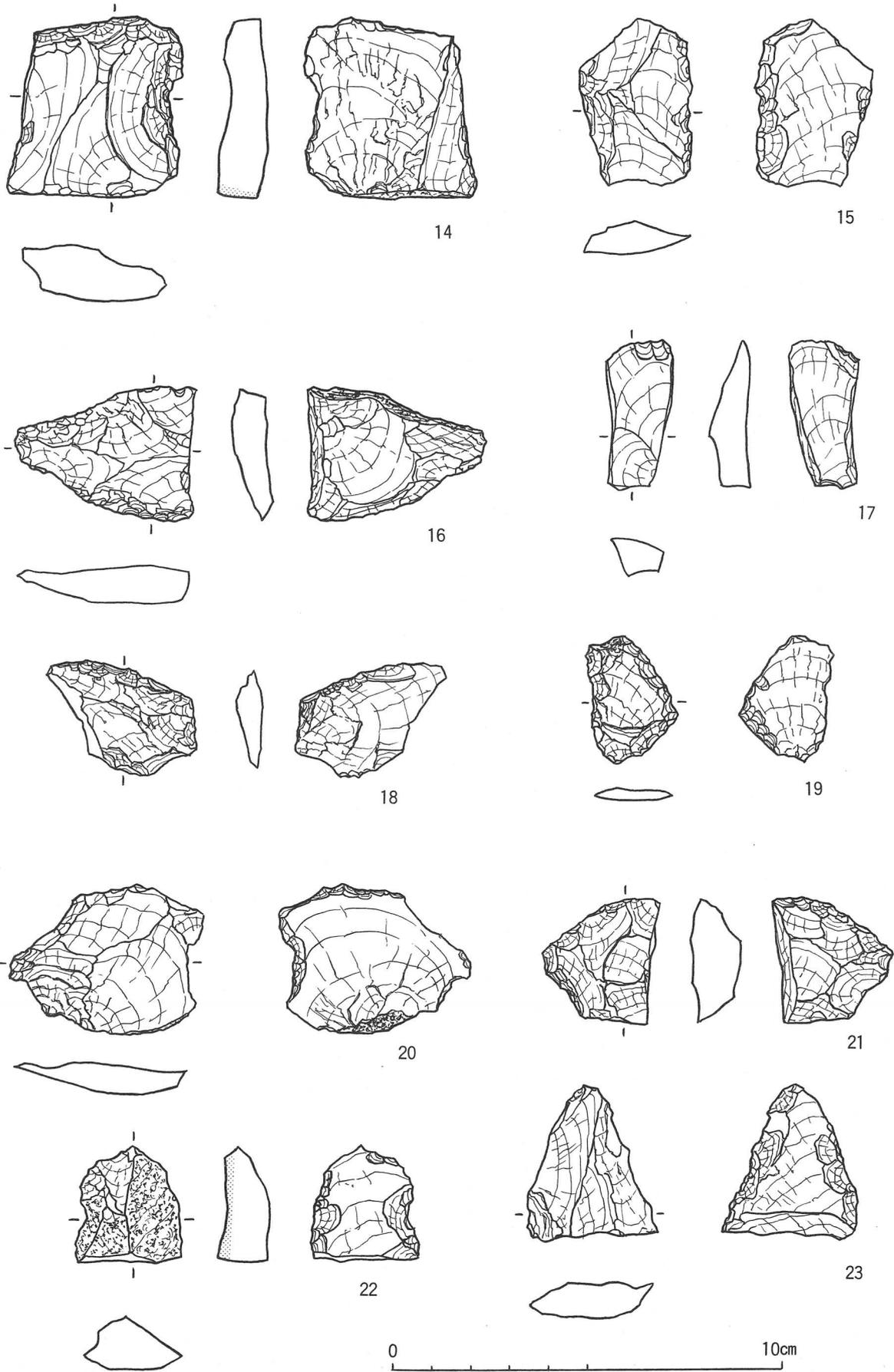


图22 削器

だしている。刃部は先端縁側は厚形深形凸形裏面細部調整で、基部側は平形深形直線形裏面細部調整で作りだしている。左面には原面が残っている。なお、この石器の右側縁には素材剥片時の裏面からのたたき折れによる折面があるが、この折面の裏面寄りには長軸方向の研磨痕が認められる。長さ37.5mm、幅74.1mm、厚さ13.4mm、重量29.4g。土壙8出土。

13. おそらく横形剥片を中央部で折りとったものを素材にして、その素材の先端縁と右側縁に刃部をつくりだしている。刃部は先端縁側は薄形深形S字形表面細部調整、右側縁側は薄形深形凸形裏面細部調整で作りだされている。長さ38.8mm、幅66.2mm、厚さ12.1mm、重量27.8g。第2トレンチ整地層出土。

20. 原面打面の打瘤の発達した横形剥片を素材にし、その素材の右側縁と先端部右縁に刃部をつくりだしている。刃部は右側縁側は厚形深形凹形（ノッチ）裏面細部調整、先端部右縁側は薄形深形直線形表面細部調整で作りだされている。長さ38.1mm、幅50.6mm、厚さ8.9mm、重量16.1g。溝3出土。

21. 剥片の左縁部を台石上でたたき折ったものを素材にして、その素材の先端縁と左側縁に刃部をつくりだしている。刃部は先端縁側は厚形深形凸形裏面細部調整、左側縁側は薄形侵形孤立両面細部調整と厚形深形凹形表面細部調整を複合させて刃部をつくりだしている。長さ31.8mm、幅26.9mm、厚さ12.9mm、重量13.0g。土壙5出土。

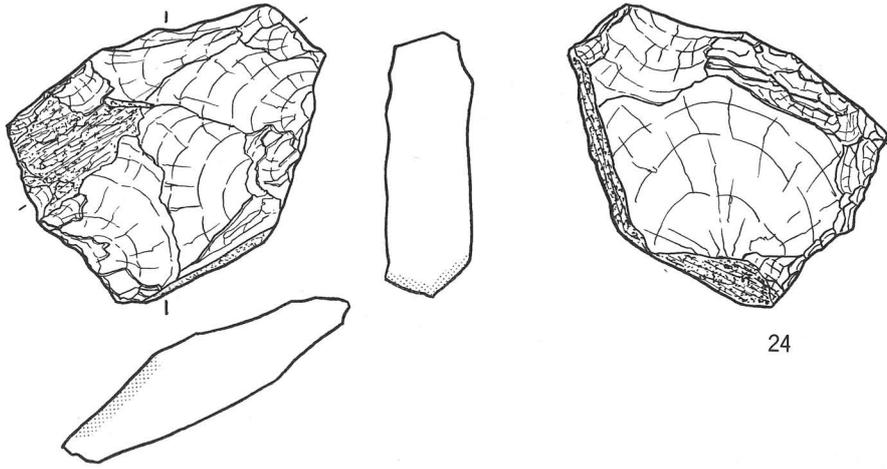
22. 剥片の中央部を裏面側から折りとったものを素材にして、その素材の両側縁と先端縁に刃部をつくりだしている。素材剥片の表面は原面がおおっている。刃部は左縁が薄形深形（一部侵形）S字形裏面細部調整、右縁は薄形深形S字形裏面細部調整、先端部は薄形深形凹形裏面細部調整と厚形侵形孤立凹形表面細部調整が複合して作りだされている。長さ31.1mm、幅29.2mm、厚さ15.2mm、重量11.9g。第2トレンチ整地層出土。

23. おそらく横形剥片の右縁部を表面から折りとった剥片を素材にして、その素材の先端縁と基部縁に刃部をつくりだしている。刃部は先端部側は薄形深形直線形裏面細部調整、基部側は薄形深形凸形裏面細部調整で作りだされている。長さ38.5mm、幅34.3mm、厚さ12.5mm、重量10.5g。4号住居跡出土。

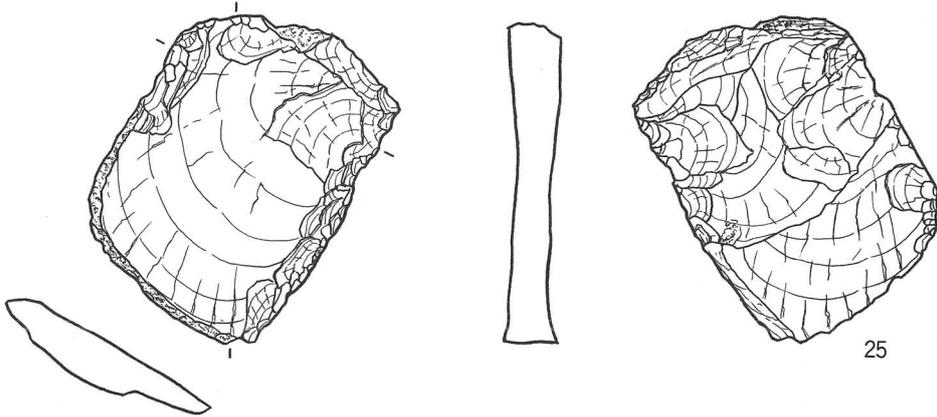
24. 原面打面の打瘤の発達しない横形剥片を素材にして、その素材の両側縁部に刃部をつくりだしている。素材の右側面は原面が残っている。刃部は左縁部が薄形深形直線形両面細部調整、右縁部が薄形深形（一部侵形）S字形両面細部調整で作りだされている。なお、この刃部の左縁部は打撃痕も同時に認められることから、楔としての使用も考えられる。長さ65.0mm、幅55.0mm、厚さ17.6mm、重量71.1g。土壙5出土。

25. 原面打面の打瘤の発達しない縦形剥片を素材にして、その素材の両側縁と基端部左縁に刃部をつくりだしている。素材剥片の右側面から先端面には原面が残る。刃部は左側縁が薄形深形（一部侵形）凹形両面細部調整、右側縁が薄形侵形孤立凹形裏面細部調整、基端部左縁は厚形深形凸形裏面細部調整で作りだされている。長さ63.4mm、幅62.5mm、厚さ10.1mm、重量41.9g。4号住居跡出土。

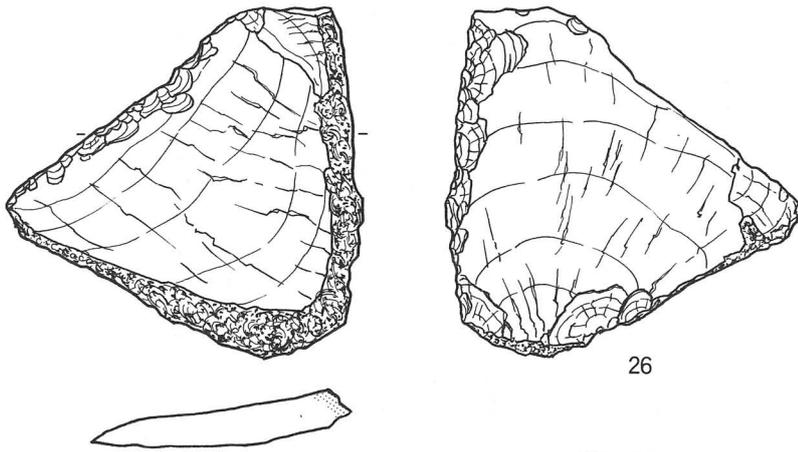
26. 原面打面のほとんど打瘤の発達しない横形剥片を素材にして、その素材の左側縁と先端縁に刃部をつくりだしている。素材剥片の両側面には原面が残っている。刃部は左側縁は薄形深形直線形裏面細部調整、先端縁は薄形深形凹形表面細部調整で作りだされている。長さ68.7mm、幅



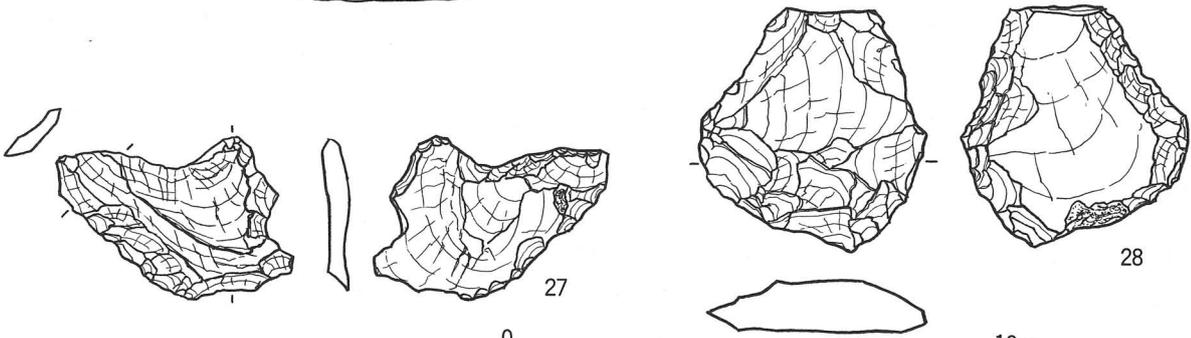
24



25



26



27

28

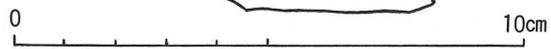


图23 削器

72.6mm、厚さ18.8mm、重量60.1g。土壙7出土。

27. おそらく横形剥片を素材にして、その素材の基端部と右側縁に刃部をつくりだしている。刃部は基端部が薄形深形S字形裏面細部調整、右側縁は薄形深形S字形両面細部調整と薄形深形凸形裏面細部調整が複合してつくりだされている。長さ30.4mm、幅47.5mm、厚さ7.5mm、重量7.8g。方形周溝墓周溝の南東コーナー出土。

28. 原面打面の打瘤の発達しない横形剥片を素材にして、その素材の両側縁に刃部をつくりだしている。刃部は左側縁が薄形深形凹形裏面細部調整、右側縁は厚形深形直線形表裏片縁細部調整でつくりだされている。長さ46.5mm、幅43.0mm、厚さ10.9mm、重量25.5g。第3トレンチ整地層出土。

サヌカイト以外の石器遺物

サヌカイト以外の石器には結晶片岩製の石包丁が4点、極細粒の砂岩製の砥石が1点、和泉砂岩製のすり石が5点、砂岩製、チャート製の敲き石が計10点出土している。

石包丁29～32（図24・図版7）

29. 直線刃半月形態の石包丁で片端部の約1/5が欠失している。片刃である。身幅の広い形態で、端部は丸みをもつ。刃部稜は明瞭で、刃部は使用により深さ約1.5mmの内湾部分がある。なお、その内湾範囲にだけ鋭い刃縁をもち、また、その範囲に使用によると考えられる小剥離が刃部に直交する方向に認められる。しかし、光沢は認められない。刃面は体部に対して急角度につくりだされている。紐孔は身幅中央、背面寄りに2つ、紐孔間距離23.0mmでほぼ並列している。長さ47.5mm、残存幅101.2mm、厚さ7.1mm、紐孔径9.0mm。3号住居跡出土。

30. 楕円形態の石包丁で、約1/2だけ残存している。片刃である。刃部は直刃で、刃部稜は明瞭である。刃部は使用によると考えられる刃縁に直交する線状痕と刃こぼれが顕著に認められる。しかし、光沢は認められない。刃面は体部に対して急角度につくられている。紐孔は背部寄りに2つ、紐孔間距離23.2mmでほぼ並列している。背部には長軸に直交する方向に背潰れ痕と呼ばれている浅い条痕が認められる。長さ39.9mm、残存幅70.8mm、厚さ7.6mm、紐孔径9.8mm。3号住居跡出土。

31. 片端部に近い、約1/3が残存している。刃部はほとんど欠失しているため不明である。残存長57.9mm、残存幅55.8mm、厚さ10.2mm、紐孔径7.7mm。土壙5出土。

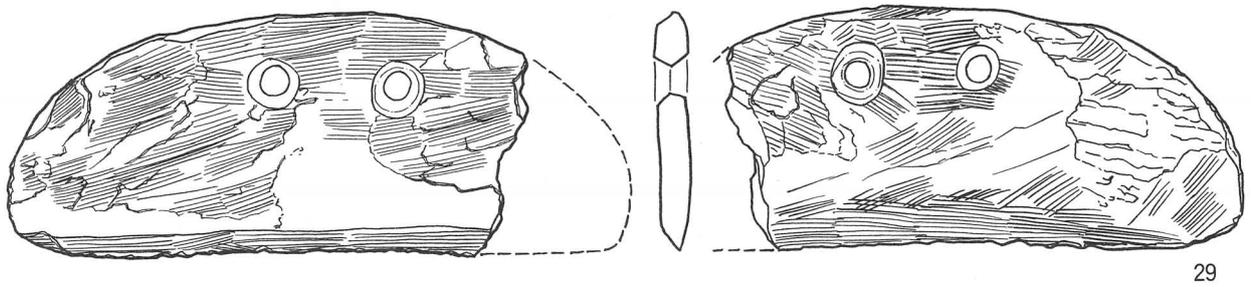
32. 中央部に近い、約1/4が残存している。おそらく、全体の形態は直線刃半月形態と考えられる。刃部は両刃であるが、刃部稜は不明瞭である。紐孔の状況は不明である。残存長46.2mm、残存幅45.9mm、厚さ9.4mm。土壙5出土。

砥石33（図24・図版7）

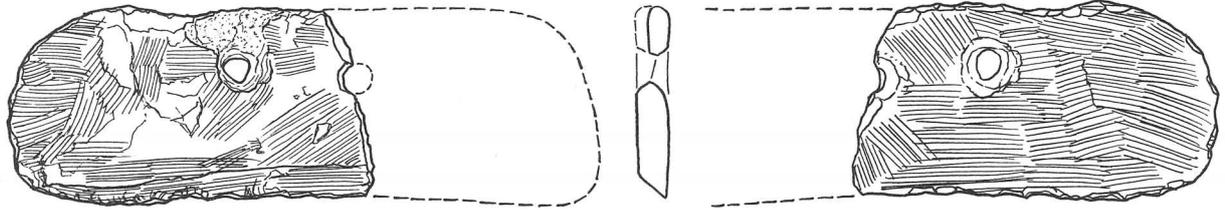
2点出土している。ともに砂岩製の砥石であるが、小型の（33）と大型の置き砥石がある。

33. 極細粒の砂岩製の方柱状の砥石である。平面形態は分銅形に近い。全面に使用が認められるが、柱中央部での使用が著しく、すり減りが顕著である。しかし、各面のコーナーはしっかりしている。長さ68.3mm、幅31.9mm、厚さ31.3mm、重量79.8g。方形周溝墓周溝出土。

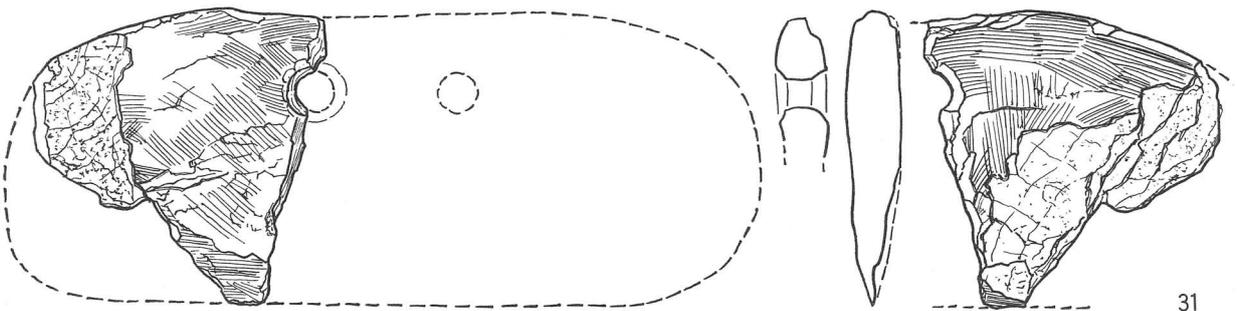
すり石



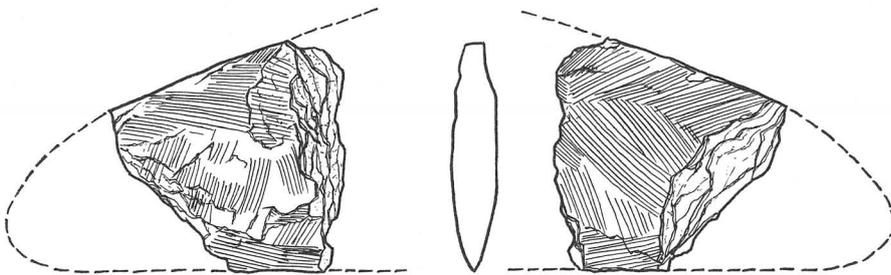
29



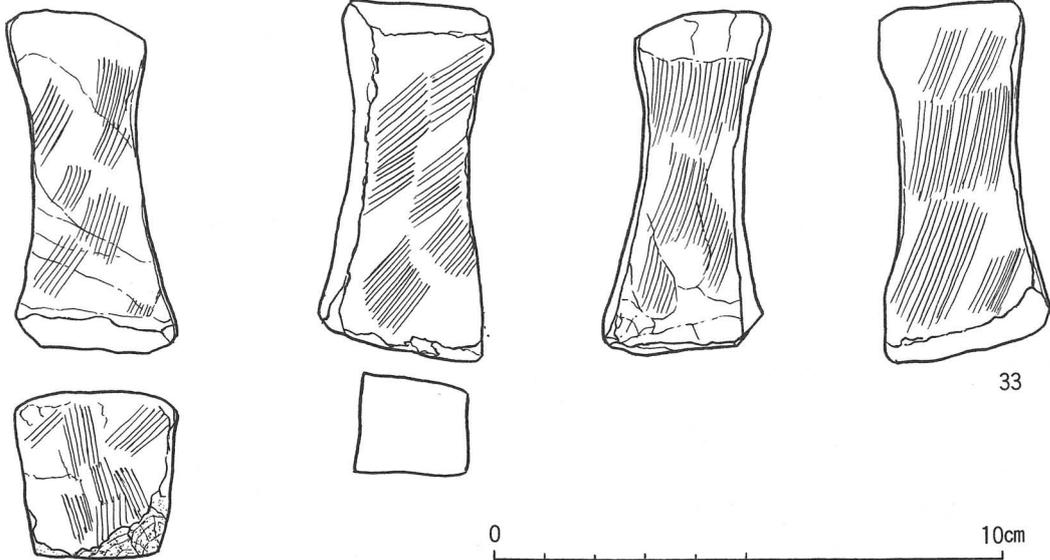
30



31



32



33

0 10cm

图24 石包丁·砥石

すべて砂岩製で円盤状を呈している。

敲き石

砂岩製のものが多いが、チャート製のものもある。砂岩製の敲き石は球形のもの、楕円形のもの、細長いもの、三角形のもの、円盤状のものなど形状は様々である。チャート製の敲き石は方形に近い円盤状のもの、楕円形のものがある。

(註)

1. 中村浩(1978)「和泉陶器窯出土遺物の時期編年」、『陶器Ⅲ』,大阪府教育委員会,168～241頁。

2. 用語については基本的には山中一郎氏と森本晋氏に従っている。

山中一郎(1978)「森の宮遺跡出土の石器について」、『森の宮遺跡 第34次発掘調査報告書』,難波宮址顕彰会,124～147頁。

山中一郎(1982)「石器遺物」、『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』,(財)大阪市文化財協会,158～204頁。

森本晋(1983)「喜志遺跡80-3区の石器」、『喜志遺跡・東阪田遺跡発掘調査概要・Ⅳ』,大阪府教育委員会,31～46頁。

6. まとめ

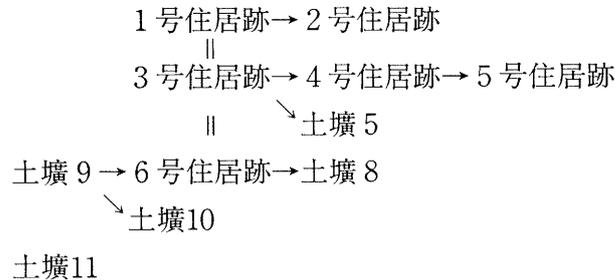
今回の調査地は、当初から甲田南遺跡が大規模な弥生時代の集落跡(註1)として初めて注目される契機になった国道309号線の富田林バイパスの建設工事に伴う発掘調査地のすぐ南側であったことから、その時の調査で発見された弥生時代の竪穴住居跡の続きが今回の調査区北側で検出される(註2)ことを予想していた。また、今回の調査区のすぐ南側については1992年度に本市の教育委員会が調査をおこなっているが、溝、ピットの検出はみたものの、遺物がまったく検出されなかった。そんな中で、今回の調査はどこまで弥生時代の集落が広がるのか検討することを主眼において行った。そういう意味ではトレンチ調査という限界のある調査ではあったものの、新たな墓域と住居跡の確認、さらに弥生時代の堆積層が第2トレンチまでで終わり、第3トレンチでは堆積状況がかわることが確認され、弥生時代の堆積層のほぼ南限をおさえることができたことは評価できる。

ここでは新たに発見された墓域の状況と住居跡、そしてその住居を壊して作られた土壇の関係を再度、確認することでまとめにかえたい。

第1トレンチで検出した方形周溝墓が甲田南遺跡では新たな地点での墓域になることはすでにのべているところであるが、このことでこの集落には北東部と南東部の2箇所方形周溝部を埋葬施設にする墓域が広がっていることが確認できた。さらに南東部の方形周溝墓群が2基以上、溝を共有して存在すること、また、このうちの北側、2号方形周溝墓と名付けた方は周溝底に拳大程度の川原石が敷き詰められてあったことが認められた。この2号方形周溝墓の周溝底に敷くように置かれてあった多量の川原石については、類例がないためその解釈がきわめて困難である。墓造営の当初から墓の施設の一部として現場所に敷かれていたのか、造営後、墓の施設として敷いてあったものが落ちて現状になったのか、溝の埋没時に偶然入り込み、結果としてあのように敷いた状況を呈していたのかなど様々な解釈が考えられる。しかし、確実なことはこの方形周溝墓の周辺に段丘礫層と呼ばれる多量の礫を含んだ地山面が広がる中で、その礫層面をさけ、きれいな粘土層を掘り込んで方形周溝墓が築かれていること、また、周溝が共有溝であるにも関わらず、ある部分では2号周溝墓に属する周溝と区別できる場所に石を敷いていること、さらに石の大きさがほぼ拳大にそろっていること、そして自然石の下からはまったく土器が検出されなかったという事実である。これらのことを考えあわせると方形周溝墓形成と川原石敷設の間に時間差をそれほど考えることはで

きず、機能を含めてその敷設理由はわからないものの、川原石が方形周溝墓造営時から敷かれてあったと考えておきたい。

次に第2トレンチで検出された6軒の住居跡と土壌の所属時期について考えてみたい。まず、遺構の切り合い関係からこれらをみると、以下の状況が考えられる。なお、各遺構間の新旧関係は(古)→(新)として表している。



これらの遺構のうち、出土遺物から所属時期のわかるものは住居跡では3号住居跡と4号住居跡だけで前者が第Ⅲ様式期古段階、後者が第Ⅲ様式期新段階から第Ⅳ様式期に比定できる。同様に土壌のうち遺物で所属時期が確認できるものは土壌5と土壌8で、ともに第Ⅲ様式期新段階から第Ⅳ様式期に比定できる。次に住居跡の埋土についてみる。1号住居跡と3号住居跡と6号住居跡の埋土が濁茶褐色弱粘質土、2号住居跡と4号住居跡の埋土は暗茶褐色弱粘質土でこれらのうち同質の堆積土をもつものを同時期とみなし、前述の遺構切り合い関係を示したものを(=)で表してみた。これらのことから、住居跡と土壌の時期を考えると以下ようになる。

段 階	土器様式期	遺 構 名
第1期	第Ⅲ様式期古段階(前半)	土壌9
第2期	第Ⅲ様式期古段階	1号住居跡・3号住居跡・6号住居跡
第3期	第Ⅲ(古)～Ⅳ様式期	2号住居跡・4号住居跡・土壌5・土壌8
第4期	第Ⅳ様式期(後半)	5号住居跡・土壌2

表4 甲田南遺跡住居跡・土壌変遷(案)

さて、甲田南遺跡の弥生時代の集落の所属時期はすでに指摘されているとおり、第Ⅲ様式期～第Ⅳ様式期で、そのことを変えるようなことは今回の調査でも認められなかった。しかし、これらの時期幅の中で住居跡と土壌の関係から上記の4つの時期に細分できることが確認できた。ただし、このうちの第1期については第2期と出土土器の差異や住居跡との切り合い関係から分類したものではないので、その間にある実年代の幅はきわめて短いものと考えておきたい。

以上の前提に立って先に述べた方形周溝墓について考えてみると、所属時期が第Ⅲ様式期古段階であることから、少なくとも第2期には造営されていたものと考えられる。さらに、すでに述べたように第1期との時期幅を考えると、この方形周溝墓群がこの集落の開村時期にほとんど遅れることなく築かれた初期の墓域であることを指摘することができる。

以上の調査成果を含めて甲田南遺跡の弥生時代の集落の構造について、次の章でまとめてみたい。

(註)

1. 今村道雄(1982),『甲田南遺跡発掘調査概要報告書—富田林市南甲田、若葉町所在—』,大阪府教育委員会。
2. 富田林市教育委員会(1993),『平成4年度 富田林市内遺跡群発掘調査概要』,1頁(表2-11)。

7. 考察

甲田南遺跡の弥生時代集落の歴史的意義

1. はじめに

甲田南遺跡は石川左岸の富田林市域の弥生時代の集落跡としては発掘調査が進み、集落構造がかなり明らかになってきている遺跡である。この遺跡を議論の中心にした石川左岸の弥生時代の集落群のあり方についてはすでに小林義孝氏によってまとめられているが(註1)、ここではその研究をふまえて、その後の調査で明らかになった事実を付け加え、改めて甲田南遺跡における弥生時代集落の歴史的意義について考えて見たい。

2. 集落の立地と規模(図25)

甲田南遺跡は石川の左岸の低位段丘上に立地する。石川と大和川の合流点にある国府・船橋遺跡から南へ約10km、その間に北から城山遺跡、喜志遺跡、中野遺跡が約2～3kmの間隔をおいて存在している。これらは国府・船橋遺跡を除いてすべて弥生時代中期の集落跡である。

図25は甲田南遺跡の弥生時代の集落の範囲を調べるために、既往の調査での弥生時代の遺構、および遺物の出土地点をおとしたものである。これらのうち「×」印を付けた調査区は、弥生時代の遺構、および遺物が検出されなかった場所である。また、「？」印を付けた調査区は弥生時代の遺物が検出されなかったものの、遺構の埋土に暗褐色系の通常、甲田南遺跡周辺で弥生時代の包含層としてよく認められる堆積土が確認された場所である。それ以外の場所は弥生時代の遺構、および遺物が検出された調査区である。これをもとに甲田南遺跡の弥生時代の集落の範囲を復元してみる。

北限は1988年度に富田林市教育委員会が行った調査区6(註2)周辺で、そこからそれほど北に広がることはない。なぜなら、調査区1～3、5で遺構が検出されていないことからだけでなく、図26の弥生時代の集落と地形の関係を表した図でもわかるように、調査区6のすぐ北側には谷状地形が形成されているからである。さらに、最近まで地下水位が高く、常時ぬかるんでいて居住に適さない地域であることが確認されている。そして、このことは調査区1で検出された沼がその一隅にあたっていることから整合する。ただ、調査区4に認められる弥生時代の包含層らしきものの存在をどう評価するかが問題として残るが、集落内に含めるよりも、この一帯で弥生時代の遺構・遺物が未検出であることや谷状地形の存在を重視して、集落の外域としての耕作域の可能性を考えておきたい。(註3)

西限は調査区22(註4)で1980年度に大阪府教育委員会が調査を行い、竪穴住居跡1棟と小土壇、ピットが確認されている。これより西側は広がるとしても中位段丘面との段丘崖までで、調査区22から距離にして西へ30m前後である。ただし、この調査区22で確認された住居跡は1棟だけで、住居跡の密集する調査区12との間に約100m前後の距離がある。また、その間には2基の甕棺墓や不整形の土壇が検出されているだけで、この間の住居跡空白地帯をも集落の広がりの中にも含めるか否かは議論の分かれるところである。集落の中心域と考えられる地域と遺構のあり方に違いがあることを重視して、この住居跡については別の評価が必要かもしれない。しかし、ここではその決定は保留して広範囲にとれば調査区22付近、狭範囲にとれば、調査区12付近の竪穴住居跡密集地帯までと考えておきたい。

きな解析谷に、南は小規模な谷状地形に画され、その中でも比較的高燥の空間に居住域を選んでいくことである。さらに、この範囲の中でも調査区12付近で建て替えが何度もおこなわれることからみると、その周辺が最も安定した場所であることが推測できる。

次に集落内の居住域が弥生時代中期という時間的枠組みのなかでどのように変化しているか、細かく検討してみたい。

3. 居住域の変遷

居住域の中に約70棟の竪穴住居が建てられていたことはすでに述べたとおりである。これらの内、図25に示した調査区12で特に建て替えが多く認められ、平均3回、最高5回にもおよぶ建て替えがおこなわれている。今回報告した調査区13でも住居跡の建て替えが認められ、それらの住居跡とそれらに重複する土壌の切り合い関係、埋土の状況、出土遺物を総合して、調査区内のそれらの遺構を4つの時期差としてとらえたことは前項のまとめで述べた。すなわち、第1期（第Ⅲ様式期古段階前半）、第2期（第Ⅲ様式期古段階）、第3期（第Ⅲ様式期新段階～第Ⅳ様式期）、第4期（第Ⅳ様式期後半）である。ここでは最高5回の建て替えのある住居跡群があることから5期以上に細分したいところであるが、現時点での弥生土器の編年観、既往の報告書から引き出せる情報の限界などを考えあわせると5期以上に細分することは困難である。そこで、先の4時期区分のうち、出土土器だけで細分の可能な分類として、以下の諸点をメルクマールにした3時期区分を改めて設定し、居住域の変遷を考えてみる。

第Ⅰ期……第Ⅲ様式期古段階（広口壺の中に長い頸部のものが存在し、紋様構成は櫛描直線紋が主体である。また、簾状紋の施紋幅が狭い。）

第Ⅱ期……第Ⅲ様式期新段階～第Ⅳ様式期古段階（紋様構成は簾状文が主体で施紋幅の広いものが出現。凹線紋の出現。）

第Ⅲ期……第Ⅳ様式期新段階（各種浮紋・凹線紋の採用の増加。）

図27は集落内の主な遺構を前述の3時期区分にあてはめたものである。遺構の中には遺物が出土していないもの、既往の報告書に出土遺物の報告のないもの、出土遺物があっても時期の判別が困難なものなどがあり、不完全な図であることは否定できない。しかし、そんな限界も考慮にいれながら居住域の移動をみてみよう。なお、遺構の中で時期幅の認められるものは遺構の最終時期を示している。

まず、第Ⅰ期の遺構として明確なものには粗い網点を掛けた。それらをみると集落の東側に集中していることがわかる。これらの他に第Ⅱ期・第Ⅲ期の遺構で壊された遺構の中にこの第Ⅰ期の遺構と認定できるものが含まれると思われるが、それについては明らかにできなかった。ただ、第Ⅲ期と認定した調査区12西側の住居跡が密集する区域には第Ⅰ期にまで遡る土器がほとんど出土していないこと、また、調査区12の東側2/3の調査時の報告（註5）でも「弥生土器は、Ⅲ様式を中心とするもので、東部出土の土器は、若干、時期的に古い様相を示すものがみられ、それとは反対に西部では、器台など新しい要素をもつ土器が出土している。」という所見が述べられていることをあわせ考えると、調査区12の中の時期を特定できなかった東側の住居群の中に、この時期のもの

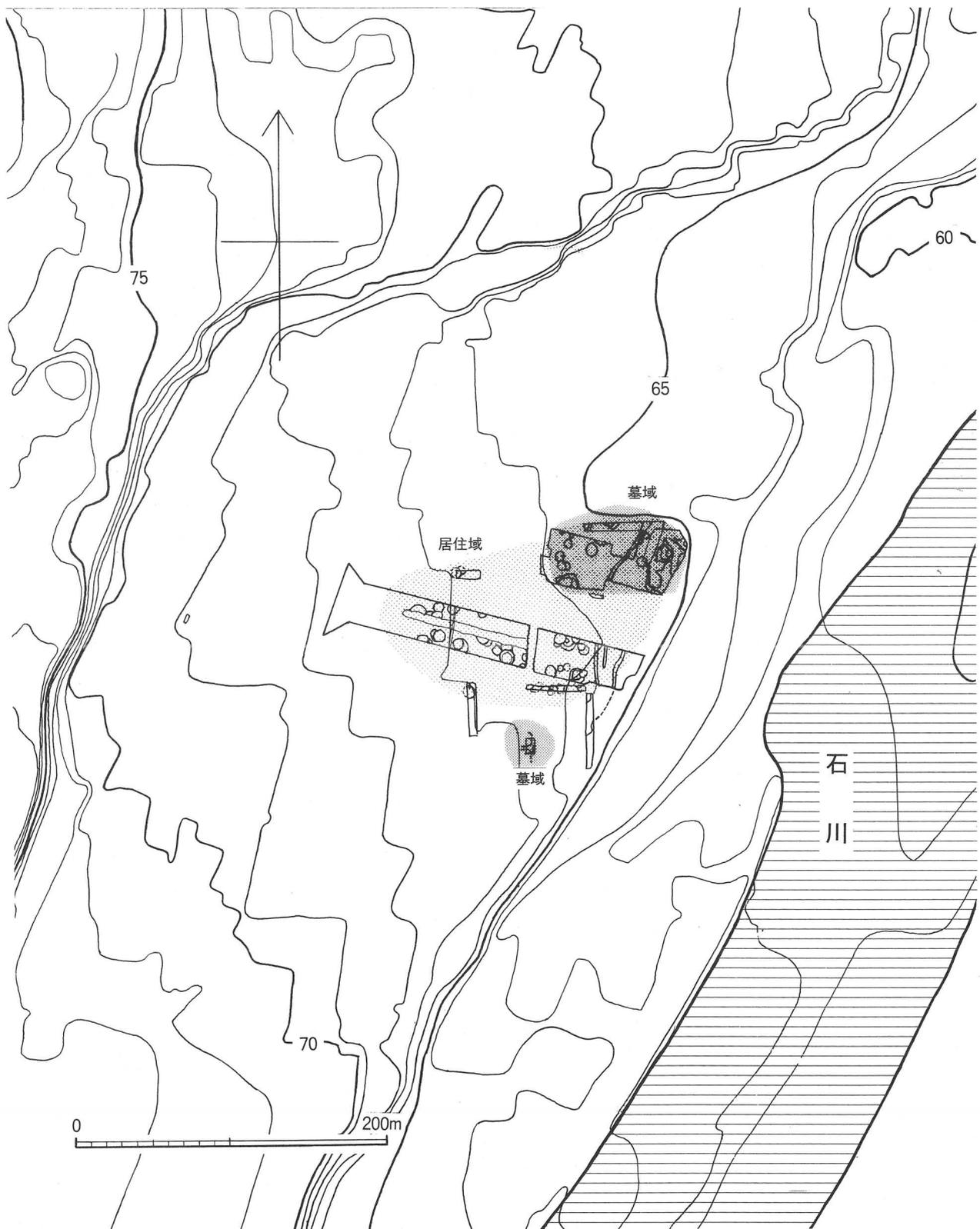


図26 甲田南遺跡周辺地形図と弥生集落概念図

が数棟増えるだけで、この時期の遺構が東側に多いという事実は変わらないであろう。さらに、この時期の遺構として注目すべきものに南北2箇所の墓域がある。これらのうち南側ではこの時期の方形周溝墓群が確認されているだけであるが、北側ではこの時期と次の第Ⅱ期のものが同じ区域に造営されている。これら2箇所に設けられた方形周溝墓のあり方がこの時期の居住域のあり方とど

う関連するのか興味深いところであるが、調査区12の住居跡密集区域のこの時期の住居跡が特定できない今、この問題に対して明確に答えることができない。ただ、この2箇所という墓域のあり方が、同時に居住域をも南北2つの別グループとして分けて考えなければならないのか、集落の中にただ単に2箇所墓域が存在しただけであるのか、それとも南側の墓域の2号方形周溝墓の敷石に特殊性を認め、集落内の階級差を明確にするため墓域を造り分けていたと考えるべきなのか、解釈の可能性を指摘するに留める。

第Ⅱ期の遺構として明確なものには斜線を掛けた。この時期はおそらくこの集落の人口が増え、繁栄し始めたと考えられる。なぜなら、住居跡がほぼ集落の全域で認められるばかりでなく、集落の西端で確認されている1棟の竪穴住居跡もこの時期に所属するからである。墓域は前の時期と同じく北東部で確認されている。また、この時期の住居跡のいくつかから、石包丁、土製円盤、石鏃などの特定の遺物が大量に出土していることも注目し得る(註6)。なお、集落東寄りに南北に流れる溝は第Ⅰ期から機能していたが、この時期で一旦埋まる。

第Ⅲ期の遺構として明確なものには細かい網点を掛けた。この時期はこの集落が居住域だけでなく、墓域も含めて西側に移動していることが指摘できる。この時期の墓域として確実なのは調査区6の西部に3棟の住居跡を壊して造営したものが1基あるが、この他に同じ調査区の北西部に3箇所、この時期の遺構が検出されている。これらは方形周溝墓として認定できるかもしれない。いずれにしてもこの時期の墓域が前段階の古い住居跡を壊して墓を造営している点は重要である。さらにこの時期の注目すべきこととして板状鉄斧が2点出土していることをあげることができる。

以上、集落内の各時期の居住域のあり方を見てきたが、次にこのような集落のあり方が弥生時代中期という歴史的枠組みのなかでどう評価できるか考えてみたい。

4. 集落の歴史的意義

甲田南遺跡の弥生時代の集落はすでに見てきたとおり、弥生時代前期から後期まで連綿と続く拠点集落ではなく、弥生時代の中期中頃にあらわれ、そして中期末には廃れてしまう、およそ150年間程しか続かない短期間の集落である。そして規模は、東西200m、南北150mの面積約22,000㎡の小規模な集落で、この範囲の中に竪穴住居がおよそ70棟存在する。しかし、このことはあくまでも約150年間の累積結果でしかなく、実際に同時存在していた住居の数は20棟前後で、今仮に1棟あたり5人として人口を見積もれば、約100人前後で構成された集落にすぎない。さらにすでに見てきたように、その範囲も時期によって若干、差異があり、現時点で指定した範囲は約150年間の最大範囲であり、実際にはさらに小さな範囲としてとらえる必要がある。これらのことを考慮に入れて集落の全体像をとらえなければならない。

さて、このような小規模集落であるにも関わらず、出土遺物を見ると、第Ⅰ期から生駒西麓産の胎土をもつ中河内地域の土器をはじめとして、和泉地域、大和地域、紀伊地域との交流を示唆する土器、石器、および製作技術が確実にこの集落に入っている。具体的には和泉地域から日明山型をはじめとして、末端扇形紋の施された壺の他、たこ壺なども搬入されている。大和地域からはいわゆる大和型の甕が搬入されている。紀伊地域からは胎土に結晶片岩を含む甕の搬入と削り技法の採用、さらに石包丁の石材に紀の川流域の結晶片岩が用いられていることなどがあげられる。また、第Ⅲ期には摂津地域との交流をも裏付ける資料として、複帯構成の櫛描紋の施された壺が存在して

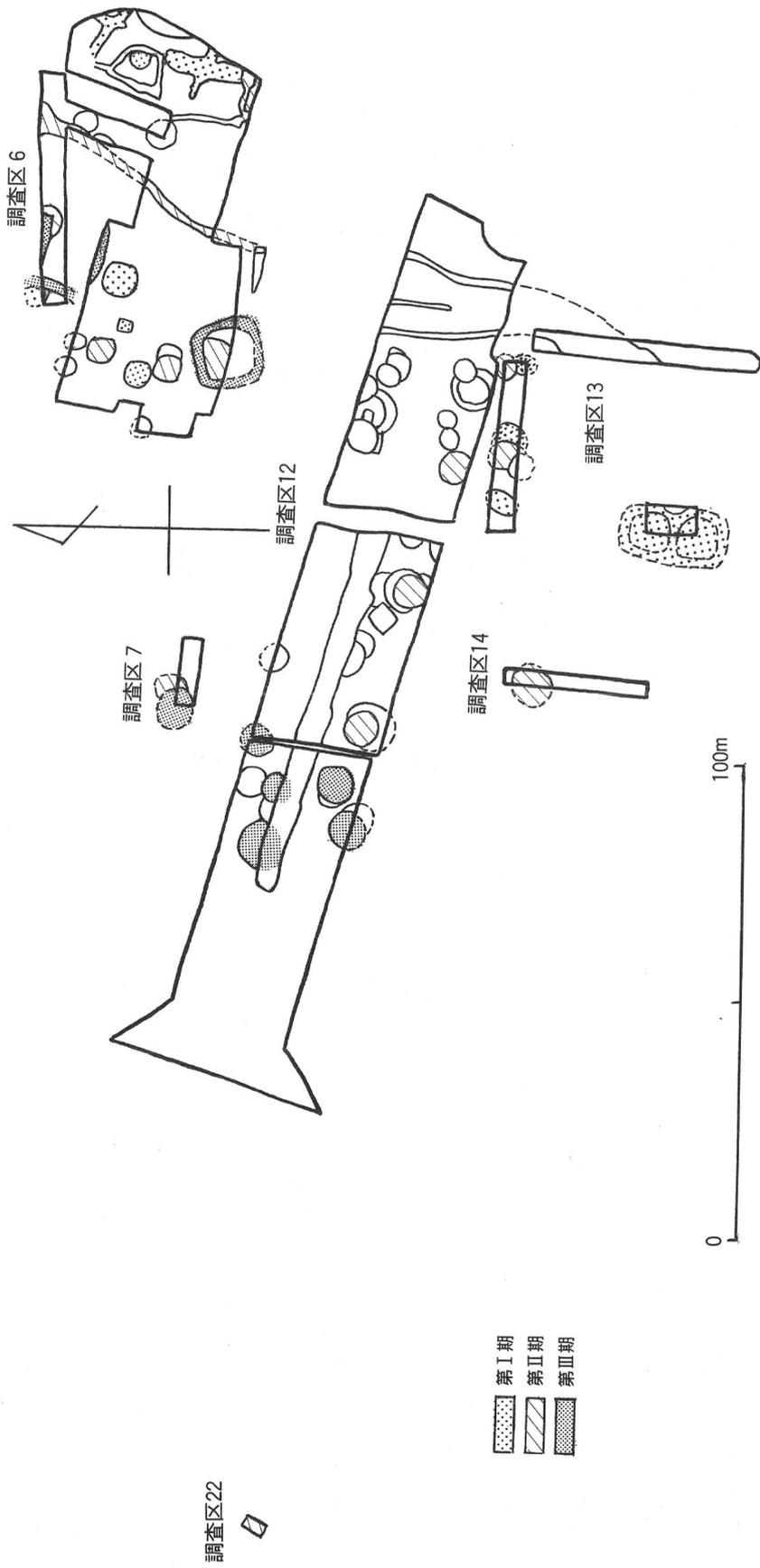


図27 甲田南遺跡弥生集落の居住域変遷図

いることは重要である。これらのことは酒井龍一氏によってすでに指摘されているように(註7)甲田南遺跡も物資の交換を通じての物流ネットワークの中に組み込まれていたことを示しているが、ただ、甲田南遺跡に認められるこれらの土器を見ると、生駒西麓産の胎土をもつ土器の多さは従来から指摘されているとおりであるが、紀伊地域の影響を受けたと考えられる甕の外面調整のヘラ削り技法の使用頻度が喜志遺跡や中野遺跡に比べると高く、より紀伊地域に近いという立地を改めて思い起こさせる。このことから考えると、従来指摘されてきたように石川流域の物資の移動ルートが国府遺跡から喜志遺跡を通して一元的に入ってくるだけではなく、さらに言い換えれば、石川の上流域でこの移動ルートが行き止まりになるのではなく、甲田南遺跡から水越峠を越えて大和地域の鴨都波遺跡あたりと往来するルートや、河内長野などを經由して和泉地域や紀伊地域と往来するルートを想定する必要もあろう。

それではこの甲田南遺跡がこのネットワークの形成の中で果たした役割とは何か？同じような立地条件で、ほぼ同じ時期に存在した石川の中位段丘上の城山遺跡、喜志遺跡、中野遺跡などが石器製作を生産基盤にしていた集落として、交換物資が明確であるのに対し、甲田南遺跡の場合、石器の出土量が前3者の遺跡に比べるときわめて少なく、これらの集落とは生産基盤が違うということ指摘できるにすぎない。ただ、大量に出土する土製円盤を含む紡錘車の存在から、それらに関わる専門集団の想定もなされているが、今のところそれを積極的に裏付ける証拠はない。(註8)しかし、これらの集落とほぼ同じような盛衰をたどる甲田南遺跡が生産基盤が違うとはいえ、弥生時代の物資流通ネットワークの中で機能していたことは確実であるから、何らかの役割を担っていたことは推測できる。

さて、以上のように、弥生社会の流通システムの構成集落として十分評価を与えることができることは想定できたが、しかし、甲田南遺跡の弥生集落が従来考えられていたような大規模集落でもなく、小規模集落にすぎないことも確認できた。そして弥生時代中期という時期幅の中でそれほど大きな変貌を見せるわけでもなく、居住域をわずかに移動させるだけに終わっていることも確認できた。そんな中で甲田南遺跡の第Ⅲ期の住居跡から板状鉄斧が2点検出されていることを考える時、このことをどう評価するか、すなわち、この2点の鉄器の存在から、先進的なムラとしての評価をあたえるか、小規模集落にも関わらず鉄器を確保できるほど鉄器の普及を考えるかは議論の分かれるところであろう。

甲田南遺跡の弥生集落は繰り返し述べてきたとおり、決して弥生時代中期の物資交流のネットワークの構成集落であっても、中心になるような集落ではない。もちろん、この時期の畿内弥生社会が階級差のない等質的な集落で構成されていたことは指摘されているが、(註9)ただ、この甲田南遺跡の第Ⅲ期とした弥生時代中期末という時期は集落内部に階級分化の起こりはじめる時期であることも確かである。例えば大阪市の加美遺跡などでみられる大規模な方形周溝墓、兵庫県川西市の加茂遺跡で発見された方形区画、和泉市の池上・曾根遺跡の大型掘立建物などの特殊な遺構、そして権力を象徴するような青銅製の威信財の存在から集落内部に階級分化が現れ始めていると指摘されていることがそれである。(註10)しかし、今のところそのことが集落間の格差にどうつながっていったのかは推測の域をでていない。そんな中、この2点の鉄斧が出土した住居跡がこの時期の甲田南遺跡の住居跡としては大きいほうではあることを根拠に、集落内部の階級格差を指摘する事も可能ではあるが、そのこと以外はことさら注目するような特殊な遺構が存在するわけでもない。い

ずれにしても甲田南遺跡は拠点集落でもなく、弥生社会の中で傑出する集落でもないことは明確である。

以上のことをあわせ考えると、2点の鉄器の存在からこの集落の先進性、および階級差を考えることにはいささか問題があるだろう。それよりもこの何の変哲もない石川上流域の小規模集落であるにも関わらず、2点鉄斧を保有していることを重視し、この時期の弥生社会がかなり鉄器化していることを想定すべきであろう。さらに付け加えるなら、この鉄斧の出土した住居跡の南東隣の同時期の住居跡から、打製石剣が1点出土しているが、この石器の製作痕に鉄製のパンチが使用されていたことが想定されている。(註11) 今、この石器がこの甲田南遺跡で製作されたかどうかは別として、この時期の石器製作にも鉄器を使うほど鉄器が一般化していることを重視したい。

そして、甲田南遺跡の弥生時代集落は小規模集落であったにも関わらず、鉄斧を手に入れることができ、中期社会の流通システムの役割を担っていた集落ではあるが、第V様式を待たず集落は廃絶してしまう。この現象は甲田南遺跡だけでなく、石川流域の他の集落を含め、畿内の他地域の多くの集落にもあてはまる。この第IV様式期におこった畿内各地の集落の再編成については様々な要因が考えられているが、(註12) 今ここでこの問題に対して答えを持ち合わせていない。ただ、甲田南遺跡を含め、城山遺跡、喜志遺跡、中野遺跡などの石川流域の弥生集落は弥生時代前期末にできた集落間の流通システムがある程度発展した段階になって、石器製作など、何らかの役割を担った集落として発生したことが推測できることから、その流通システムがさらなる鉄器化をはじめとして、何らかの原因で崩壊したとき、集落も衰滅してしまったと考えておきたい。

(註)

1. 小林義孝(1994)、「甲田南遺跡の弥生時代—中間的な総括のために—」、『甲田南遺跡発掘調査概要』,大阪府教育委員会,9~38頁.
2. 富田林市教育委員会(1988)、『甲田南遺跡現地説明会資料』
3. すでに小林氏が前掲書1でこの地域を耕作域としてとらえているが、筆者もそれに従う。
4. 尾上実(1981)、『甲田南遺跡発掘調査概要・I』,大阪府教育委員会.
5. 今村道雄(1982)、『甲田南遺跡発掘調査概要報告書—富田林市南甲田、若葉町所在—』,大阪府教育委員会.
6. 調査区12のこの時期の住居址の中から、100点以上の土製円盤をはじめとして打製石鏃、石包丁など、特定の遺物がまとまって各住居から検出されていることが報告されている。(註1 前掲書)
7. 酒井龍一(1984)「弥生時代中期・畿内社会の構造とセトルメントシステム」、『文化財学報』,第3集,奈良大学文学部文化財学科刊,37~51頁.
酒井龍一(1987)「大阪・石川流域における弥生セトルメントシステム—集落遺跡の線形分布の一例—」、『考古学ジャーナル』,283号,29~31頁.
8. もし、糸や網などの原料になる植物の花粉が多量に検出されるというような特殊な状況が遺跡周辺環境の環境復元でなされるとか、期待薄ではあるが、紡織機や網など糸を使う道具などの遺物が多量に検出されれば、そういう専門集団の可能性を改めて考えてもよいだろう。
9. 酒井龍一(1991)「弥生社会のしくみはどうなっていたのか」、『争点 日本の歴史1』,原始編,新人物往来社,240~254頁.
このなかで、畿内弥生時代の社会構成のあり方を「北九州のような階層構造はとらず、基本的には同規模、同機能の拠点を基本要素として構成される」として評価している。
10. 榎垣田佳男(1993)「鉄器は弥生時代をどう変えたか」、『新視点 日本の歴史 第5巻』,原始編,新人物往来社,218~223頁
11. 栗田薫(1995)「打製石剣の製作技法」、『弥生文化博物館研究報告』,第4集,弥生文化博物館.
12. 松木武彦(1995)「弥生時代の戦争と日本列島社会の発展過程」、『考古学研究』,第42巻,第3号,考古学研究会,33~47頁

番号	挿入番号	図版番号	トレンチ名	遺構名	層位	土器の種類	器種名	口径(㎝)	器高(㎝)	底径(㎝)	裾部径	調整(内面)	調整(外面)	紋様	色調	砂粒割合	備考
1	8		第1トレンチ	建物1		土師器	皿	13.0	3.3			横なで	口縁部：横なで、体部：なで、指頭圧痕		橙色	5%	
2	9		第1トレンチ	方形周溝墓周溝	第2層	弥生土器	壺A	22.2	2.1			横なで	口縁部：横なで、頸部：斜方向の刷毛目	口縁部：刻み目	橙色	10%	頸部が長いタイプになる可能性が高い
3	9		第1トレンチ	方形周溝墓周溝	第1層	弥生土器	壺A	28.4	3.5			剥離と磨滅のため不明	剥離と磨滅のため不明	口縁部：篋状紋(原体不明)・刻み目	にぶい黄橙色	30%	篋状紋の残りは極めて悪い
4	9	6	第1トレンチ	方形周溝墓周溝	第2層	弥生土器	壺A	25.1	29.8			磨滅のため不明	磨滅のため不明	口縁部：篋状紋(原体不明)・刻み目、頸部～肩部：直線紋8条(8本/1.5cm)	褐色	20%	生駒西麓産
5	9	6	第1トレンチ	方形周溝墓周溝	第1層	弥生土器	壺の体部		10.9			なで・指頭圧痕	なで	直線紋+末端扇形紋(10本/1.3cm)・直線紋	にぶい橙色	10%	和泉産(日明山型壺)
6	9		第1トレンチ	方形周溝墓周溝	第1層	弥生土器	壺A	14.7	3.7			磨滅のため不明	磨滅のため不明	口縁部：篋状紋(8本/0.9cm)	にぶい褐色	20%	生駒西麓産、篋状紋のストロークは約5mm
7	9		第1トレンチ	方形周溝墓周溝	第1層	弥生土器	壺A	18.0	2.3			磨滅のため不明	磨滅のため不明	口縁部：篋状紋(原体不明)	赤褐色	30%	生駒西麓産、篋状紋のストロークは約6～7mm
8	9	6	第1トレンチ	方形周溝墓周溝	第1層	弥生土器	壺B	17.6	13.1			口縁部：なで、頸部：なで・指頭圧痕	口縁部：なで、頸部：なで	口縁部：篋状紋(8本/1cm)・扇形紋・篋状紋・刻み目、頸部：直線紋3条・篋状紋(9本/1.5cm)	褐色	20%	生駒西麓産、篋状紋のストロークは約5mm(口縁部・頸部とも)
9	9		第1トレンチ	方形周溝墓周溝	第2層	弥生土器	壺の頸部		11.1			なで・指頭圧痕	なで	直線紋3条(7本/1.6cm)	にぶい橙色	10%	頸部が長いタイプ
10	9		第1トレンチ	方形周溝墓周溝	第1層	弥生土器	鉢B	16.6	3.9			口縁部：横なで、体部：横方向のヘラミガキ	磨滅のため不明	口縁部：列点紋(10本/1.3cm)、体部：篋状紋(9本/1.2cm)	明褐色	20%	生駒西麓産
11	9	6	第1トレンチ	方形周溝墓周溝	第2層	弥生土器	無頭壺	18.8	6.5			剥離と磨滅のため不明	剥離と磨滅のため不明	口縁部：記号紋(↑)	にぶい黄橙色	20%	2次調整を受けている
12	9		第1トレンチ	方形周溝墓周溝	第2層	弥生土器	高杯B	20.0	2.8			磨滅のため不明	磨滅のため不明		淡橙色	20%	
13	9	6	第1トレンチ	方形周溝墓周溝	第1層	弥生土器	高杯A	13.7	17.6		8.5	磨滅のため不明	磨滅のため不明		褐色	20%	生駒西麓産
14	9	6	第1トレンチ	方形周溝墓周溝	第2層	弥生土器	底部		8.6	7.2		磨滅のため不明	ヘラミガキ		にぶい黄橙色	20%	
15	9		第1トレンチ	方形周溝墓周溝	第2層	弥生土器	底部		5.1	8.4		磨滅のため不明	磨滅のため不明、指頭圧痕		にぶい橙色	10%	
16	9		第1トレンチ	方形周溝墓周溝	第2層	弥生土器	底部		4.0	7.4		剥離と磨滅のため不明	体部：縦方向のヘラミガキ?、底面：磨滅のため不明		灰白色	10%	外面の一部に黒斑
17	9		第1トレンチ	方形周溝墓周溝	第1層	弥生土器	底部		2.4	6.0		剥離のため不明	体部：縦方向のヘラミガキ・指頭圧痕、底面：なで・指頭圧痕		明赤褐色	30%	
18	9		第1トレンチ	方形周溝墓周溝	第2層	弥生土器	底部		4.2	7.2		なで・指頭圧痕	体部：なで・指頭圧痕、底面：なで		浅黄褐色	20%	内外面の一部に黒斑
19	9		第1トレンチ	方形周溝墓周溝	第2層	弥生土器	底部		3.3	5.0		なで	なで		橙色	5%	外面の一部に黒斑
20	9		第1トレンチ	方形周溝墓周溝	第2層	弥生土器	壺の底部		3.9	5.2		剥離のため不明	体部：縦方向のヘラミガキ・指頭圧痕、底面：なで		橙色	20%	2次焼成を受けている、煤付着
21	9		第1トレンチ	方形周溝墓周溝	第2層	弥生土器	底部		3.0	5.2		磨滅のため不明	磨滅のため不明		赤褐色	30%	生駒西麓産
22	9		第1トレンチ	方形周溝墓周溝	第2層	弥生土器	底部		2.7	7.6		磨滅のため不明	体部：指頭圧痕・磨滅のため不明、底面：なで		赤灰色	20%	
23	9		第1トレンチ	方形周溝墓周溝	第1層	弥生土器	底部		4.3	6.0		剥離と磨滅のため不明	剥離と磨滅のため不明		にぶい黄橙色	10%	2次調整を受けている
24	9	6	第1トレンチ	方形周溝墓周溝	第2層	弥生土器	底部		5.3	5.4		剥離のため不明	磨滅のため不明		浅黄褐色	20%	
25	10		第2トレンチ	3号住居跡		弥生土器	壺A	20.1	3.8			磨滅のため不明	磨滅のため不明	口縁部：篋状紋(原体8本/cm)、刻み目	浅黄褐色	5%	
26	10		第2トレンチ	3号住居跡		弥生土器	壺A	17.3	11.1			口縁部：横なで、頸部・体部磨滅のため不明	口縁部：横なで、頸部・体部：縦方向の刷毛目		橙色	5%	
27	10		第2トレンチ	3号住居跡		弥生土器	高杯B	30.4	5.2			磨滅のため不明	口縁部：横なで、体部：縦方向のヘラミガキ		淡黄色	10%	
28	10		第2トレンチ	3号住居跡		弥生土器	壺	24.8	7.8			口縁部：横なで、体部：剥離のため不明	口縁部：横なで、体部：縦方向のヘラミガキ		にぶい黄橙色	5%	

表5 甲田南遺跡出土土器観察表

番号	挿入番号	図版番号	トレンチ名	遺構名	層位	土器の種類	器種名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	裾径	調整(内面)	調整(外面)	紋様	色調	砂塵配合	備考
29	10		第2トレンチ	3号住居跡		弥生土器	壺					なで	なで	直線紋2条(原体11本)	にぶい黄橙色	5%	和泉産(日明山型), 145と同一個体?
30	10		第2トレンチ	3号住居跡		弥生土器	壺					なで	なで	直線紋	にぶい黄橙色	5%	和泉産(日明山型), 144と同一個体?
31	10		第2トレンチ	3号住居跡		弥生土器	高杯脚柱部		4.9			磨滅のため不明, 紋目	磨滅のため不明	沈線4条	にぶい黄橙色	5%	
32	10		第2トレンチ	3号住居跡		弥生土器	甕	9.3	2.7			磨滅のため不明	口縁部:横なで, 体部:縦方向のヘラミガキ		にぶい橙色	10%	煤付着
33	10	6	第2トレンチ	3号住居跡		弥生土器	甕	32.6	27.0			ヘラミガキ	ヘラミガキ		褐色	20%	生駒西麓産, 煤付着
34	10		第2トレンチ	3号住居跡		弥生土器	甕	37.5	30.7			斜方向の刷毛目	ヘラミガキ		にぶい褐色	20%	生駒西麓産
35	10		第2トレンチ	3号住居跡		弥生土器	底部		1.6	5.0		磨滅のため不明	ヘラミガキ, 底面:なで		にぶい橙色	20%	黒斑
36	10		第2トレンチ	3号住居跡		弥生土器	底部		3.5	4.6		磨滅のため不明	縦方向のヘラミガキ, 底面:なで		明赤褐色	10%	
37	10		第2トレンチ	3号住居跡		弥生土器	底部		2.7	8.4		磨滅のため不明	磨滅のため不明		褐色	10%	生駒西麓産
38	10		第2トレンチ	3号住居跡		弥生土器	底部		3.5	6.8		磨滅のため不明	磨滅のため不明		淡黄色	10%	黒斑
39	11		第2トレンチ	4号住居跡		弥生土器	壺A	30.3	2.0			磨滅のため不明	磨滅のため不明	縞状紋(7本/7.5cm), 刻み目	黄褐色	20%	
40	11		第2トレンチ	4号住居跡		弥生土器	壺A	27.5	3.2			磨滅のため不明	磨滅のため不明		浅黄褐色	10%	
41	11		第2トレンチ	4号住居跡		弥生土器	壺A	17.3	2.7			磨滅のため不明	磨滅のため不明	縞状紋(原体不明)	明赤褐色	20%	生駒西麓産
42	11		第2トレンチ	4号住居跡		弥生土器	壺A	20.3	2.6			横方向の刷毛目	磨滅のため不明	波状紋(原体10本/cm), 刻み目	にぶい褐色	20%	
43	11		第2トレンチ	4号住居跡		弥生土器	壺A	18.9	1.2			磨滅のため不明	磨滅のため不明		灰白色	10%	
44	11		第2トレンチ	4号住居跡		弥生土器	壺B	20.7	3.7			磨滅のため不明	磨滅のため不明	縞状紋2条(原体7本/1.2cm)	にぶい黄橙色	20%	
45	11		第2トレンチ	4号住居跡		弥生土器	底部		9.9			刷毛目	ヘラミガキ		にぶい黄橙色	20%	
46	11		第2トレンチ	4号住居跡		弥生土器	細頸壺	7.7	4.9			磨滅のため不明	横なで	波状紋2条(原体7本/1.3cm), 直線紋	橙色	5%	
47	11		第2トレンチ	4号住居跡		弥生土器	無形壺	16.0	5.9			磨滅と剥離のため不明	磨滅と剥離のため不明	直線紋(原体不明)	明黄褐色	10%	
48	11		第2トレンチ	4号住居跡		弥生土器	鉢A	17.6	8.4			斜方向の刷毛目	ヘラミガキ	刻み目	にぶい橙色	5%	
49	11		第2トレンチ	4号住居跡		弥生土器	高杯脚柱部		4.7			なで	縦方向のヘラミガキ		橙色	20%	
50	11		第2トレンチ	4号住居跡		弥生土器	底部		12.1	8.1		なで	磨滅のため不明		にぶい黄褐色	10%	
51	11		第2トレンチ	4号住居跡		弥生土器	甕	18.7	3.8			なで	口縁部:横なで, 体部:なで・縦方向のヘラミガキ		にぶい橙色	5%	口縁部外面に煤付着
52	11		第2トレンチ	4号住居跡		弥生土器	甕	20.0	2.0			磨滅のため不明	口縁部:横なで, 体部:磨滅のため不明		にぶい褐色	20%	生駒西麓産
53	11		第2トレンチ	4号住居跡		弥生土器	甕	15.2	3.2			磨滅のため不明	口縁部:横なで, 体部:縦方向のヘラミガキ		灰褐色	20%	頸部に煤付着
54	11		第2トレンチ	4号住居跡		弥生土器	甕	12.5	2.7			磨滅のため不明	磨滅のため不明		にぶい橙色	10%	
55	11		第2トレンチ	4号住居跡		弥生土器	甕	12.9	2.5			口縁部:横なで, 体部:なで	口縁部:横なで, 体部:磨滅のため不明		にぶい赤褐色	20%	生駒西麓産
56	11		第2トレンチ	4号住居跡		弥生土器	甕	14.7	2.4			口縁部:磨滅のため不明, 体部:横方向のヘラミガキ	磨滅のため不明		にぶい橙色	20%	
57	11		第2トレンチ	4号住居跡		弥生土器	甕	29.3	4.8			磨滅のため不明	口縁部:横なで, 体部:磨滅のため不明		明黄褐色	10%	
58	11		第2トレンチ	4号住居跡		弥生土器	甕	42.4	4.7			口縁部:横なで, 体部:なで	口縁部:横なで, 体部:なで		明褐色	10%	生駒西麓産
59	11		第2トレンチ	5号住居跡		弥生土器	甕	32.7	3.4			口縁部:横なで, 体部:磨滅のため不明	磨滅のため不明		淡黄色	20%	
60	11		第2トレンチ	5号住居跡		弥生土器	甕	40.2	5.5			磨滅のため不明	口縁部:横なで, 体部:刷毛目		にぶい橙色	10%	
61	11		第2トレンチ	6号住居跡		弥生土器	底部		4.7	8.1		磨滅のため不明	磨滅のため不明		明赤褐色	20%	生駒西麓産
62	12		第3トレンチ	溝1	第3層	弥生土器	壺B	11.0	20.0			口縁部・体部上半部:剥離のため不明・指頭圧痕, 体部下半部:刷毛目	口縁部:横なで, 体部上半部:刷毛目, 体部下半部:横方向のヘラミガキ	口縁部上端部:列点紋, 頸部:縞状紋・扇形紋, 体部:直線紋	淡黄色	10%	外面下位に煤付着
63	12		第3トレンチ	溝1	第3層	弥生土器	壺A	18.2	3.4			磨滅のため不明	磨滅のため不明		浅黄褐色	30%	
64	12		第3トレンチ	溝1	第1層	弥生土器	壺体部		17.3			剥離のため不明	磨滅のため不明	直線紋6条(7本/1.2cm)	浅黄褐色	10%	
65	12		第3トレンチ	溝1		須恵器	蓋杯蓋	13.0	4.8			回転なで	口縁部:回転なで, 天井部:回転ヘラケズリ		灰白色	5%	ロク口は石まわり
66	12		第3トレンチ	溝1	第2層	須恵器	蓋杯蓋		3.6			回転なで・回転なでの後, 不定方向のなで	口縁部:回転なで, 天井部:回転ヘラケズリ		灰白色	5%	ロク口は石まわり
67	12		第3トレンチ	溝1	第3層	須恵器	蓋杯蓋		3.1			回転なで・回転なでの後, 一定方向のなで	回転なで・回転ヘラケズリ・天井部:ヘラ切り		灰白色	5%	ロク口は石まわり

表5 甲田南遺跡出土土器観察表

番号	採掘番号	図版番号	トレンチ名	遺構名	層位	土器の種類	器種名	口径(㎝)	器高(㎝)	底径(㎝)	裾部径	調整(内面)	調整(外面)	紋様	色調	砂礫割合	備考
68	12		第3トレンチ	溝1	第2層	須恵器	蓋杯身		2.8			回転などで、回転な での後、一定方向 のなで	回転などで・回転ヘ ラケズリ		明青灰色	5%	ロクロは右まわり
69	12		第3トレンチ	溝1	第3層	須恵器	蓋杯身		2.4			回転などで、底面中 央は同心円弧紋を すり消し	回転などで・回転ヘ ラケズリ		灰白色	5%	ロクロは右まわり
70	12		第3トレンチ	溝1	第3層	須恵器	台付き 壺		3.2			回転などで	回転などで・回転ヘ ラケズリ		明青灰色	5%	ロクロは右まわり
71	12		第3トレンチ	溝1	第3層	土師器	甕	21.6	4.4			口縁部：横なで、 体部：刷毛目	口縁部：横なで、 体部：刷毛目		にぶい橙色	5%	
72	12		第3トレンチ	溝1	第1層	土師器	杯	14.5	4.1			口縁部：横なで、 体部：なで	口縁部：横なで、 体部：なで		橙色	5%	
73	12		第3トレンチ	溝1	第3層	土師器	小皿	8.6	1.9			磨滅のため不明	磨滅のため不明		橙色	10%	黒班
74	12		第3トレンチ	溝1	第3層	土師器	小皿	10.4	1.8			磨滅のため不明	磨滅のため不明		褐色	5%	
75	12		第3トレンチ	溝1	第3層	土師器	椀	13.6	2.4			磨滅のため不明	磨滅のため不明		にぶい橙色	5%	
76	12		第3トレンチ	溝1	第3層	黒色土器	椀	13.9	4.5			口縁部：横なで、 体部：ヘラミガキ	口縁部：横なで、 体部：なで・指頭圧痕		褐色	5%	内黒
77	12		第3トレンチ	溝1	第1層	黒色土器	椀	15.3	3.9			口縁部：横なで、 体部：ヘラミガキ	口縁部：横なで、 体部：ヘラミガキ		黒褐色	5%	両黒
78	12	7	第3トレンチ	溝6		須恵器	蓋杯身	12.3	3.9			回転などで	回転などで		灰白色	5%	
79	12		第3トレンチ	溝6		須恵器	底部	8.3	2.9			回転などで	回転などで、底面： ヘラ切り		褐色	5%	
80	12		第3トレンチ	溝6		土師器	椀	14.1	3.3			磨滅のため不明	磨滅のため不明		にぶい褐色	10%	
81	12		第3トレンチ	pit53		黒色土器	椀	16.0	3.1			口縁部：横なで、 体部：磨滅のため 不明	口縁部：横なで、 体部：ヘラミガキ		黒色	5%	外黒
82	13		第2トレンチ	土壇5		弥生土器	壺B	20.1	4.1			口縁部：横なで、 頸部：なで	口縁部：横なで、 頸部：なで・指頭圧痕	口縁部：波状紋 (原体9本)	浅黄褐色	10%	
83	13		第2トレンチ	土壇5		弥生土器	鉢A	20.8	4.0			口縁部：横なで、 体部：なで	磨滅のため不明	口縁部：波状紋・刻目 目	灰褐色	5%	
84	13		第2トレンチ	土壇5		弥生土器	鉢B	36.2	5.1			口縁部：横なで、 体部：横方向のヘ ラミガキ	口縁部：横なで、 体部：磨滅のため 不明	口縁部：籐状紋(原 体9本/1.4cm) ・刺突紋、体部： 籐状紋(原体24本 /2.6cm)	褐色	20%	生駒西麓産
85	13		第2トレンチ	土壇5		弥生土器	鉢B	35.0	3.4			磨滅のため不明	磨滅のため不明	口縁部：凹線紋、 体部：波状紋	褐色	20%	
86	13		第2トレンチ	土壇5		弥生土器	高杯脚 柱部		5.4			なで	磨滅のため不明		明褐色	10%	
87	13		第2トレンチ	土壇5		弥生土器	甕	17.8	3.9			口縁部：横なで、 体部：なで	口縁部：横なで、 体部：磨滅のため 不明		浅黄褐色	10%	
88	13		第2トレンチ	土壇5		弥生土器	底部	1.8	4.8			なで	なで		赤灰色	30%	底部中央に円孔(直 径0.65cm)あり
89	13		第2トレンチ	土壇5		弥生土器	底部	5.1	8.0			刷毛目、底面：な で	ヘラミガキ、底面 ：なで		褐色	20%	
90	13		第2トレンチ	土壇8		弥生土器	壺A	23.0	1.9			磨滅のため不明	磨滅のため不明	口縁部：籐状紋 (原体8本/cm)	明褐色	5%	生駒西麓産
91	13		第2トレンチ	土壇8		弥生土器	壺A	15.4	1.9			横なで	磨滅のため不明	口縁部：籐状紋 (原体7本/cm)	赤褐色	20%	生駒西麓産
92	13		第2トレンチ	土壇8		弥生土器	短頸壺	9.7	2.5			口縁部：横なで、 頸部：磨滅のため 不明	磨滅のため不明	斜線紋、円形浮紋	明褐色	10%	
93	13		第2トレンチ	土壇8		弥生土器	高杯A	22.7	3.7			磨滅のため不明	磨滅のため不明		灰白色	10%	
94	13		第2トレンチ	土壇8		弥生土器	鉢B	26.0	5.3			磨滅のため不明	磨滅のため不明	体部：籐状紋2条 (9本1.1cm)、波状 紋	にぶい褐色	5%	
95	13		第2トレンチ	土壇8		弥生土器	無頸壺	14.6	2.5			磨滅のため不明	磨滅のため不明		淡黄褐色	5%	
96	13		第2トレンチ	土壇8		弥生土器	鉢B	19.0	3.5			磨滅のため不明	磨滅のため不明	口縁部：列点紋、 体部：籐状紋2条 (原体不明)	明褐色	10%	生駒西麓産
97	13		第2トレンチ	土壇8		弥生土器	鉢B	31.4	4.6			口縁部：横なで、 体部：なで・指頭圧痕	磨滅のため不明	口縁部：列点紋、 体部：籐状紋(原 体11本/1.6cm)	褐色	30%	
98	13		第2トレンチ	土壇8		弥生土器	裾部	1.7	12.0			磨滅のため不明	磨滅のため不明		褐色	10%	生駒西麓産
99	13		第2トレンチ	土壇8		弥生土器	台付鉢 の台部	3.4	9.4			磨滅のため不明	磨滅のため不明	裾部：凹線紋2条	褐色	10%	
100	13		第2トレンチ	土壇8		弥生土器	台付鉢 の台部	12.9	14.5			磨滅のため不明	磨滅のため不明	裾部：凹線紋3条	褐色	20%	2段に円孔が穿た れている
101	13		第2トレンチ	土壇8		弥生土器	甕	14.8	3.7			磨滅のため不明	磨滅のため不明		灰白色	30%	
102	13		第2トレンチ	土壇8		弥生土器	甕	18.3	2.3			口縁部：磨滅のた め不明、体部：横 方向のヘラミガキ	磨滅のため不明		灰褐色	10%	
103	13		第2トレンチ	土壇8		弥生土器	甕	22.7	2.1			口縁部：横なで、 体部：磨滅のため 不明	磨滅のため不明		赤色	20%	
104	13		第2トレンチ	土壇8		弥生土器	甕	21.5	2.5			磨滅のため不明	磨滅のため不明		にぶい赤色	20%	
105	13	6	第2トレンチ	土壇6		弥生土器	甕	10.8	8.7			磨滅のため不明	口縁部：磨滅のた め不明、体部：ヘ ラケズリ		にぶい黄褐色	20%	二次焼成をうけて いる
106	13		第2トレンチ	土壇8		弥生土器	底部	2.7	7.2			磨滅のため不明	縦方向のヘラミガ キ、底面：なで		赤褐色	30%	
107	14		第4トレンチ	pit54		黒色土器	椀	15.6	5.2			口縁部：横なで、 体部：ヘラミガキ	口縁部：横なで、 体部：ヘラミガキ		褐色	5%	内黒
108	14		第4トレンチ	pit54		黒色土器	椀	13.6	3.2			口縁部：横なで、 体部：ヘラミガキ	口縁部：横なで、 体部：なで		にぶい褐色	5%	内黒
109	14		第4トレンチ	pit54		黒色土器	椀	11.8	3.4			口縁部：横なで、 体部：ヘラミガキ	口縁部：横なで、 体部：磨滅のため不明		にぶい褐色	5%	内黒

表5 甲田南遺跡出土土器観察表

番号	挿入番号	図版番号	トレンチ名	遺構名	層位	土器の種類	器種名	口径(㎝)	器高(㎝)	底径(㎝)	裾径(㎝)	調整(内面)	調整(外面)	紋様	色調	砂塵割合	備考
110	14		第4トレンチ	pit54		黒色土器	椀		1.6	8.2		ヘラミガキ	高台：横なで、なで		浅黄褐色	5%	内黒
111	14		第4トレンチ	pit54		土師器	椀	15.5	2.6			横なで	横なで		にぶい褐色	5%	
112	14		第4トレンチ	pit54		土師器	杯A	12.0	2.8			口縁部：横なで、底部：なで	口縁部：横なで、底部：なで		褐色	5%	
113	14		第4トレンチ	pit54		土師器	杯A	13.7	2.7			口縁部：横なで、底部：なで	口縁部：横なで、底部：なで・指頭圧痕		褐色	5%	
114	14		第4トレンチ	pit54		土師器	杯A	12.2	3.0			磨滅のため不明	磨滅のため不明、指頭圧痕		にぶい褐色	5%	
115	14		第4トレンチ	pit54		土師器	杯A	11.4	2.3			口縁部：横なで、底部：磨滅のため不明	口縁部：横なで、底部：なで・指頭圧痕		にぶい褐色	5%	
116	14		第4トレンチ	pit54		土師器	杯A	10.9	3.2			口縁部：横なで、底部：なで	口縁部：横なで、底部：なで・指頭圧痕		褐色	5%	
117	14	7	第4トレンチ	pit54		土師器	杯B	10.9	3.1			口縁部：横なで、底部なで	口縁部：横なで、底部：なで		褐色	5%	
118	14		第4トレンチ	pit54		土師器	杯B	11.7	2.6			磨滅のため不明	口縁部：横なで、底部：なで・指頭圧痕		褐色	10%	
119	14	7	第4トレンチ	pit54		土師器	杯B	11.6	2.7			口縁部：横なで、底部：なで	口縁部：横なで、底部：なで		にぶい黄褐色	5%	
120	14		第4トレンチ	pit54		土師器	杯B	11.3	2.7			口縁部：横なで、底部：なで	口縁部：横なで、底部：なで・指頭圧痕		浅黄褐色	5%	
121	14		第4トレンチ	pit54		土師器	小皿	9.8	2.0			磨滅のため不明	磨滅のため不明・指頭圧痕		浅黄褐色	5%	
122	14		第4トレンチ	pit54		土師器	杯A	10.9	2.2			口縁部：横なで、底部：なで	口縁部：横なで、底部：なで		褐色	5%	
123	15		第2トレンチ		第7層	弥生土器	壺A	25.6	3.2			口縁部：横なで、頸部：刷毛目	口縁部：横なで、頸部：磨滅のため不明	口縁部：刻み目	黄褐色	10%	
124	15		第2トレンチ		第7層	弥生土器	壺A	23.2	1.5			磨滅のため不明	磨滅のため不明	口縁部：刻み目	灰色	30%	
125	15		第2トレンチ		第7層	弥生土器	壺B		2.9			磨滅のため不明	磨滅のため不明	籬状紋(原体不明)	浅褐色	20%	
126	15		第2トレンチ		第2層	弥生土器	壺A	24.5	3.2			磨滅のため不明	磨滅のため不明	口縁部：刻み目	褐色	20%	
127	15		第2トレンチ		第7層	弥生土器	壺A	27.3	5.3			剥離と磨滅のため不明	剥離と磨滅のため不明		にぶい黄褐色	10%	
128	15		第2トレンチ		第7層	弥生土器	壺A	20.0	3.8			磨滅のため不明	磨滅のため不明		浅黄褐色	5%	
129	15		第2トレンチ		第7層	弥生土器	壺A	16.9	6.1			剥離のため不明	剥離のため不明		浅黄褐色	20%	
130	15		第2トレンチ		第5層	弥生土器	壺B	20.7	3.8			磨滅のため不明	磨滅のため不明	籬状紋2条(原体8本/1.4cm)	灰褐色	20%	
131	15		第2トレンチ		第7層	弥生土器	壺B	35.7	4.9			磨滅のため不明	磨滅のため不明	列点紋(16本/1.7cm)、籬状紋	にぶい黄褐色	20%	
132	15		第2トレンチ		第7層	弥生土器	高杯A	20.9	3.7			磨滅のため不明	磨滅のため不明		褐色	20%	
133	15		第2トレンチ		第7層	弥生土器	高杯A	17.4	3.9			口縁部：横なで、体部：なで	不明	口縁部：刻み目、口縁部：籬状紋(原体8本/1.3cm)、扇形紋、籬状紋、扇形紋	灰褐色	5%	
134	15		第2トレンチ		第7層	弥生土器	無頸壺柱部	18.9	7.8			磨滅のため不明	磨滅のため不明	波状紋2条、直線紋	浅黄褐色	20%	
135	15		第2トレンチ		第7層	弥生土器	高杯脚柱部		5.1			なで、指頭圧痕	なで		灰褐色	20%	
136	15		第2トレンチ		第7層	弥生土器	裾部		1.5	8.2		磨滅のため不明	磨滅のため不明		にぶい褐色	5%	裾部に円孔が穿たれている
137	15		第2トレンチ		第7層	弥生土器	器台		3.7	25.6		磨滅のため不明	磨滅のため不明	裾部：凹線紋2条	にぶい黄褐色	10%	
138	15		第2トレンチ		第5層	弥生土器	甕	32.9	7.8			口縁部：横なで、体部：なで	口縁部：横なで、体部：なで		にぶい褐色	10%	生駒西麓産
139	15		第2トレンチ		第7層	弥生土器	甕	22.8	4.4			磨滅のため不明	磨滅のため不明		にぶい褐色	10%	
140	15		第2トレンチ		第7層	弥生土器	甕	31.4	7.3			横なで	口縁部：横なで、体部：刷毛目		明黄褐色	10%	
141	15		第2トレンチ		第7層	弥生土器	甕	28.1	5.7			磨滅のため不明	口縁部：横なで、体部：刷毛目・ヘラミガキ		浅黄褐色	20%	
142	15		第2トレンチ		第7層	弥生土器	甕	28.2	6.6			口縁部：横なで、体部：磨滅のため不明	口縁部：横なで、体部：刷毛目		明褐色	10%	
143	15		第2トレンチ		第7層	弥生土器	甕	10.7	2.8			磨滅のため不明	口縁部：横なで、体部：磨滅のため不明	口縁部：刻み目	褐色	20%	
144	15		第2トレンチ		第7層	弥生土器	甕	12.5	5.5			口縁部：横なで、体部：なで	口縁部：横なで、体部：磨滅のため不明		にぶい赤褐色	20%	
145	15		第2トレンチ		第5層	弥生土器	甕	14.7	3.7			磨滅のため不明	磨滅のため不明		にぶい褐色	20%	生駒西麓産
146	15		第2トレンチ		第7層	弥生土器	甕	17.6	3.5			剥離と磨滅のため不明	剥離と磨滅のため不明		浅黄褐色	5%	
147	15		第2トレンチ		第7層	弥生土器	甕	18.4	4.9			磨滅のため不明	磨滅のため不明		灰白色	5%	
148	15		第2トレンチ		第5層	弥生土器	甕	18.1	3.3			口縁部：横なで、体部：横方向のヘラミガキ	口縁部：横なで、体部：縦方向のヘラミガキ		にぶい褐色	20%	生駒西麓産
149	15		第2トレンチ		第7層	弥生土器	甕	21.0	3.8			剥離のため不明	口縁部：横なで、体部：剥離のため不明		にぶい褐色	5%	
150	16		第2トレンチ		第7層	弥生土器	底部		3.5	5.2		磨滅のため不明	磨滅のため不明		浅黄褐色	10%	
151	16		第2トレンチ		第7層	弥生土器	底部		5.3	5.1		磨滅のため不明	磨滅のため不明		褐色	20%	
152	16		第2トレンチ		第7層	弥生土器	底部		3.6	8.5		磨滅のため不明	磨滅のため不明		にぶい褐色	20%	生駒西麓産
153	16		第2トレンチ		第7層	弥生土器	底部		4.6	8.5		磨滅のため不明	磨滅のため不明、底面：なで		浅黄褐色	20%	
154	16		第2トレンチ		第7層	土師器	小皿	9.9	2.0			磨滅のため不明	口縁部：横なで、底部磨滅のため不明		にぶい黄褐色	5%	
155	16		第2トレンチ		第7層	弥生土器	底部		3.9	6.6		刷毛目	縦方向のヘラミガキ、底面：ヘラケズリ		にぶい黄褐色	10%	
156	16		第2トレンチ		第7層	弥生土器	底部		2.8	6.6		剥離のため不明	磨滅のため不明		灰白色	10%	
157	16		第2トレンチ		第7層	弥生土器	底部		3.6	6.7		なで	横方向のヘラミガキ		にぶい褐色	10%	生駒西麓産

表5 甲田南遺跡出土土器観察表

番号	挿入番号	図版番号	トレンチ名	遺構名	層位	土器の種類	器種名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	裾部径	調整(内面)	調整(外面)	紋様	色調	砂礫割合	備考
158	16		第2トレンチ		第7層	弥生土器	底部		2.8	6.5		刷毛目	磨滅のため不明		浅黄褐色	5%	
159	16		第2トレンチ		第7層	弥生土器	底部		4.5	5.3		磨滅のため不明	磨滅のため不明、 底面：なで		褐色	20%	生駒西麓産
160	16		第2トレンチ		第7層	弥生土器	底部		4.4	8.6		磨滅のため不明	磨滅のため不明、 指頭圧痕		灰白色	30%	
161	16		第2トレンチ		第7層	弥生土器	底部		4.3	6.5		なで	磨滅のため不明、 底面：なで		赤褐色	10%	生駒西麓産
162	16		第2トレンチ		第7層	弥生土器	底部		3.3	4.8		剥離のため不明	剥離のため不明、 底面：ヘラミガキ		暗赤褐色	10%	
163	16		第2トレンチ		第7層	弥生土器	底部		3.9	6.8		磨滅のため不明	縦方向のヘラミガキ、 底面：なで		明赤褐色	20%	生駒西麓産
164	16		第2トレンチ		第7層	弥生土器	底部		4.1	6.6		磨滅のため不明	磨滅のため不明、 底面：なで、指頭圧痕		橙色	20%	
165	16		第2トレンチ		第7層	弥生土器	底部		1.9	6.4		刷毛目	磨滅のため不明		にぶい褐色	10%	生駒西麓産
166	16		第2トレンチ		第7層	須恵器	蓋杯蓋	13.8	3.0			回転なで	口縁部：回転なで、 天井部：回転ヘラ ケズリ		灰色	5%	ロクロは右回り
167	16		第2トレンチ		第7層	須恵器	練鉢	20.1	3.7			回転なで	回転なで		灰白色	5%	
168	16		第2トレンチ		第7層	土師器	小皿	9.4	1.7			磨滅のため不明	磨滅のため不明		褐色	5%	
170	16		第2トレンチ		第7層	黒色土器	碗		2.5		8.2	ヘラミガキ	横なで		灰白色	5%	
171	16		第2トレンチ		第7層	瓦	平瓦					布目(8本cm)	縄目		灰色		
172	17		第3トレンチ		第5層	弥生土器	壺A	9.0	2.4			横なで	横なで	口縁部：波状紋 (6本/0.7cm)	褐色	5%	生駒西麓産
173	17		第3トレンチ		第7層	弥生土器	甕	17.8	4.0			口縁部：横なで、 なで	口縁部：横なで、 なで		浅黄褐色	10%	
174	17		第3トレンチ		第7層	弥生土器	底部		2.8		9.2	磨滅のため不明	磨滅のため不明		褐色	30%	
175	17		第3トレンチ		第7層	弥生土器	底部		4.5	8.4		磨滅のため不明	磨滅のため不明		褐色	20%	生駒西麓産
176	17		第3トレンチ		第5層	須恵器	蓋杯蓋	11.4	2.7			口縁部：回転なで、 天井部：回転なで の後、不定方向の なで	口縁部：回転なで、 天井部：回転ヘラ ケズリ		灰色	5%	ヘラ記号
177	17		第3トレンチ		第5層	須恵器	蓋杯蓋		1.8			回転なで	自然釉のため不明		灰色	5%	
178	17		第3トレンチ		第7層	須恵器	蓋杯身	11.4	2.7			回転なで	回転なで		灰白色	5%	
179	17		第3トレンチ		第7層	須恵器	小型壺 の底部		2.6	5.7		回転なで	回転なで		灰白色	5%	自然釉付着
180	17		第3トレンチ		第7層	土師器	高杯裾 部		2.0		11.3	紋り目・指頭圧痕	なで		褐色	5%	
181	17		第3トレンチ		第7層	土師器	皿	17.5	2.3			横なで	口縁部：横なで、 なで		にぶい褐色	5%	
182	17		第3トレンチ		第7層	土師器	盤	19.5	3.3			口縁部：横なで、 体部：なで	口縁部：横なで、 体部：なで・指頭圧痕		にぶい褐色	10%	
183	17		第3トレンチ		第7層	土師器	高杯	25.6	2.0			磨滅のため不明	磨滅のため不明		にぶい褐色	10%	
184	17		第3トレンチ		第5層	須恵器	台付壺 の底部		3.2	9.6		回転なで	回転なで、高台部 底面：ヘラ切り		褐灰色	5%	
185	17		第3トレンチ		第7層	土師器	甕	7.9	3.4			磨滅のため不明	口縁部：横なで、 体部：なで、指頭圧痕		褐色	5%	
186	17		第3トレンチ		第5層	土師器	甕	18.2	6.7			口縁部：横なで、 体部：刷毛目の後、 なで	口縁部：横なで、 体部：刷毛目(原 体12本/2.3cm)		にぶい黄褐色	5%	
187	17		第3トレンチ		第7層	土師器	甕	33.4	3.8			口縁部：横なで、 体部：なで	口縁部：横なで		明褐色	5%	
188	17		第3トレンチ		第7層	土師器	三足土 器の脚 部		5.4			なで	なで		にぶい褐色	5%	
189	17		第3トレンチ		第7層	土師器	碗	14.3	3.2			磨滅のため不明	磨滅のため不明		褐色	5%	
190	17		第3トレンチ		第1層	土師器	碗	14.6	3.7			磨滅のため不明	磨滅のため不明		褐色	5%	
191	17		第3トレンチ		第7層	土師器	碗	14.4	4.4			口縁部：横なで、 体部：なで	口縁部：横なで、 体部：ヘラミガキ?		褐色	5%	
192	17		第3トレンチ		第5層	土師器	碗	16.4	4.4			口縁部：横なで、 体部：なで	口縁部：横なで、 体部：指頭圧痕		褐色	20%	
193	17		第3トレンチ		第7層	土師器	碗	15.0		2.7		磨滅のため不明	磨滅のため不明		明褐色	5%	
194	17		第3トレンチ		第5層	土師器	碗	15.2	2.8			口縁部：横なで、 体部：なで	口縁部：横なで、 体部：なで		褐色	5%	
195	17		第3トレンチ		第7層	土師器	碗	14.6	2.9			口縁部：横なで、 体部：なで	口縁部：横なで、 体部：なで		にぶい褐色	5%	
196	17		第3トレンチ		第7層	土師器	杯	14.1	2.4			磨滅のため不明	磨滅のため不明・ 指頭圧痕		明褐色	10%	
197	17		第3トレンチ		第5層	土師器	杯	14.4	2.3			口縁部：横なで、 底面：なで	口縁部：横なで、 底面：なで、指頭圧痕		にぶい褐色	10%	
198	17		第3トレンチ		第7層	土師器	杯	14.2	2.4			横なで	口縁部：横なで・ なで		にぶい褐色	5%	
199	17		第3トレンチ		第7層	土師器	杯	13.8	2.4			口縁部：横なで、 体部：なで	口縁部：横なで、 体部：なで・指頭圧痕		浅黄褐色	5%	
200	17		第3トレンチ		第7層	土師器	杯	13.7	2.3			口縁部：横なで、 底面：なで	口縁部：横なで、 底面：なで・指頭圧痕		にぶい褐色	5%	
201	17		第3トレンチ		第7層	土師器	杯	12.3	1.7			磨滅のため不明	磨滅のため不明・ 指頭圧痕		にぶい褐色	10%	
202	17		第3トレンチ		第7層	土師器	小皿	9.4	1.6			磨滅のため不明	磨滅のため不明・ 指頭圧痕		褐色	5%	
203	17		第3トレンチ		第7層	土師器	小皿	8.3	1.7			磨滅のため不明	磨滅のため不明		浅黄褐色	5%	
204	17		第3トレンチ		第7層	土師器	小皿	9.3	1.4			磨滅のため不明	磨滅のため不明		褐色	5%	外面に粘土板の継 ぎ目が残る
205	17		第3トレンチ		第7層	土師器	小皿	9.6	1.8			口縁部：横なで、 底面：なで	口縁部：横なで、 底面：なで・指頭圧痕		浅黄褐色	5%	
206	17	7	第3トレンチ		第5層	土師器	小皿	9.2	1.6			口縁部：横なで、 体部：なで・指頭圧痕	口縁部：横なで、 体部：なで・指頭圧痕		明褐色	5%	
207	17		第3トレンチ		第7層	土師器	小皿	9.0	1.5			口縁部：横なで、 体部：なで	口縁部：横なで、 体部：なで・指頭圧痕		にぶい褐色	5%	

表5 甲田南遺跡出土土器観察表

番号	挿入番号	図版番号	トレンチ名	遺構名	層位	土器の種類	器種名	口径(㎝)	器高(㎝)	底径(㎝)	根径	調整(内面)	調整(外面)	紋様	色調	砂礫割合	備考
208	17		第3トレンチ		第5層	土師器	小皿	10.2	1.2			口縁部：横なで、底部：磨滅のため不明	口縁部：横なで、底部：なで		にぶい橙色	20%	
209	17		第3トレンチ		第7層	土師器	小皿	9.4	0.8			磨滅のため不明	口縁部：横なで、底部：なで・指頭圧痕		淡橙色	5%	
210	17		第3トレンチ		第7層	土師器	小皿	8.6	1.7			磨滅のため不明	磨滅のため不明、底部：指頭圧痕		黄橙色	5%	
211	17		第3トレンチ		第7層	土師器	小皿	10.3	1.9			磨滅のため不明	磨滅のため不明		にぶい黄橙色	5%	
212	17		第3トレンチ		第7層	土師器	小皿	9.6	1.3			磨滅のため不明	磨滅のため不明		浅橙色	5%	
213	17		第3トレンチ		第7層	土師器	小皿	8.7	1.2			口縁部：横なで、底部：なで	口縁部：横なで、体部：なで・指頭圧痕		浅橙色	5%	
214	17	7	第3トレンチ		第7層	土師器	小皿		9.7	1.1		口縁部：横なで、底部：なで	口縁部：横なで、底部：なで、指頭圧痕		淡橙色	5%	
215	17		第3トレンチ		第7層	土師器	小皿	10.5	1.8			口縁部：横なで、底部：なで	口縁部：横なで、底部：なで・指頭圧痕		にぶい黄橙色	5%	
216	17	7	第3トレンチ		第5・7層	土師器	小皿	9.8	1.5			口縁部：横なで、体部：横なで・なで・指頭圧痕	口縁部：横なで、体部：なで・指頭圧痕		明黄褐色	5%	
217	17		第3トレンチ		第7層	土師器	小皿	9.2	1.9			口縁部：横なで、底部：なで・指頭圧痕	口縁部：横なで、体部：なで・指頭圧痕		にぶい橙色	5%	
218	17		第3トレンチ		第7層	土師器	杯	11.9	2.1			口縁部：横なで、体部：なで	口縁部：横なで、体部：未調整・指頭圧痕		にぶい橙色	5%	
219	17		第3トレンチ		第5層	土師器	小皿	11.3	1.1			口縁部：横なで、体部：なで	口縁部：横なで、体部：未調整・指頭圧痕		にぶい黄橙色	10%	
220	17	7	第3トレンチ		第5層	土師器	台付小皿	10.6	1.6			磨滅のため調整不明	磨滅のため調整不明		橙色	10%	
221	17		第3トレンチ		第7層	土師器	台付小皿	13.0	2.0			磨滅のため調整不明	磨滅のため調整不明		橙色	20%	
222	17		第3トレンチ		第5層	土師器	碗		1.0			磨滅のため不明	磨滅のため不明		にぶい黄橙色	5%	高台は断面四角形だが、極めて低い(高台高0.2cm)
223	17		第3トレンチ		第7層	土師器	碗		2.1			磨滅のため不明	磨滅のため不明		黄橙色	10%	
224	17		第3トレンチ		第7層	土師器	碗		1.5			磨滅のため不明	底部：なで、高台部：横なで		黄褐色	5%	
225	18		第3トレンチ		第7層	黒色土器	碗	14.8	4.1			口縁部：横なで、体部：なで・ヘラミガキ	口縁部：横なで、体部：ヘラミガキ		黒褐色	5%	内黒
226	18		第3トレンチ		第7層	黒色土器	碗	13.7	2.7			口縁部：横なで、体部：ヘラミガキ	磨滅のため不明		黒色	5%	両黒
227	18		第3トレンチ		第7層	黒色土器	碗	16.2	4.2			口縁部：横なで、体部：ヘラミガキ	口縁部：横なで、体部：磨滅のため不明		橙色	5%	内黒
228	18		第3トレンチ		第5層	黒色土器	碗	15.0	4.4			口縁部：横なで、体部：ヘラミガキ	口縁部：横なで、体部：ヘラミガキ		黒・橙色	5%	内黒
229	18		第3トレンチ		第7層	黒色土器	碗	15.2	4.8			ヘラミガキ	ヘラミガキ		灰褐色	5%	両黒
230	18		第3トレンチ		第7層	黒色土器	碗	13.6	5.4			口縁部：横なで、体部：ヘラミガキ	口縁部：横なで、体部：ヘラミガキ		黒褐色	5%	両黒
231	18		第3トレンチ		第7層	黒色土器	碗	15.4	4.9			口縁部：横なで、体部：なで・ヘラミガキ	口縁部：横なで、体部：ヘラミガキの後ヘラミガキ		黒色	5%	両黒
232	18		第3トレンチ		第7層	黒色土器	碗	15.9	2.7			口縁部：横なで、体部：ヘラミガキ	口縁部：横なで、体部：ヘラミガキ		黒色	5%	両黒
233	18		第3トレンチ		第7層	黒色土器	碗		1.4			ヘラミガキ	横なで		黄褐色	5%	
234	18		第3トレンチ		第7層	黒色土器	碗		2.1			磨滅のため不明	横なで		褐灰色	10%	内黒
235	18		第3トレンチ		第5層	黒色土器	碗		2.1			磨滅のため不明	高台部：横なで、底部：なで		黒褐色	10%	両黒
236	18		第3トレンチ		第7層	製塩土器	壺	9.0	3.0			磨滅のため不明	磨滅のため不明		浅黄褐色	30%	
237	18		第3トレンチ		第4層	瓦器	碗	14.5	2.7			ヘラミガキ	ヘラミガキ		灰色	5%	
238	18		第3トレンチ		第7層	瓦器	碗	14.5	2.5			磨滅のため不明	磨滅のため不明		黒色	5%	
239	18		第3トレンチ		第7層	黒色土器	碗		2.9			磨滅のため不明	磨滅のため不明		浅橙色	5%	両黒で炭素が剥離している
240	18		第3トレンチ		第7層	白磁	碗	13.1	3.0						灰白色		
241	18		第3トレンチ		第7層	緑釉陶器	台部		2.3			回転なで	回転なで		濃緑色	5%	

表5 甲田南遺跡出土土器観察表

Ⅱ 錦織南遺跡

1. 調査に至る経過 (図28)

錦織南遺跡は石川の左岸、近鉄河内長野線滝谷不動駅の南西に広がっている。その規模は南北630m、東西470mにおよぶ。過去の分布調査によって、弥生時代から中世に至る複合遺跡として知られていたが、1981年大阪府教育委員会が実施した調査で縄文時代晩期の河道跡が発見され、遺跡の時期がさらに溯ることが判明した。(註1) 以後、富田林市教育委員会と大阪府教育委員会で調査を行っているが、今までの調査では旧国道170号線の西側に奈良時代から中世の掘立柱建物、井戸

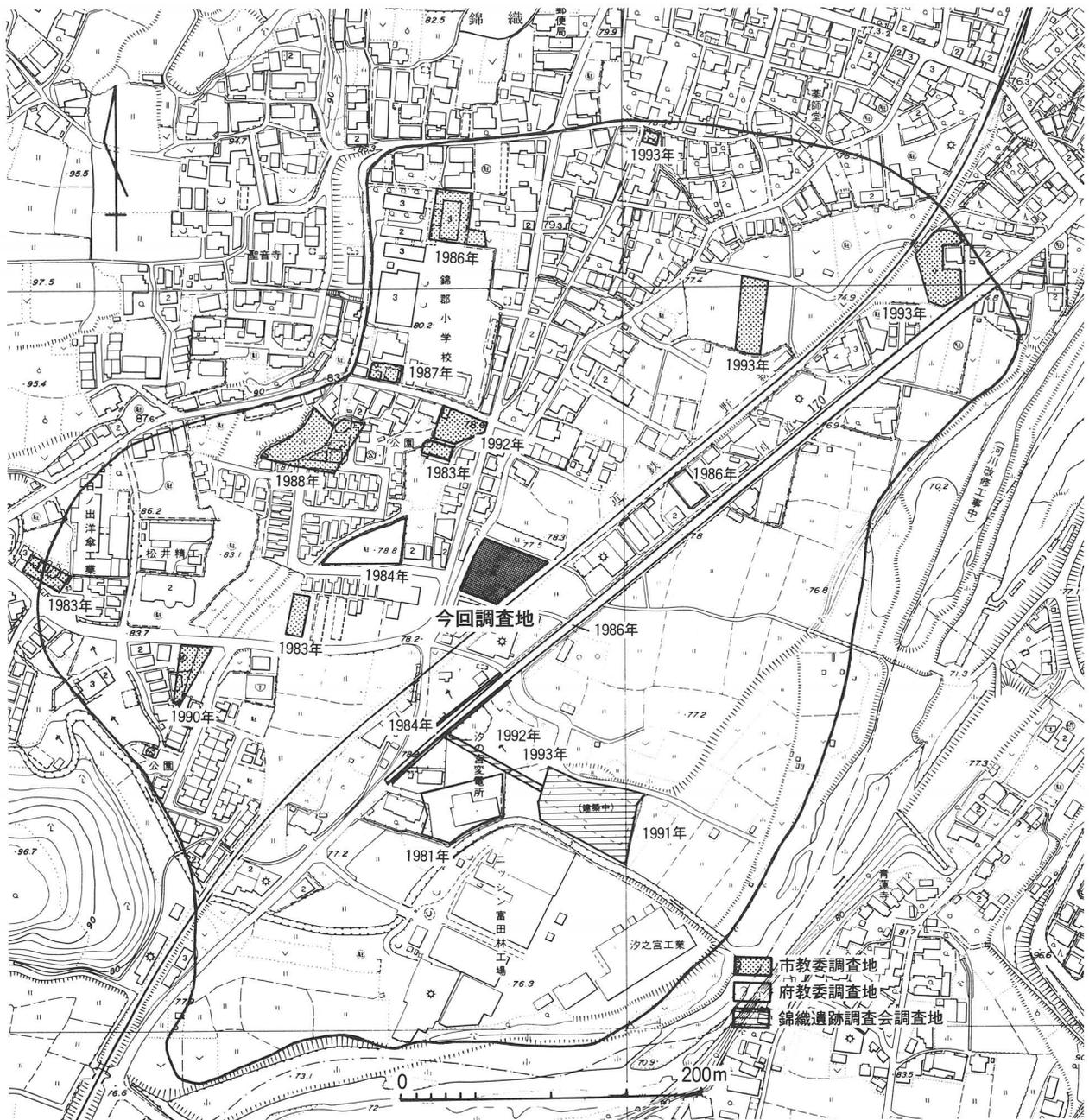


図28 錦織南遺跡発掘調査地位置図

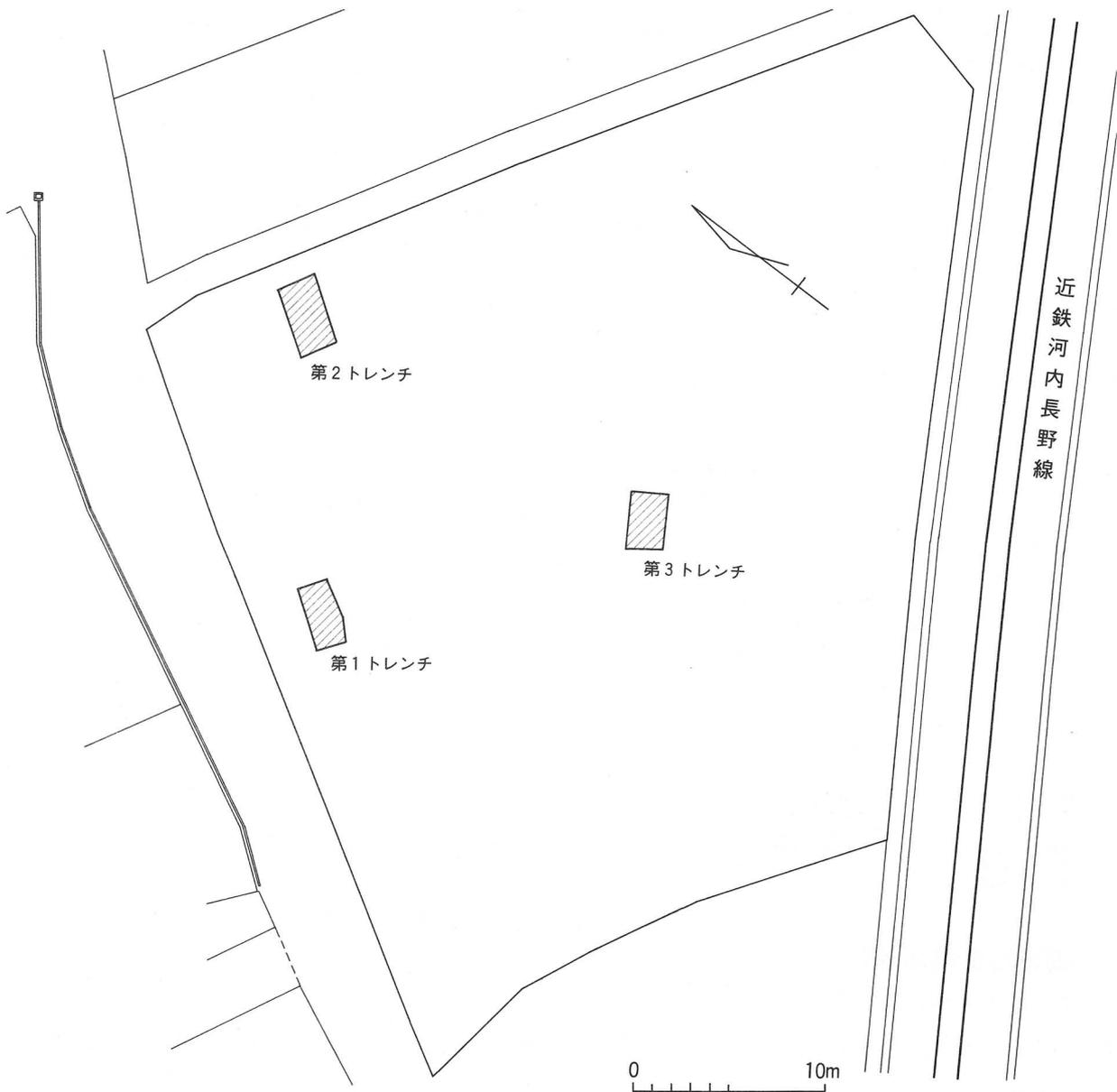


図29 錦織南遺跡調査区位置図

などの集落に関連する遺構が検出されているものの、東側では河道などが検出されているだけで、明確な遺構は確認されていない。(註2)

今回の調査は近鉄河内長野線滝谷不動駅から約500m南方の線路に西接した場所を共同住宅建設に先立つ発掘調査として実施した。

2. 調査の方法 (図29)

調査地は富田林市大字錦織160で、調査面積は19.4㎡である。

調査は浄化槽の施設部分だけ行うこととし、3本のトレンチを設定して行った。第1トレンチは調査区の中央西端部の2.0m×3.5mの規模で、第2トレンチは調査区の北西端部に2.0m×3.5mの規模で、第3トレンチは中央部に2.0m×3.5mの規模で設定した。

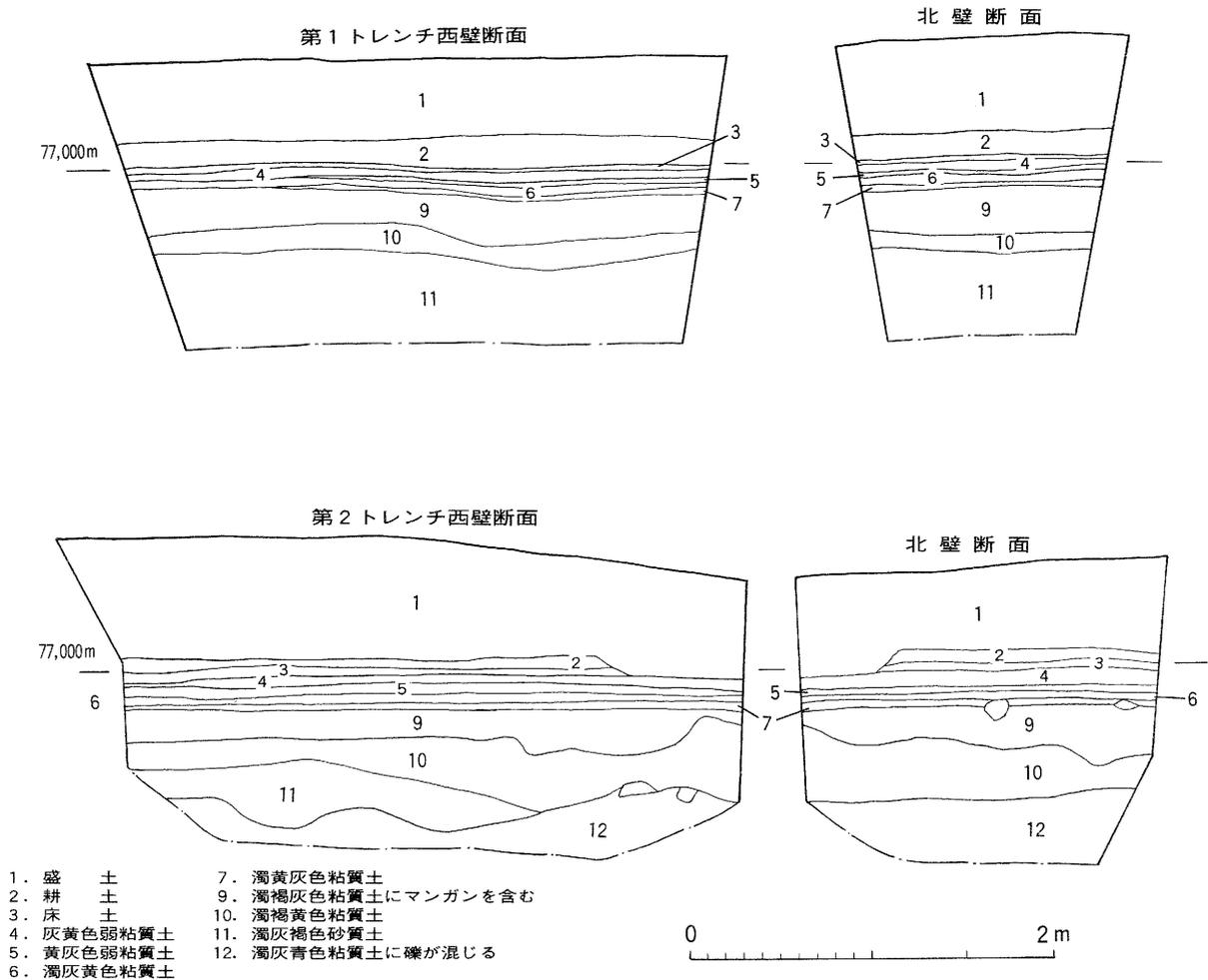


図30 第1・2トレンチ断面図

3. 調査区の基本層序 (図30. 31)

調査区の基本層序は第1トレンチと第2トレンチは同じで、上から順に盛土(1)、耕土(2)、床土(3)、旧耕土・灰黄色弱粘質土(4)、旧床土・黄灰色弱粘質土(5)、旧耕土・濁灰黄色粘質土(6)、旧床土・濁黄灰色粘質土(7)が堆積し、それらを取り除くと地山面に達する。第3トレンチは盛土(1)、耕土(2)、床土(3)、濁黄褐色粘質土(8)が堆積し、それらを取り除くと地山面に達する。

4. 遺構 (図31・図版12)

遺構は第1トレンチから第2トレンチにつづく溝を1本、第3トレンチで土壇1個とピットを4個を検出した。

溝1

地山面で検出した。第1トレンチと第2トレンチとも調査区全体が溝の中に入っているため、溝の規模は確認できなかった。また、深さも工事の関係上、上から1.7mの深さでとめたため、溝の底を検出することができなかった。溝の埋土は、第1層が濁褐灰色粘質土(厚さ14~25cm)、第2

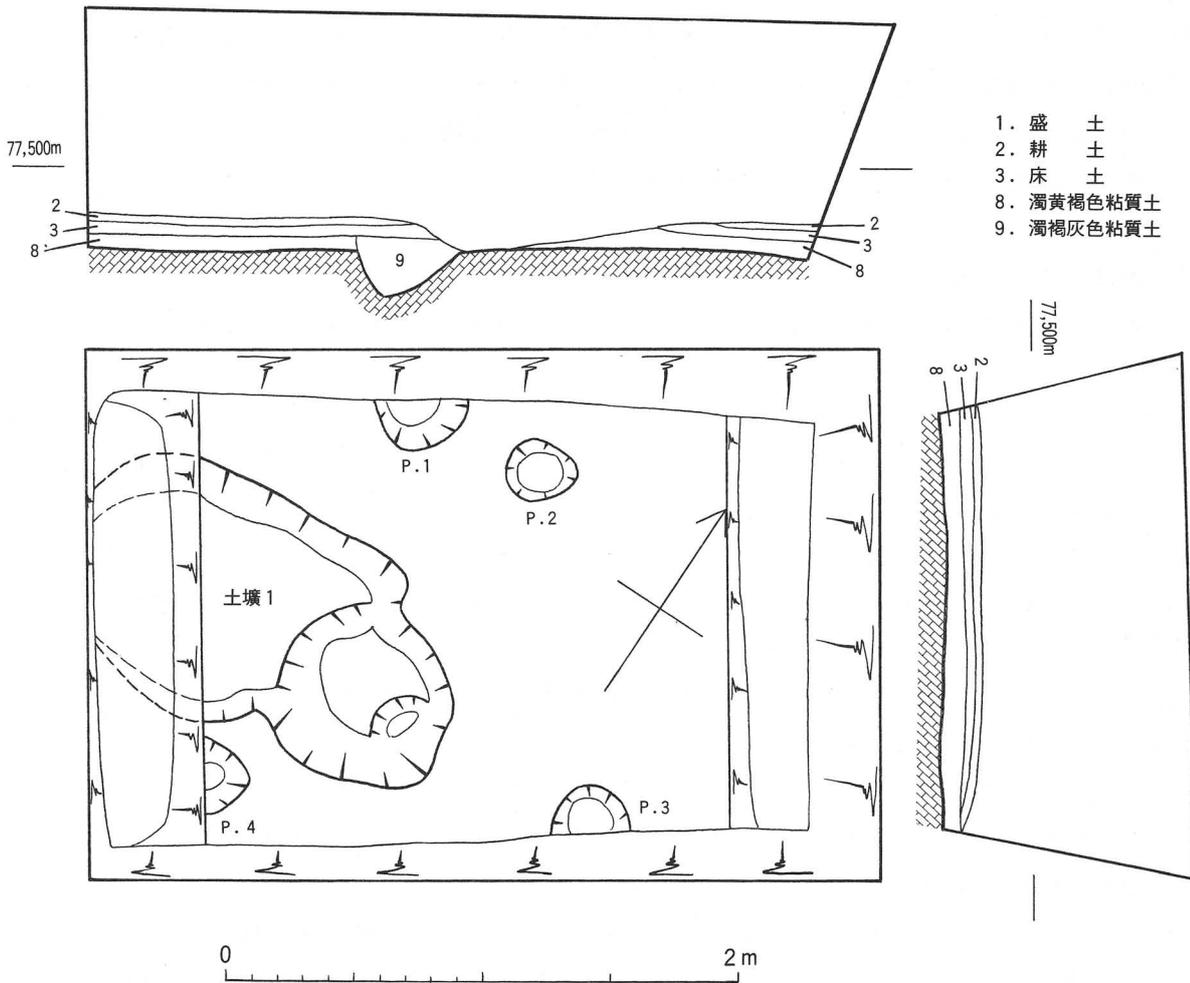


図31 第3トレンチ遺構平面図・断面図

層が濁褐黄色粘質土(厚さ12~40cm)、第3層が濁灰褐色砂質土(厚さ18~50cm)である。第4層については第2トレンチのみに見られ、礫まじりの濁灰青色粘質土が、10~30cmの厚さで堆積していた。

土壙・ピット

第3トレンチで検出した。土壙1、ピット1・4については、第3層目から切り込まれた遺構である。ピット2・3については地山面で検出した。詳細は表6の土壙・ピット一覧表を参照されたい。

遺構番号	平面形	規模(m)	深さ(m)	土色・土質	出土遺物
土壙1	不整形	(1.72)×1.06	0.23	濁褐灰色弱粘質土	土師器
P. 1	不整形	0.36×(0.2)	0.33	濁褐灰色弱粘質土	土師器
2	不整形	0.33×(0.19)	0.3	濁灰褐色弱粘質土	土師器
3	不整形	0.25×0.29	0.3	濁灰褐色弱粘質土	土師器・須恵器
4	不整形	0.32×(0.17)	0.08	濁褐灰色弱粘質土	

表6 錦織南遺跡土壙・ピット一覧表

5. 遺物

遺物の大半は溝1から出土しているが、その中でも第1トレンチから出土している方が多い。遺物には須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、陶器、瓦の他にサヌカイトの剥片が出土しているが、奈良時代の須恵器と土師器が圧倒的に多い。以下、遺構ごとに遺物を観察していく。

なお、個々の遺物の詳細は表7の土器観察表を参照されたい。

溝1出土遺物（図32・図版13）

大半が第1トレンチの上層から出土している。遺物には須恵器、土師器、瓦器、陶器、サヌカイト剥片が出土している。

須恵器には蓋坏、椀、広口壺がある。

坏蓋（1～3）にはかえりのつくタイプのもの（1）、かえりのないもの（2、3）があるが、前者もかえり消失直前のタイプである。

坏身（5）は立ち上がりのあるタイプと高台のつく、立ち上がりのないタイプ（5）がある。

椀（4）は猪口のような形態で1点出土している。底部外面に「安」という文字がきざまれている。

広口壺（6）は筒状の頸部に大きく外反する口縁部をもつ。口縁端部は上方につまみあげている。

土師器には坏、皿、椀、壺、甕、罍釜、高坏がある。

坏（7、12～17）には浅いタイプと深いものがある。坏はその大半に暗紋が認められないが、図示した以外の坏の中に暗紋の認められるものがある。2段に認められるが、上の方に細かい暗紋を、下には正放射状の暗紋が施されている。

皿（8～11）は様々な大きさのものが認められるが、その大半に暗紋が施されていない。ただ1例、おそらく皿になると考えられる破片の中に暗紋の認められるものがある。器壁が比較的厚いのでサイズの大きな皿と考えられるが、2段に放射状の暗紋が施されている。

椀（27）は高台がつく。

壺（23、28）はゆるやかに外傾して開く口頸部をもつ。

つまみ片（29）は天井部がわずかにくぼむものである。

甕（18～22、24～26、31）は体部に段のつくものとつかないものがある。

罍釜（32）は罍部が水平にめぐる。

高坏は図示できなかつたが脚柱部が、8角形のものである。

製塩土器（30）は細片も含めて10点出土している。

土壌1出土土器

土師器の細片が2点出土している。

ピット出土遺物

ピット1からは7～8世紀代に比定できる土師器の坏が2点と器種のわからない細片が2点出土している。

ピット2からは7～8世紀代に比定できる須恵器が1点と土師器の細片9点が出土している。

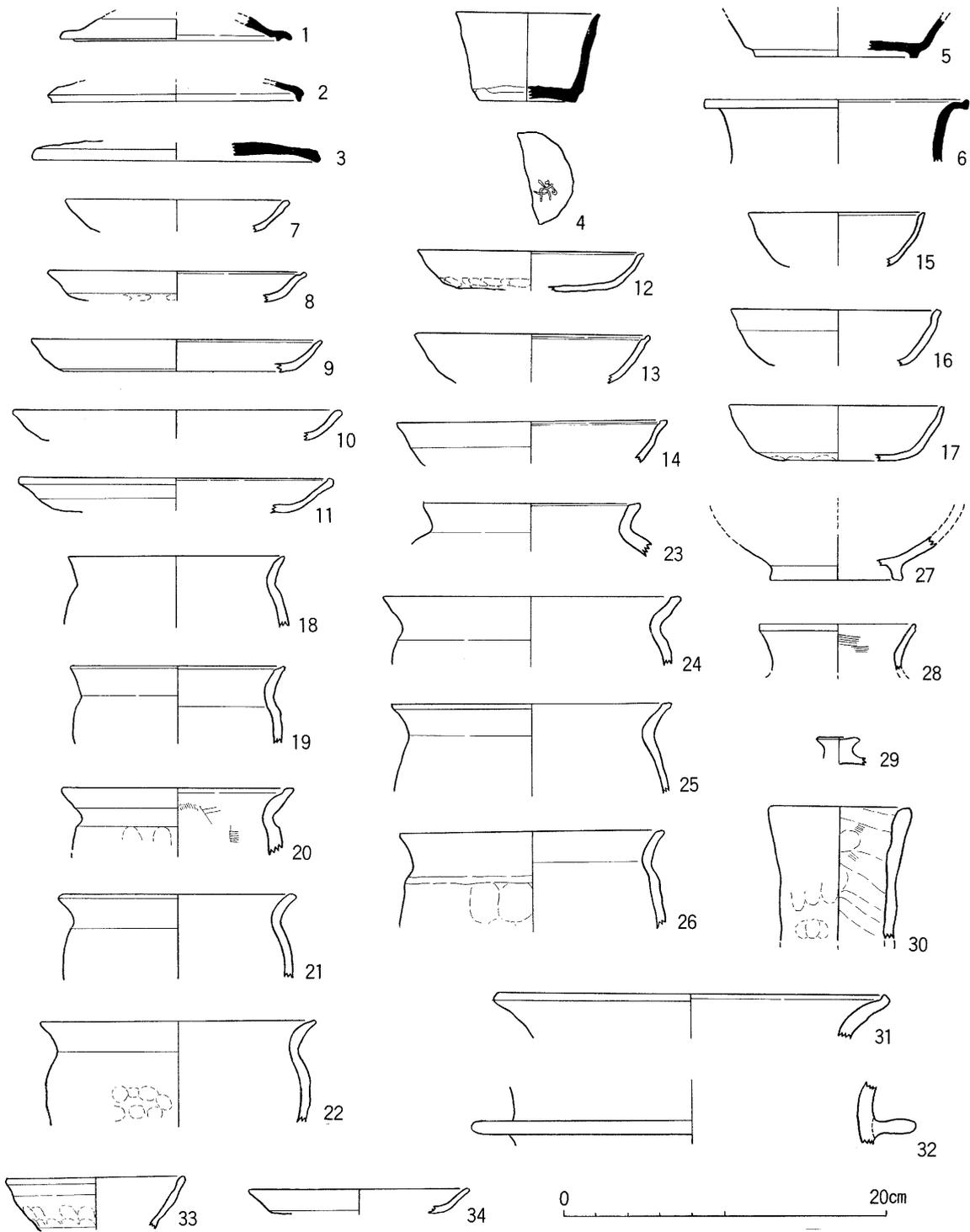


図32 出土土器

ピット3からは7～8世紀代に比定できる土師器の小片が7点出土している。

包含層出土土器 (図30)

第1トレンチの第6層目から土師器の皿(34)が出土しているが、この他、須恵器、黒色土器(内黒)が出土している。なお、(33)の坏は盛土中から出土したものである。

第2トレンチの第6層目から須恵器、土師器、黒色土器（内黒）の底部片が出土している。

6. まとめ

今回の調査では、第1トレンチと第2トレンチにかけて古墳時代の終わりから奈良時代にかけての時期に機能していたと考えられる自然河道が存在すること以外、遺構の詳しい性格を検討する資料が検出されなかった。そして、出土遺物はその中でも、8世紀後半から9世紀の初頭にかけての土師器が圧倒的に多いことを指摘できるにすぎない。しかし、1984年に大阪府教育委員会が行った、(註3) 今回の調査区の西側でも奈良時代の堀立柱建物と井戸が検出されていること、また、多量の製塩土器の検出など出土遺物の類似状況などを考えあわせると、西側に広がる集落がこの河道より東側に広がることは考えられず、この河道が集落の境界として機能していた可能性を考えることもできるだろう。

次に、「安」と記された須恵器についてであるが、この「安」という文字が何をあらわしていたか明らかではないが、もし錦部郡の氏族名の一部を記していたとすれば、以下の2名の人物の可能性が考えられる。2名の人物とも時期的に古いので問題が残るが、2番目の人物については今回調査の須恵器の時期に近い。ただそれだけで人物を特定する事はできないが、とりあえず、今回は記載文献をあげることにとどめ、今後の調査の進展に期待したい。

1. 『日本書紀』 雄略天皇七年是歲

(上略)、由是、天皇詔大伴大連室屋、命東漢直掬、以新漢陶高貴・鞍部堅貴・晝部因斯羅我・錦部定安那錦・譯語卯安那等、遷居干上桃原・下桃原・真神原三所。

2. 『続日本紀』 神龜元年二月壬子(724)

(上略) 從七位下大伴南淵麻呂。從八位下錦部安麻呂。无位烏安麻呂。外從七位上角山君内麻呂。外從八位下大伴直国持。外正八位上壬生直国依。外正八位下日下部使主荒態。外從七位上香取連五百嶋。外正八位下大生部三穗麻呂。外從八位上君子部立花。外正八位上史部麻呂。外從八位大伴直宮足等。獻私穀於陸奥国鎮所。並授外從五位下。

(註)

1. 山本彰(1981)『錦織南遺跡—縄文時代晩期河道の調査—』,大阪府教育委員会。
2. 中辻亘・田川友美・栗田薫(1993)『錦織南遺跡』,錦織南遺跡調査会。
中辻亘・栗田薫(1994)『錦織南遺跡Ⅱ』,錦織南遺跡調査会。
3. 館邦典(1985)「錦織南遺跡発掘調査概要」,『大阪府文化財調査概要』,大阪府教育委員会。

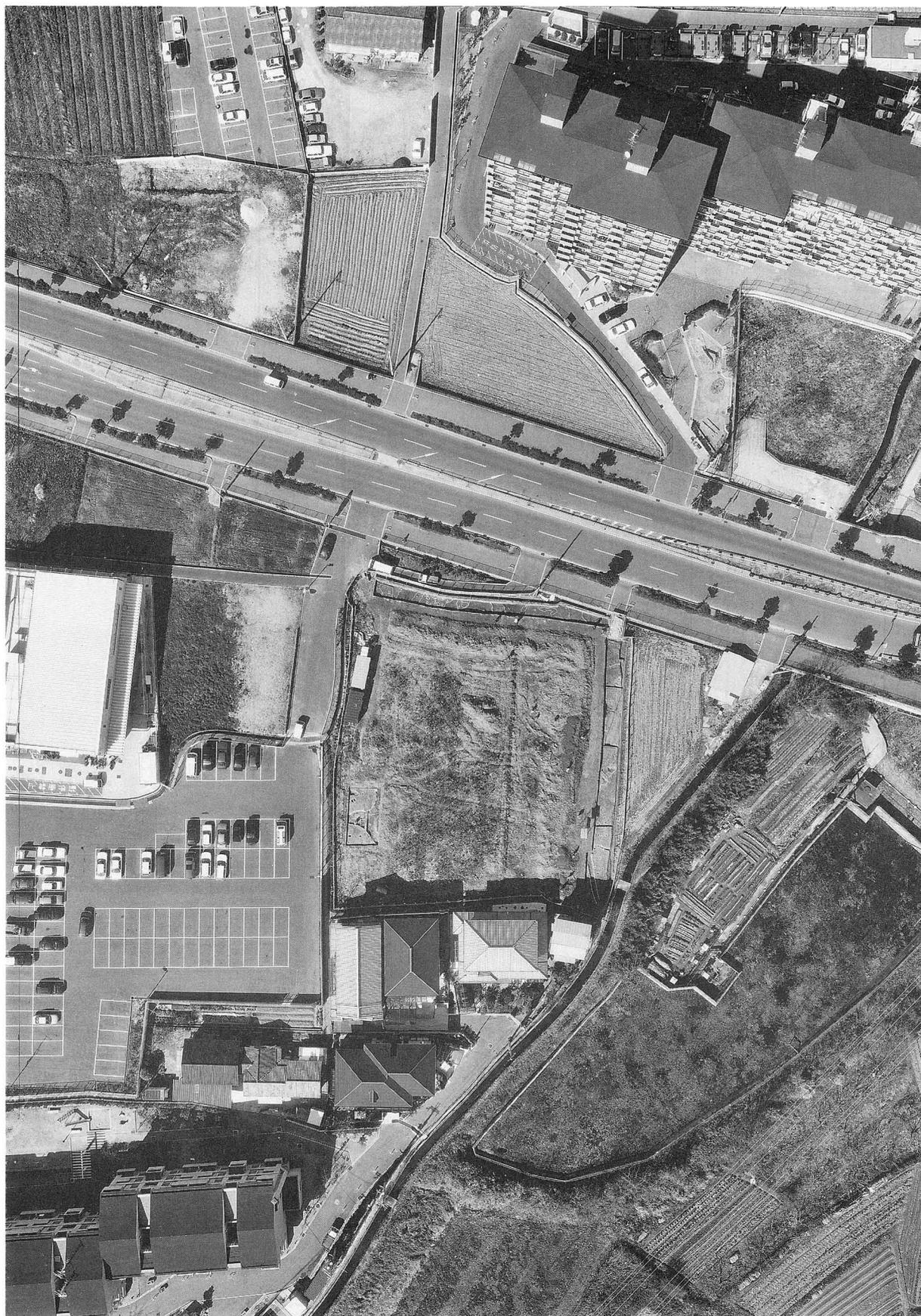
番号	図版番号	遺構名	層位	土器の種類	器種名	口径(㎝)	器高(㎝)	調(内面)	調(外面)	色調	砂礫割合	備考
1		溝1	第1層	須恵器	蓋杯蓋	14.4	1.6	口縁部：回転まで	口縁部：回転まで，天井部：回転ヘラケズリ	灰白色	5	
2		溝1	第1層	須恵器	蓋杯蓋	15.4	1.2	口縁部：回転まで	回転まで	灰色	5	
3		溝1	第1層	須恵器	蓋杯蓋	17.8	1.2	口縁部：回転まで，天井部：回転までの後不定方向のまで	口縁部：回転まで，天井部：回転ヘラケズリ	灰白色	5	ロクロは右回り
4	13	溝1	第1層	須恵器	椀	8.8	5.6	回転まで，底部：回転までの後，不定方向のまで	回転まで，底部：回転ヘラケズリ	灰白色	5	ロクロは左回り，底部外面に「安」という文字あり
5		溝1	第1層	須恵器	蓋杯身		2.5	回転まで，底部：回転までの後，不定方向のまで	回転まで	灰色	5	
6		溝1	第1層	須恵器	広口壺	16.2	4.0	回転まで	回転まで	灰白色	5	
7		溝1	第1層	土師器	杯	13.8	2.0	横まで	横まで，底部：まで	にぶい橙色	10	
8		溝1	第1層	土師器	皿	15.8	1.9	横まで	横まで，底部：まで	にぶい橙色	10	
9		溝1	第1層	土師器	皿	17.8	1.9	横まで	横まで，底部：まで	にぶい橙褐色	5	
10		溝1	第1層	土師器	皿	20.2	1.8	横まで	横まで，底部：まで	橙色	5	
11		溝1	第1層	土師器	皿	19.3	2.2	横まで	横まで，底部：まで	明褐灰白色	5	
12	13	溝1	第1層	土師器	杯	14.1	1.5	横まで	横まで，底部：まで・指頭圧痕	にぶい橙色	5	
13		溝1	第1層	土師器	杯	14.4	3.1	横まで	横まで，底部：まで	にぶい橙色	5	
14		溝1	第1層	土師器	杯	16.8	2.7	横まで	横まで	褐白色	10	
15		溝1	第1層	土師器	杯	10.9	3.4	磨滅のため調整不明	横まで，底部：まで	橙色	20	
16		溝1	第1層	土師器	杯	12.8	3.5	まで	横まで，底部：まで・指頭圧痕	にぶい橙色	5	
17	13	溝1	第1層	土師器	杯	13.3	3.5	横まで	横まで，底部：まで・指頭圧痕	浅黄橙色	5	
18		溝1	第1層	土師器	甕	13.4	4.4	口縁部：磨滅のため調整不明，体部：まで	磨滅のため調整不明	橙色	10	
19		溝1	第1層	土師器	甕	13.3	4.9	口縁部：横まで，体部：まで	口縁部：横まで，体部：磨滅のため調整不明	にぶい赤褐色	20	
20		溝1	第1層	土師器	甕	14.3	3.7	口縁部：まで，体部：刷毛目	口縁部：横まで，体部：まで・指頭圧痕	にぶい赤褐色	5	
21		溝1	第1層	土師器	甕	14.3	5.4	口縁部：横まで，体部：まで	口縁部：横まで，体部：まで	にぶい赤褐色	10	
22		溝1	第1層	土師器	甕	17.1	6.5	磨滅のため調整不明	口縁部：横まで，体部：まで・指頭圧痕	橙色	20	
23		溝1	第1層	土師器	壺	13.4	3.4	口縁部：横まで，体部：まで	口縁部：横まで，体部：まで	にぶい褐色	30	
24		溝1	第1層	土師器	甕	12.5	4.4	口縁部：横まで，体部：まで	口縁部：横まで，体部：磨滅のため不明	赤褐色		
25		溝1	第1層	土師器	甕	17.4	5.7	口縁部：横まで，体部：まで	口縁部：横まで，体部：まで・指頭圧痕	にぶい橙色	10	
26		溝1	第1層	土師器	甕	16.4	6.2	口縁部：横まで，体部：まで	口縁部：横まで，体部：まで・指頭圧痕	橙色	10	
27		溝1	第1層	土師器	椀		0.9	まで	まで，高台部：横まで	橙色	5	
28		溝1	第1層	土師器	壺	9.6	3.0	横まで	磨滅のため調整不明	浅黄橙色	5	
29		溝1	第1層	土師器	つまみ片		1.7	磨滅のため不明	磨滅のため不明	浅黄橙色	5	
30	13	溝1	第1層	製埴土器		8.2	8.3	まで・指頭圧痕	まで・指頭圧痕	浅黄橙色	10	
31		溝1	第1層	土師器	甕	24	2.8	横まで	横まで	にぶい褐色	10	
32		溝1	第1層	土師器	罍釜		3.6	まで	横まで	明赤褐色	30	生駒西麓産
33				土師器	杯	11	3.2	口縁部：横まで，体部：まで	口縁部：横まで，体部：まで・指頭圧痕	にぶい橙色	5	
34			第6層	土師器	皿	13.6	1.5	横まで	横まで，底部：まで・指頭圧痕	明赤褐色	5	

表7 錦織南遺跡出土土器観察表

報告書抄録

ふりがな	へいせい7ねんど とんだばやししないいせきぐんはくつちようさほうこくしよ							
書名	平成7年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書							
副書名	富田林市埋蔵文化財調査報告27							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著書名	栗田 薫・田川友美・今西 淳・平方扶左子							
編集機関	富田林市教育委員会							
所在地	大阪府富田林市常盤町1番1号 ☎0721-25-1000							
発行年月日	西暦 1996年3月							
ふりがな		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		(㎡)	
こうだみなみいせき 甲田南遺跡	おおさか ふとん だばやし 大阪府富田林市	27214		34°	135°	1995.2.13	313.9	店舗建設
	こうだ 甲田 58・61-1			29'	35'	~		
にしきおりみなみいせき 錦織南遺跡	おおさか ふとん だばやし 大阪府富田林市	27214		34°	135°	1995.7.25	19.4	共同住宅建設
	おおあざにしきおり 大字錦織 160			28'	35'	~		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
甲田南遺跡	集落遺跡	弥生時代 平安時代~ 鎌倉時代	竪穴住居址 方形周溝墓 土壙・ピット 溝・土壙 ピット	弥生土器・土製品 石器 土師器・須恵器・磁器 黒色土器・瓦器・瓦				
錦織南遺跡	その他	奈良時代	溝・土壙 ピット	土師器・須恵器 製塩土器				

版 图



甲田南遺跡 (K D S 94) 調査区全景 航空写真



K D S 94 第 1 トレンチ全景 南から



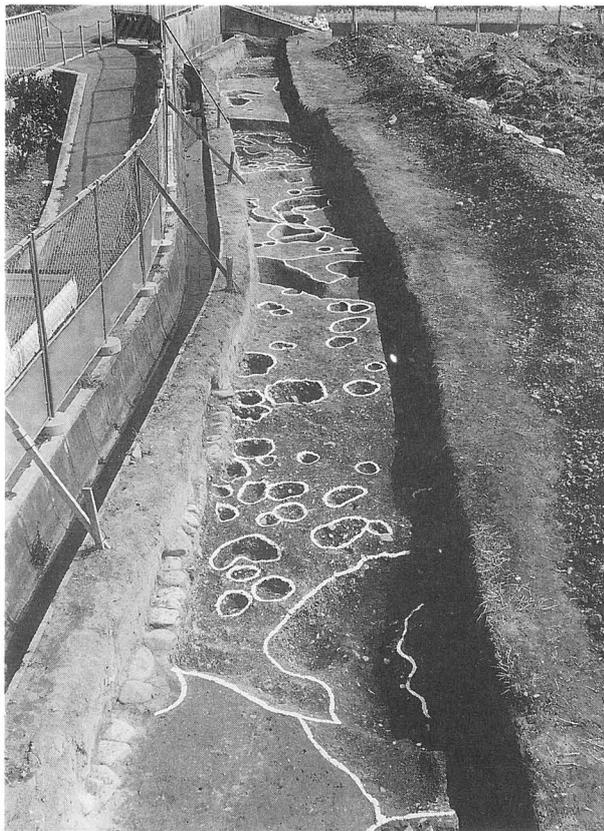
K D S 94 第 1 トレンチ方形周溝墓周溝全景 南東から



K D S94 第1トレンチ方形周溝墓周溝内遺物出土状況 東から



K D S94 第1トレンチ方形周溝墓周溝内遺物出土状況 北東から



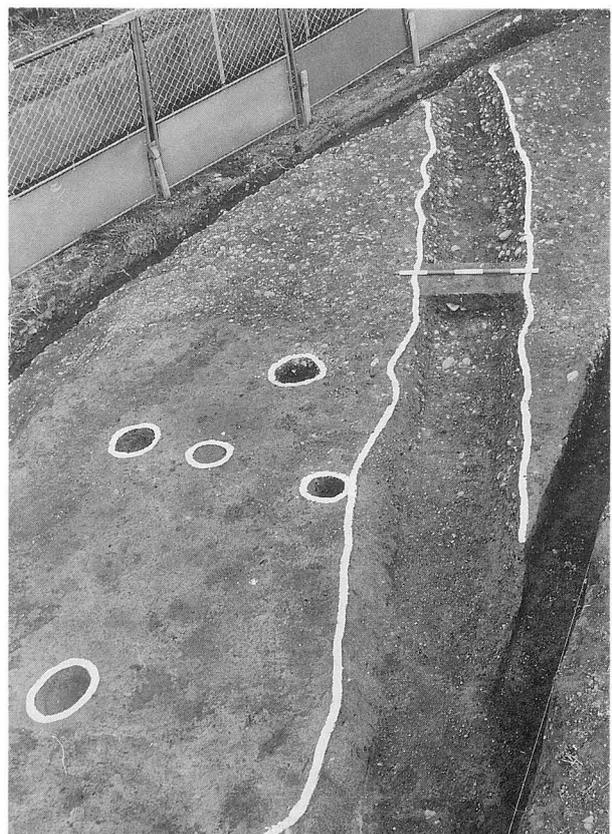
K D S94 第2トレンチ全景 西から



K D S94 第2トレンチ全景 東から



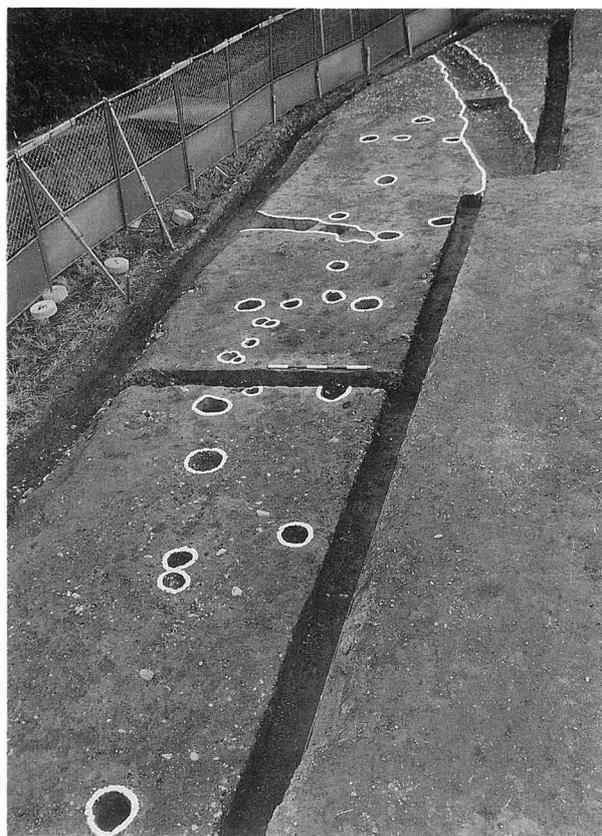
K D S94 第3トレンチ全景 北から



K D S94 第3トレンチ溝4全景 北から



K D S 94 第3トレンチ北半部近景 南から



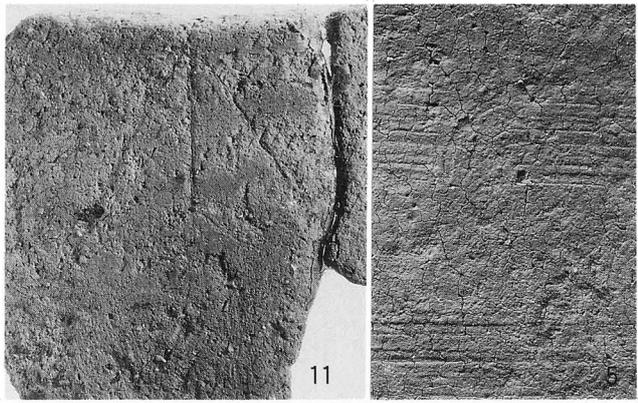
K D S 94 第3トレンチ南半部近景 北から

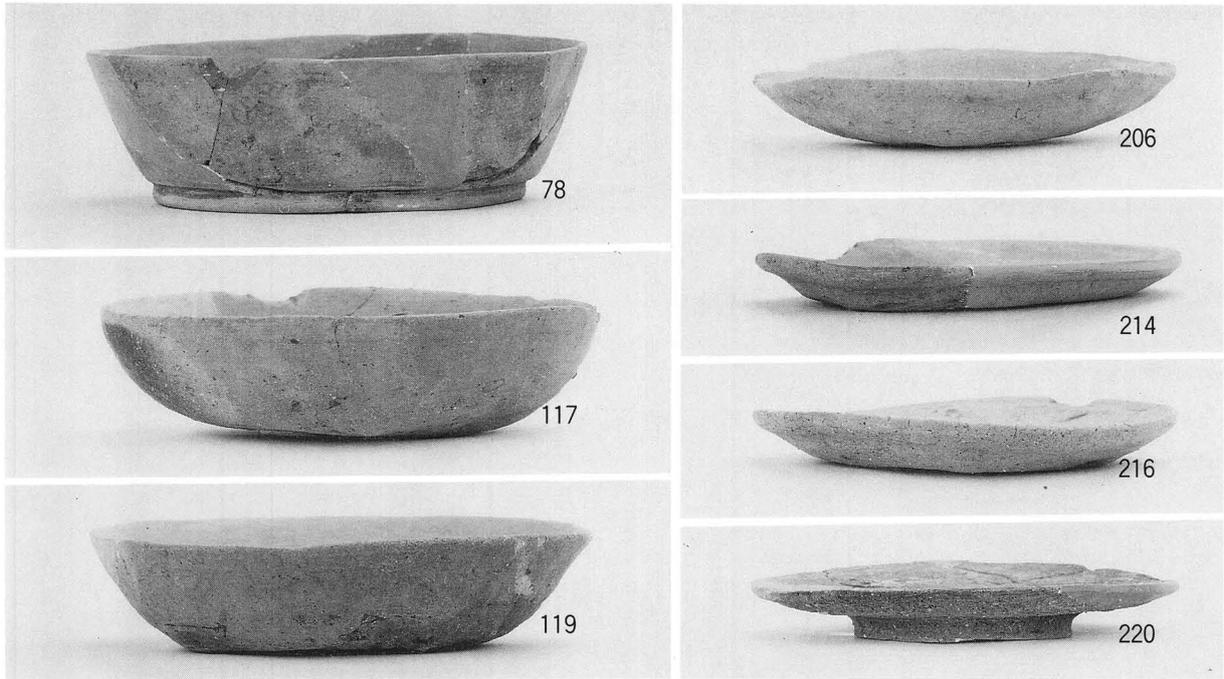


K D S 94 第5トレンチ全景 北から

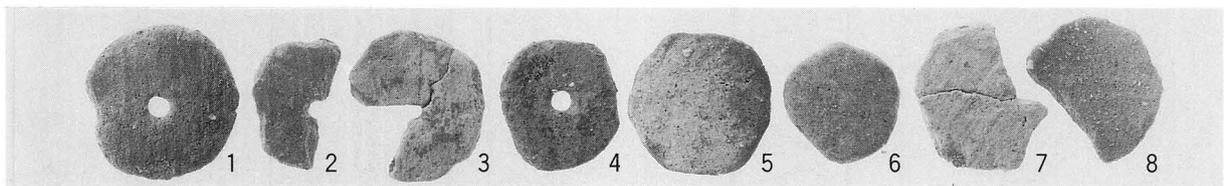


K D S 94 第6トレンチ全景 北から

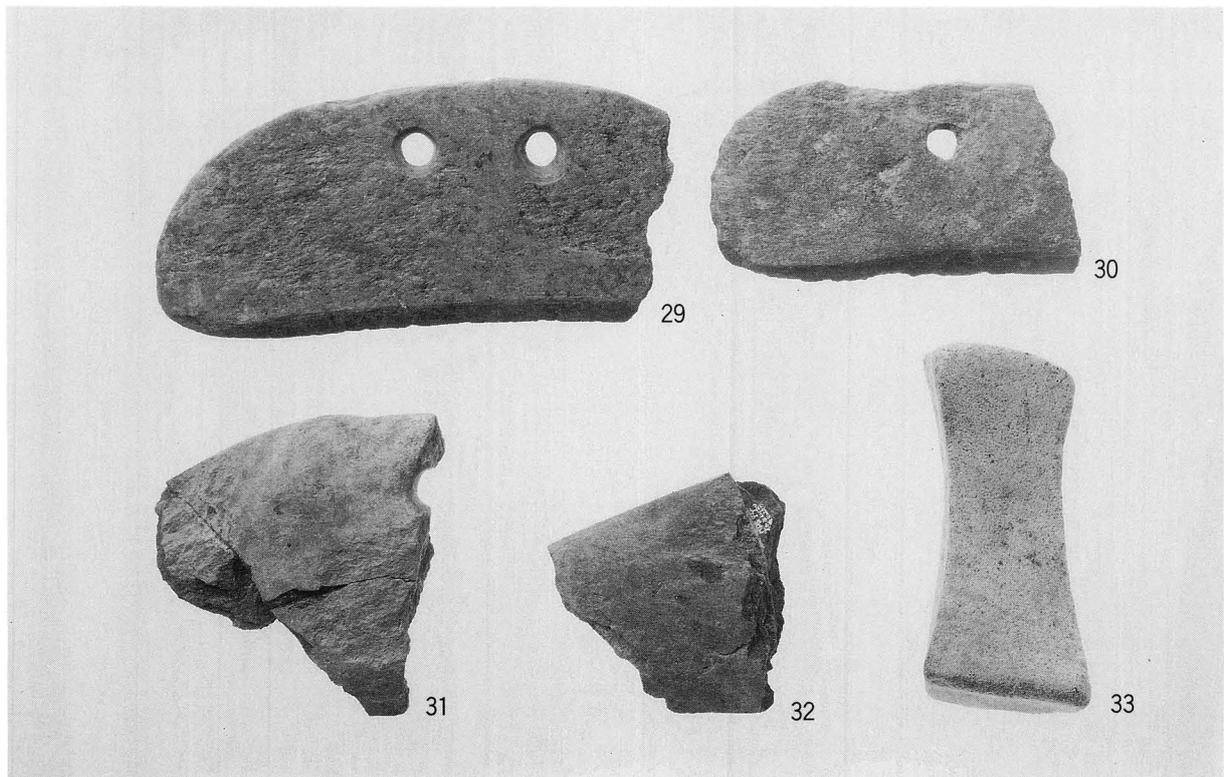




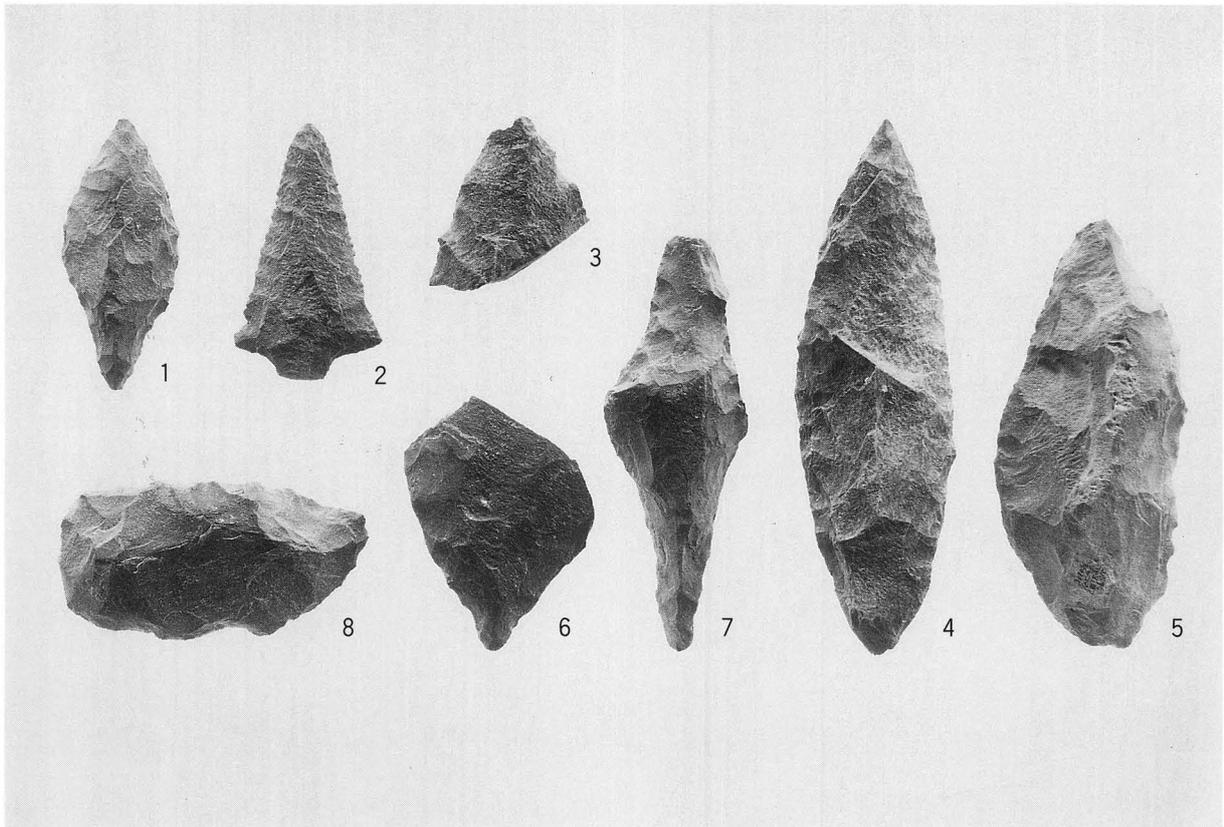
K D S94 須恵器・土師器



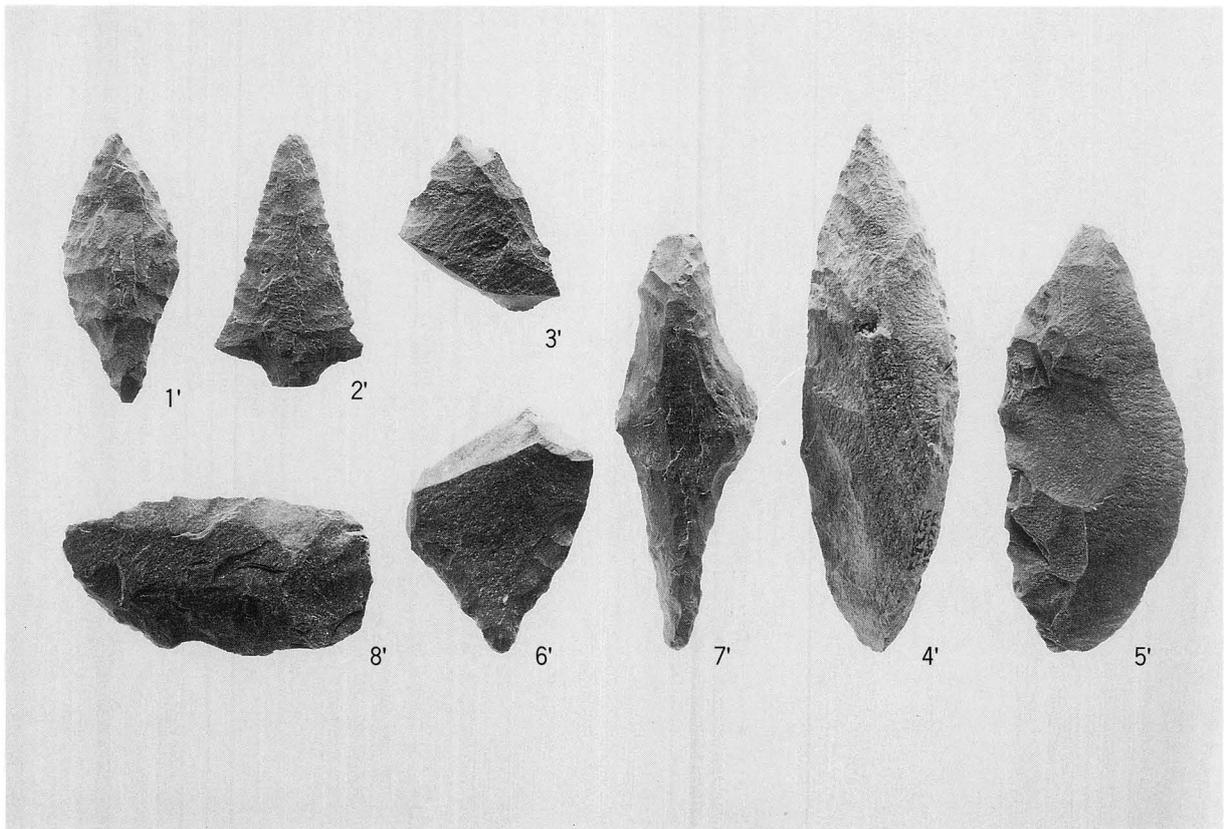
K D S94 紡錘車・円盤



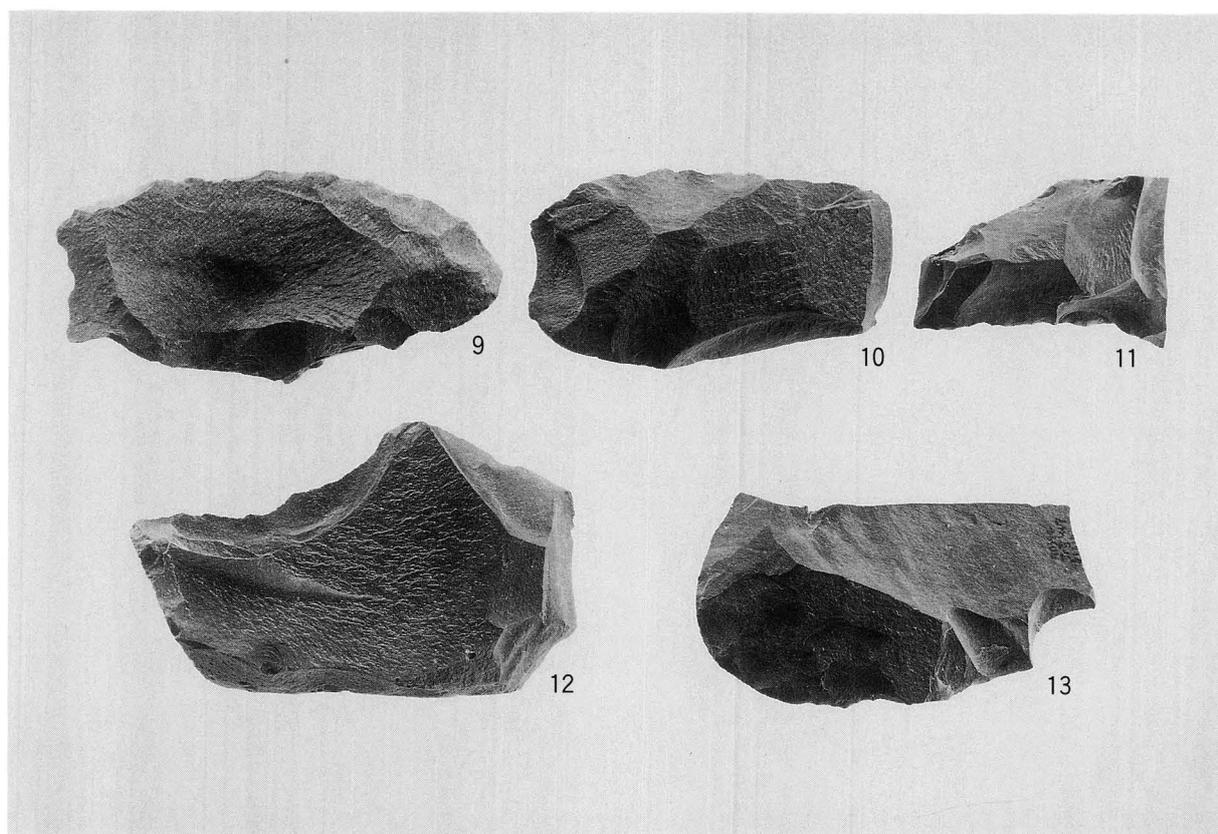
K D S94 石砲丁・砥石



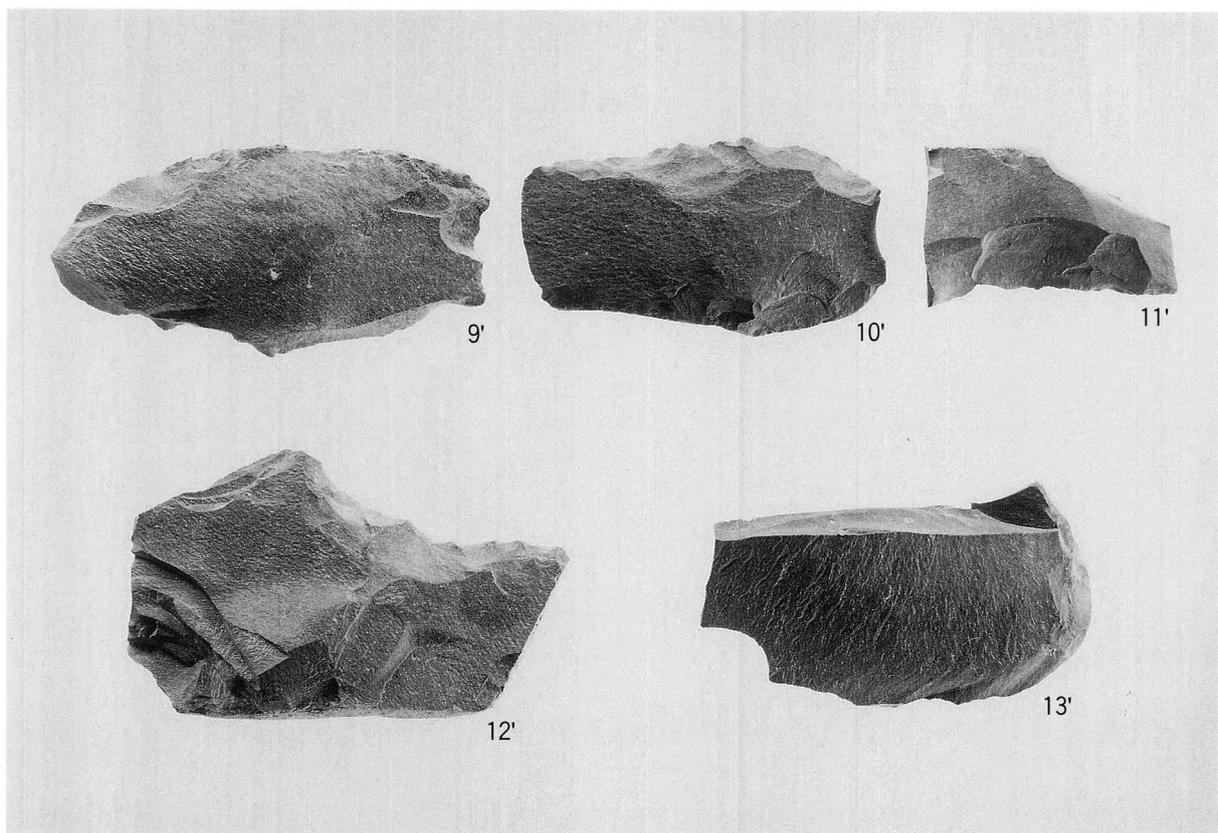
K D S94 石鏃・石槍・石錐・石小刀 (表面)



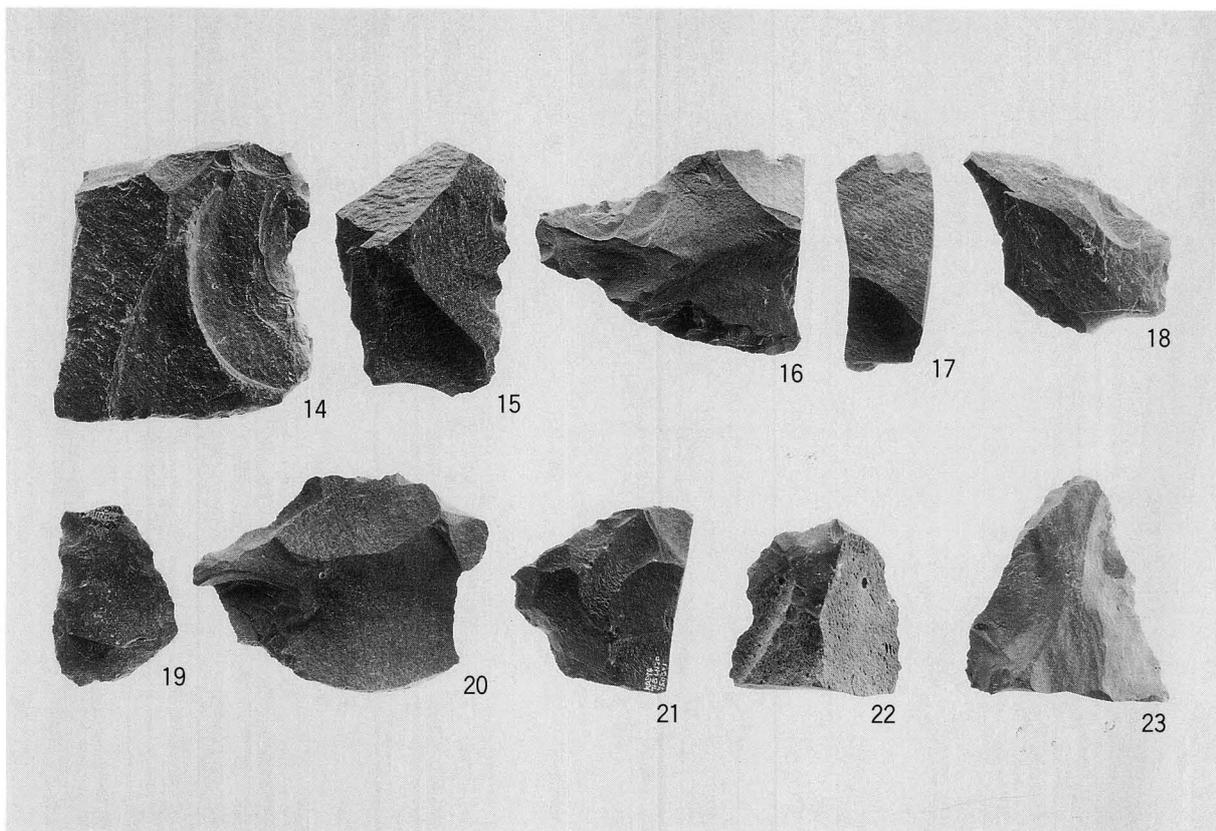
K D S94 石鏃・石槍・石錐・石小刀 (裏面)



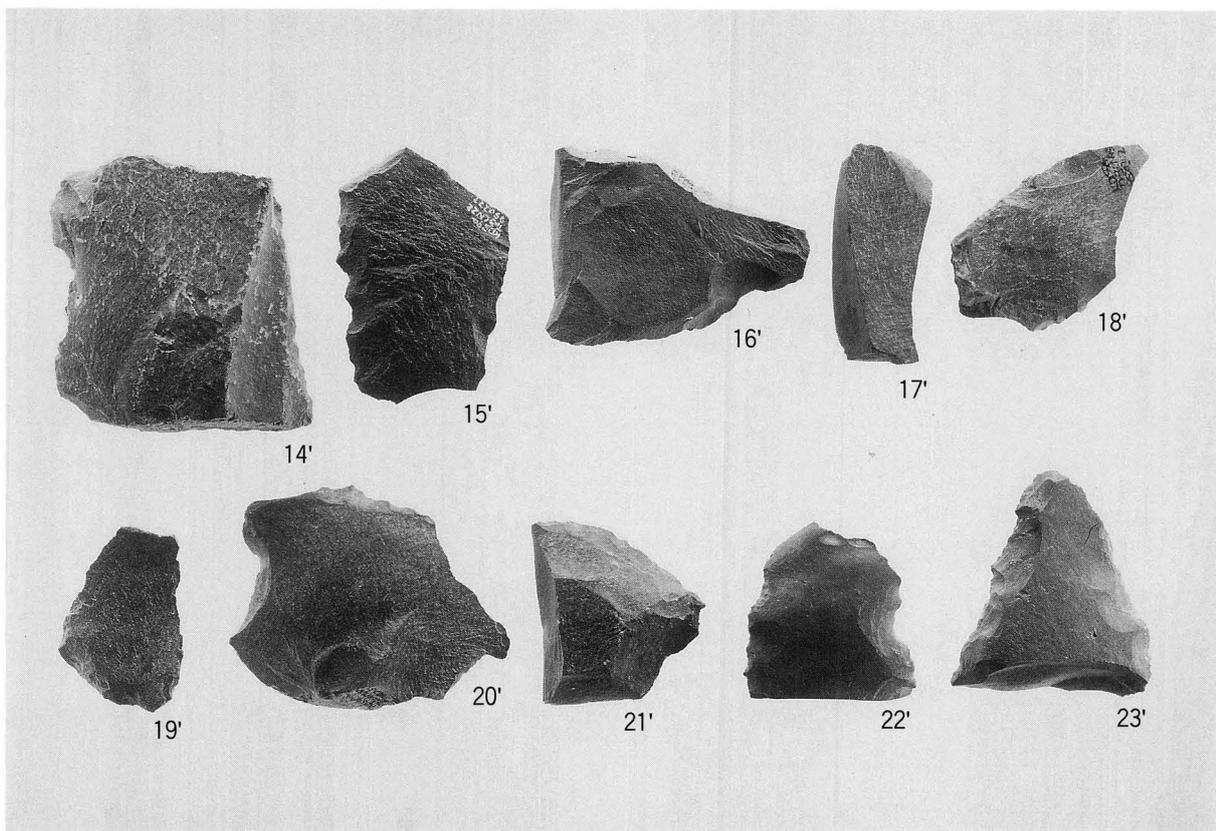
K D S 94 削器 (表面)



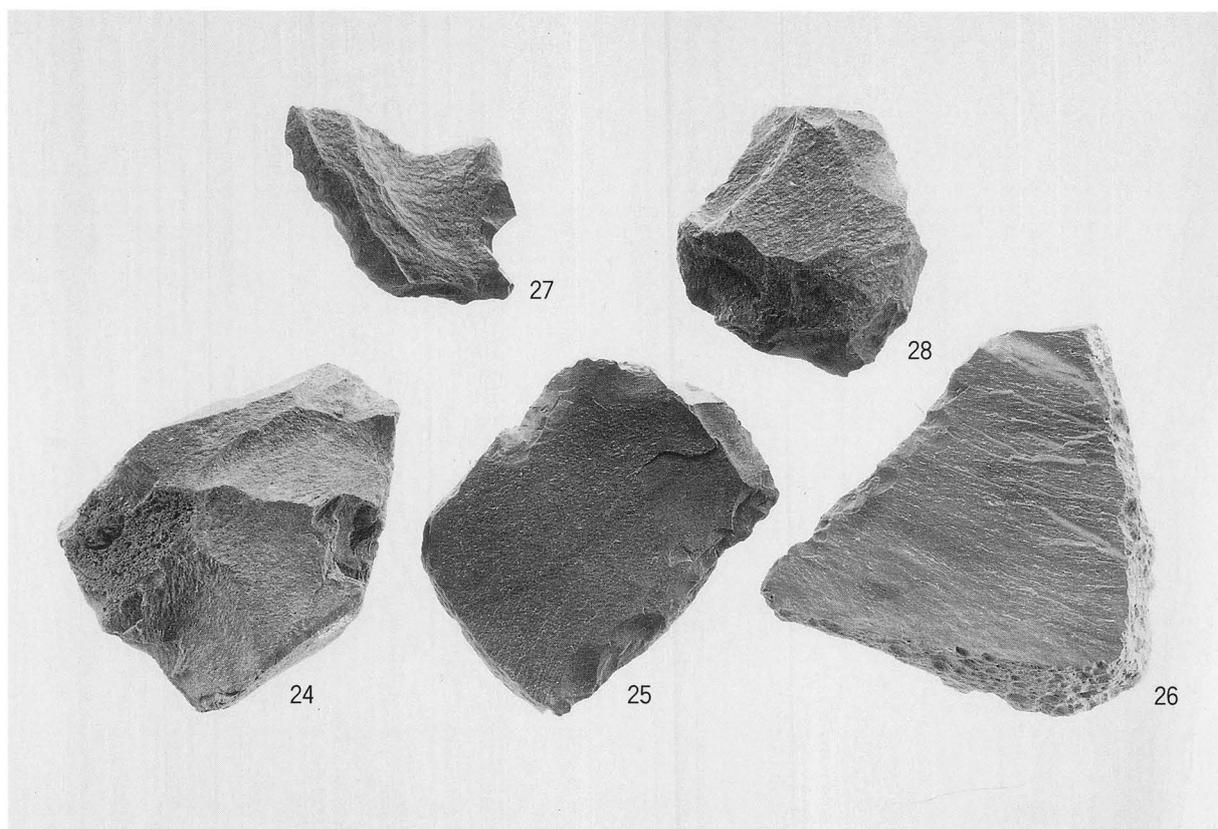
K D S 94 削器 (裏面)



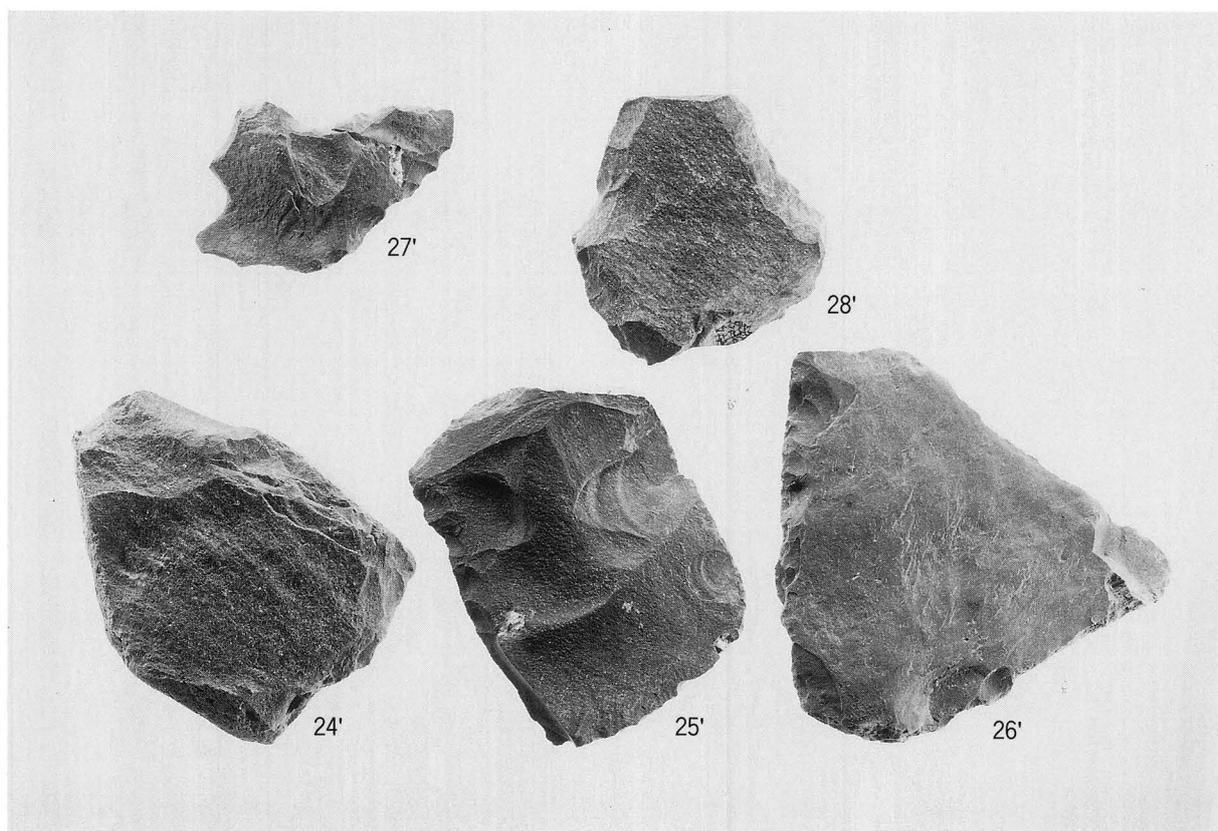
K D S 94 削器 (表面)



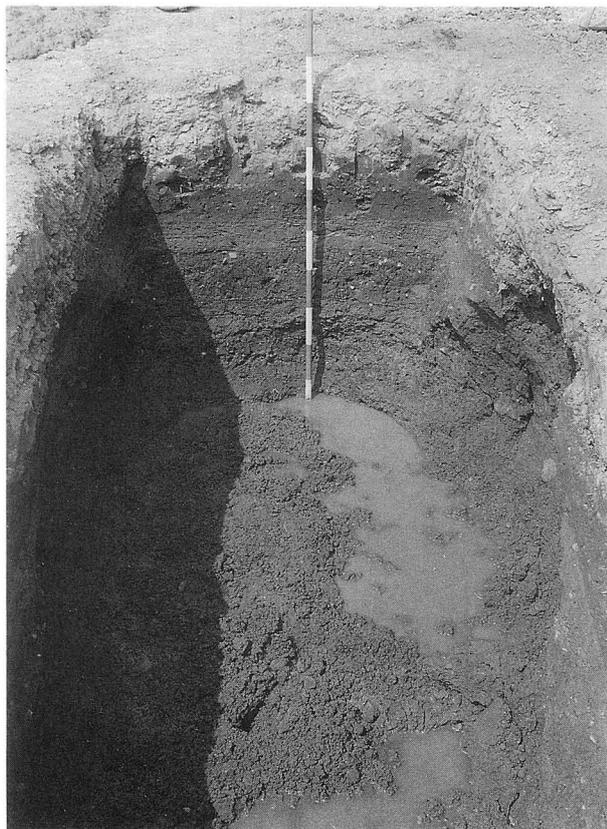
K D S 94 削器 (裏面)



K D S94 削器 (表面)



K D S94 削器 (裏面)



錦織南遺跡 (N K S95) 第1トレンチ全景 南から



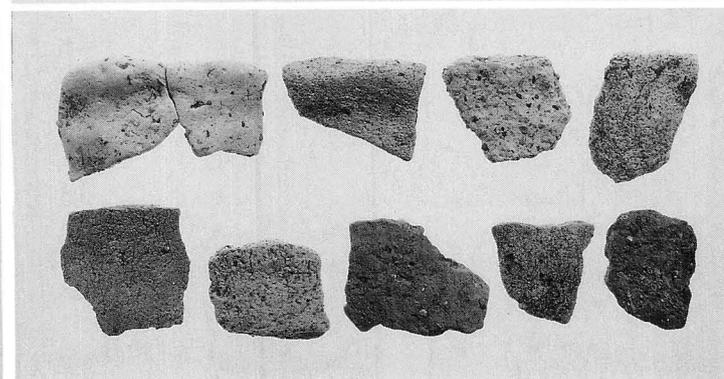
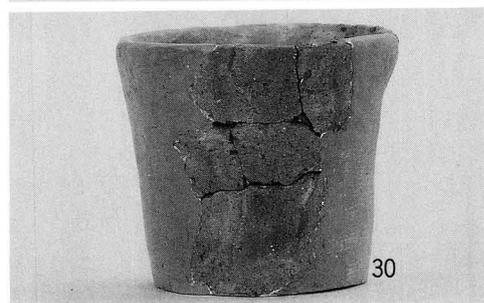
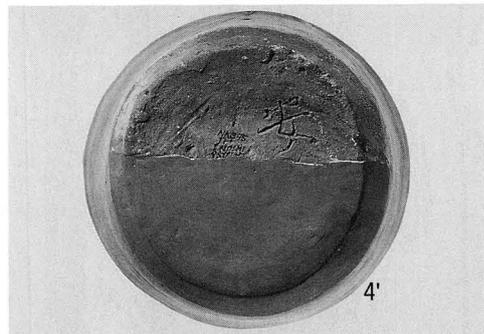
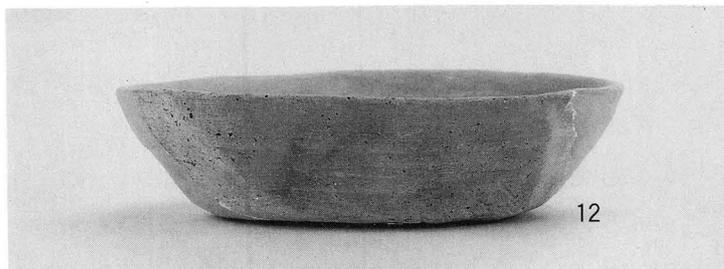
N K S95 第2トレンチ全景 南から



N K S95 第2トレンチ東壁断面 西から



N K S 95 第3トレンチ全景 南から



N K S 95 出土遺物

富田林市埋蔵文化財調査報告27

発行年月日 1996年3月29日

編集・発行 富田林市教育委員会

住 所 富田林市常盤町1番1号

印 刷 橋本印刷株式会社

